宮城県文化財調査報告書第 183 集

名 生 館 遺 跡ほか

平成 1 2 年 3 月

宮城県教育委員会

序文

21世紀の到来を目前に控え、ゆとりや豊かさを目指すことが重要になってきた中で、各自治体では風土に根ざした地域の活性化を推進するため、郷土の文化財を再認識し、それを地域づくりの拠点として整備し、活用しようとする考えが以前にも増して多くなってきております。

宮城県においても県民の多様なニーズに対応して、潤いのある生活の実現と魅力あるふるさとづくりを目ざし、新世紀に向けた新たな県土づくりへの取り組みを積極的に推進しているところであります。

しかし一方では、近年の本県における道路建設やほ場整備をはじめ、大規模な土地区画整理や 住宅建築などの生活関連の各種開発事業が年を追うごとに激化しており、これらの開発によって 埋蔵文化財が破壊・消滅の危機にさらされることが多くなってきています。

当教育委員会としても、文化財が我が国の長い歴史の中で生まれ、育まれ、今日まで守り伝えられてきた国民共有・地域固有の財産であるという認識に立って、各市町村教育委員会と共に開発関係機関等との十分な協議を通して、貴重な文化財を地域で保存・活用し、後世に伝えることに努めているところです。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき、平成 11 年度に当教育委員会が国庫補助金を得て行った発掘調査及び確認調査の成果を収録したものであります。今回の調査成果が県民の多くの皆様や各地の研究者に広く活用され、地域の歴史の解明と文化財保護の理解に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、各遺跡の保存や保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力をいただきました関係諸機関をはじめ発掘作業にあたられた皆様に対し、深く感謝申し上げる次第です。

平成 12 年 3 月

宮城県教育委員会 教育長 柿 崎 征 英

平成 11 年度発掘調査の概要

宮城県教育委員会が平成 11 年度に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金(総事業費 7,200 千円、補助率 1/2)を得て実施した発掘調査は4ヶ所、分布調査は1市2町である。

名生館遺跡は古川市大崎の台地上に立地している。平成7年度に国指定史跡である名生館官衙遺跡の西側から南側一帯が県営ほ場整備事業計画地内に含まれたのに伴い、平成10年度から発掘調査を進めている。今年度の調査は、昨年度調査地点の南側に展開する水田部分を対象とした、道路敷にかかわる確認調査と水路敷にかかわる事前調査である。その結果、古代の掘立柱建物跡66棟・竪穴遺構10基・溝跡74条・井戸跡14基・土壙56基、近世の窯跡などが発見された。

萩田遺跡は高清水町中部、透川右岸に面した丘陵麓に立地する縄文・弥生時代、古代の遺跡である。平成7年度にこの一帯が県営ほ場整備事業とかかわりをもったため、平成8年度に遺跡北端で確認調査を実施した。その結果、縄文時代晩期末から弥生時代初頭の土偶が発見されたため、この遺跡の取扱いについて関係機関と保存協議を重ね、水田面・道路敷は削平を受けることなく保存されることになった。しかし、水路部分は工事の際掘削を避けることができなかったので、今回事前調査を行った。調査の結果、古代以降の掘立柱建物跡3棟・溝跡7条が発見された。

桑畑A遺跡は栗駒町北西部、三迫川左岸の段丘上に立地する。平成9年度の確認調査の結果を踏まえ、用水路建設に伴う事前調査を実施した。その結果、縄文時代後期の竪穴住居跡1軒・土壙22基などが発見された。

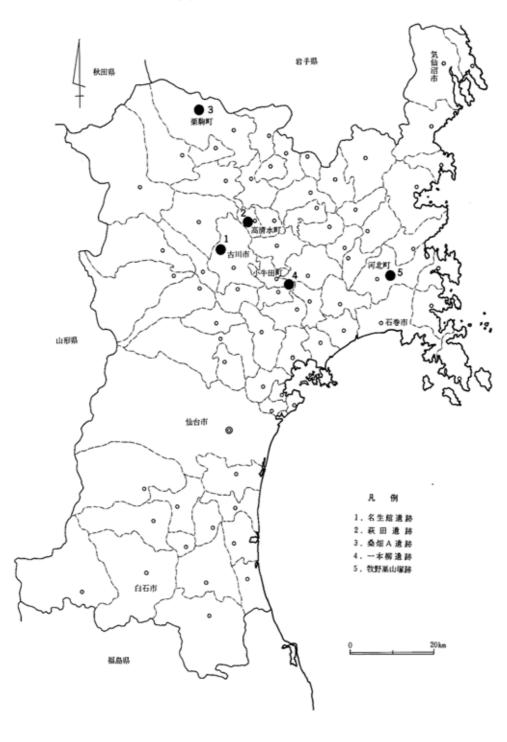
一本柳遺跡・小沼遺跡は小牛田町南東部、鳴瀬川左岸の自然堤防上に立地している。一本柳遺跡は宮城県教育委員会が平成7年から5カ年にわたって、鳴瀬川の堤防改修と中流堰建設に先立って遺跡の南側を事前調査した際に、古代から中世にかけての大規模な集落跡・屋敷跡を確認している。今回の調査は、遺跡北側に計画された県営ほ場整備事業に伴う水路部分の事前調査であり、古代の溝跡6条・畦畔状遺構2条・土壙3基、中世の掘立柱建物跡2棟・溝跡1条などが発見された。小沼遺跡では地山まで削平が及んでおり、遺構・遺物はみられなかった。

この他、昨年度 3 月に農業貯水槽建設に伴って調査した河北町牧野巣山塚跡も併せて収録した。 この遺跡はは当初周知されていなかったが、丘綾上の貯水槽建設地内に塚跡 1 基が発見されたこと から、事前調査を実施した。

No.	遺跡名	所 在 地	開発事業の種類	開発担当部局
1	名生館遺跡	古川市大崎	県営ほ場整備事業	古川農林振興事務所
2	萩田遺跡	栗原郡高清水町字上萩田	県営ほ場整備事業	築館農林振興事務所
3	桑畑A遺跡	栗原郡栗駒町沼倉字桑畑	国営附帯県営かんがい排水事業	築館農林振興事務所
4	一本柳遺跡他	遠田郡小牛田町一本柳	県営ほ場整備事業	古川農林振興事務所
5	薬師堂遺跡他	角田市枝野	開発区域内の遺跡の確認調査	
6	大谷地遺跡	加美郡色麻町小栗山字新下原	農地改良事業	個人
7	かめ塚古墳他	岩沼市他2町	詳細な分布調査	

平成11年度国庫補助事業一覧

宮城県全図



目 次

平成 11 年度発掘調金	1の概要					
名生館遺跡・・・・・・・	• • • • • •	• • • • • • •	• • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • •	1
萩田遺跡	• • • • • •	• • • • • • •	• • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • •	79
桑畑A遺跡・・・・・・・	• • • • • •	• • • • • • •	• • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • •	91
一本柳遺跡・・・・・・	• • • • • •	• • • • • • •	• • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • •	109
牧野巣山塚跡・・・・・		• • • • • • •				119

例 言

- 1. 本書は宮城県が平成 11 年度の埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当して実施した発掘調査の報告書である。
- 2. 各遺跡の発掘調査から調査報告書にいたる一連の作業は、調査原因となった開発行為にかかわる機関の依頼を受けて文化財保護課が行ったものである。
- 3. 各遺跡の保存協議や発掘調査にあたっては、開発担当部局や地元教育委員会から多大な協力をいただいた。
- 4. 本書に使用した土色の記述は、「新版標準土色帳」(小山・竹原:1973)を参照した。
- 5. 本書に使用した各遺跡の位置図は、建設省国土地理院発行の 1/25,000 もしくは 1/50,000 の地形図を複製して使用した。
- 6. 本書の図中の座標値は、国家座標第X系による。
- 7. 本書は調査員全員の協議を経て、下記のものが執筆・編集した。

平成 11 年度発掘調査の概要 阿部 博志

名生館遺跡 村田 晃一・天野 順陽・吉野 武

萩田遺跡吉野武桑畑 A 遺跡伊藤裕一本柳遺跡茂木好光牧野巣山塚跡岩見和泰

8. 発掘調査、遺構・遺物の整理、報告書の作成にあたって、次の方々からご教示いただいた(五 十音順)。

大谷基・佐々木和典・佐藤優・鈴木勝彦・高橋誠明・千葉孝弥

9. 発掘調査で出土した遺物、調査記録類は宮城県教育委員会が保管している。

名 生 館 遺 跡

目 次

第一章 遺跡の概要
. 遺跡の位置と地理的環境 1
. 名生館官衙遺跡、名生城跡の調査成果
. 遺跡周辺の歴史的環境
第二章 調査に至る経過と調査方法
. 調査に至る過程
. 第1次調査の成果6
. 調査の方法
第三章 発掘調査の成果
. 基本層序
. 発見された遺構と遺物 11
第四章 考察60
第五章 まとめ67
引用・参考文献68
写真図版放示に、 エラー! ブックマークが定義されていません。
調査要項
阴 且 女 块
遺 跡 名:名生館遺跡(みょうだていせき)(宮城県遺跡地名表記載番号27018、遺跡記号PJ)
所在地:宮城県古川市大崎字名生館他地内
調 査 原 因:東大崎地区県営ほ場整備事業
調 査 主 体:宮城県教育委員会
調 査 担 当:宮城県教育庁文化財保護課
村田晃一、茂木好光、伊藤裕、菅原弘樹、天野順陽、吉野武
調 査 期 間:平成 11 年(1999 年)10 月 4 日~12 月 13 日
調査対象面積:約 3,490 ㎡
調 査 面 積:約 2,490 ㎡(窯跡 A ~ D トレンチの 330 ㎡を含む)
調 査 協 力:宮城県古川農林振興事務所、大崎土地改良区、古川市教育委員会、JR東日本川渡
保線区、奥田建設
調査参加者:大場かつ子、笠原きえ子、笠原すみ子、笠原ましゑ、笠原みよ子、加藤みき子、
鹿野しみ子、鹿野まき子、鹿野田雪子、鹿野田洋子、佐々木栄子、佐々木敬子、
サクナけつう けん大洋知フ 苔原剛 苔原啄 育ぜナコフ 笠取たて 藤原キュス
佐々木はつえ、佐々木満智子、菅原剛、菅原隆、高城キヨ子、舘野信子、藤原きみゑ、

整理参加者:大沼美代子、佐々木喜代子、白石公子、瀧澤恵子、古川満津子

第一章 遺跡の概要

. 遺跡の位置と地理的環境

名生館遺跡は、古川市大崎字名生館・城内・名生北館・名生小野柄堂・名生上代・名生小館・弥栄に 所在する。遺跡は大崎平野の北西端にあり、JR陸羽東線東大崎駅の西側にひろがる。奈良・平安時代 に古代陸奥国府であった多賀城跡の北西約 40 kmに位置する。

地形を概観する。江合川と鳴瀬川の沖積作用によって形成された大崎平野は、県内最大の内陸盆地で東西約13km、南北約17kmの広さをもっている。平野の四周は、主として第三系中新統および鮮新統からなる丘陵で、東は広渕丘陵が南北に延び、南と北はそれぞれ三本木丘陵、清滝丘陵が西から東へ延びている。西は江合・鳴瀬川の両河川が形成した扇状地が段丘化した高位段丘面(通称:青木原台地)が発達し、ゆるやかに傾斜(0.7~0.8度)しながら北西から南東に舌状に延びて沖積面下へ没している。高位段丘は第四期更新世に噴出した淡紅色を呈する浮石凝灰岩(柳沢凝灰岩)を主体とした堆積物で構成される。沖積地との漸移付近は礫・砂などの河岸段丘堆積物から成り、尾花沢-肘折テフラ層をはさむところもある。

遺跡はこのような江合川右岸の高位段丘の南東端に立地している。標高は約 43~45m、沖積地との 比高は約 10~12mある(第4図)。

本遺跡はこれまで地形的条件から、東限と北限は段丘崖まで、南限は小館地区の南側に東から入り込む沢まで、一方、西限は地形的に把握するのは不明瞭であるが、これに遺物の散布状況等を考慮して東西約800m、南北約1000mを遺跡の範囲と考えていた。そして、このなかでも官衙政庁跡が確認された北東部の城内地区ほかは、平成6年に国指定史跡に認定され、名生館官衙遺跡として登録されている。

しかし、その後行なわれた本遺跡の確認調査(天野:1999)や本遺跡の西から南に位置する上代遺跡の発掘調査(菅原:1997)の成果などから、遺跡はさらに南方と西方に延びることが確認された。したがって古代の名生館遺跡周辺は、本遺跡と伏見廃寺跡、上代遺跡、高幌遺跡がたがいに接し(第1図)相互に密接に関わっていたとみられるようになった。

. 名生館官衙遺跡、名生城跡の調査成果

遺跡からは古代の土器や瓦が出土している。このうち瓦の分布状況は、城内地区と小館地区南東部の2箇所に集中する。両地点から出土する瓦は文様や製作技法に違いがみられ、城内地区の瓦は多賀城創建より古い山田寺系単弁蓮花文軒丸瓦、ロクロ挽き重弧文軒平瓦であるのに対し、小館地区南東部の瓦は多賀城創建期の重弁蓮花文軒丸瓦である。また、本遺跡から南約1kmにある「伏見」という地名が「和名類聚抄」の玉造郡俯見郷とみられることから、名生館遺跡周辺が古代に玉造郡に属していたと考えられている。

以上のことから本遺跡は「天平の五棚」である玉造棚の有力な擬定地と考えられ、遺跡北東部は昭

和55年から宮城県多賀城跡調査研究所が6年間調査を行ない、その後昭和62年からは古川市教育委員会が発掘調査を引き継いで現在も継続中である(宮城県多賀城跡調査研究所:1981~1986、古川市教育委員会:1987~)。

これまでの調査の結果、本遺跡は7世紀後葉~9世紀代の官衙跡で、大別 期に分けて遺構変遷が考えられている(鈴木:1991)。政庁は第 期(7世紀末~8世紀初頭)が城内地区、第 期(8世紀前半 ~後半)は小館地区南東部、第 期(8世紀後半から9世紀)は小館地区西部へと、時期ごとに遺跡内を移動していることがわかった。

政庁の構造は第 期と第 期が明らかとなっている。前者は北辺中央部に 7×5 間の四面廂付き瓦葺建物である正殿を置き、西辺に梁行 2 間、桁行 10 間と 8 間の長屋を南北に並べ、これらの建物に取付く掘立柱塀が東西半町、南北半町強の範囲を囲んでいる。正殿東には 3×2 間の東西棟を置くが、前面は広場としている。第 期政庁は半町四方を回廊で囲み、南辺中央に四脚門を、その北に目隠塀を置いている。内部は広場を囲んで正殿、脇殿が「品」字型に配されており、1 度建替えられている。建物規模・構造は正殿が 4×2 間の側柱建物、西脇殿が 5×2 間の総柱建物である。

本遺跡の性格は明確な外郭区面施設をもたないこと、第 期政庁の構造が広島県下本谷遺跡(備後国三次郡家)に類似することなどから城地ではなく、第 期官衙は和銅6年(713)に建郡された丹取郡家および前身の評家、第 ・ 期官衙は神亀5年(728)前後に成立した玉造郡の郡家と考えられている。そして、第 期の創建や第 期・第 期官衙の造営にあたっては、関東地方や陸奥南部からの移民が大きくかかわっていたと考えられている(進藤:1990、高橋・村田:1996)。

名生館遺跡は室町・戦国時代に奥州探題大崎氏の居城、「名生城」が築かれた場所でもある。城の規模や構造などの詳細は不明だが、随所に土塁や堀跡などが認められるほか、「大崎」「名生館」「城内」「小館」などの字名や「北館」「内館」「大館」「二の構」などの地名に当時の名残りをとどめている。これまでの調査で、城内の各所から堀跡や溝跡、掘立柱列跡などが、内館地区からは名生城期とみられる多量の炭化米が検出されている。肝心の建物については不明であったが、古川市教育委員会による昨年度と今年度の調査で城内地区南部から大型の総柱建物跡(9×5間)が検出されており、名生城内の主要施設についても少しずつわかるようになってきた(佐藤・大谷:1999)。

·遺跡周辺の歴史的環境(第1図)

ここでは、発掘調査によってある程度様相が明らかとなってきた、7世紀~8世紀前半の本遺跡周辺の様子について述べる。これはまさに、名生館が官衙(評家 郡家)として機能していた時代(第 期 ~第 期)にあたる。

6世紀後半以降、大崎平野の周縁部では群集墳や横穴墓が次々と造られる。これら墳墓造営のピークは7世紀中葉とみられ、これに少し遅れて7世紀後葉には大崎平野の一部(おそらく西から南の地域)に建評が行われた。8世紀前葉になるとこれを踏まえて大崎地方一帯に建郡が行われる。黒川以北十郡の成立である。各郡には郡家が置かれたが、これに加えて本地域の律令制支配を特徴づける城棚も各地に造営・整備された(天平の五棚)、城棚は一つの郡又は複数の郡を管轄する施設で、長官で



第1図 名生館遺跡と周辺の遺跡

ある城司には国司四等官・史生、鎮官などの中央派遣官が任命された(今泉:1992)。これらの郡家や城柵には付属寺院が伴うものがある。大崎平野北縁の丘陵は多くの城柵官衙が造られており、車で 10 分も移動すれば次に至ってしまう、日本でも例をみない官衙密集地帯である。こうした建郡、官衙造営・大改修に密接にかかわったのが、陸奥南部や関東地方からの移民である。大量の人の動きによって、土器や住居形態、墳墓構造、地名などがもたらされた。

名生館遺跡周辺の7世紀から8世紀前半の遺跡をみると、墳墓で時期の明らかなものは江合川をはさんだ反対側(左岸)の丘陵に認められる。群集墳は日光山古墳群や塚原古墳群があり、横穴式石室の玄室平面形は胴張りである。横穴墓は川北横穴墓群や小野横穴墓群がある。川北横穴墓群は宮城県内でも有数の規模をもち、数百基を超えると考えられている。小野横穴墓群は朽木橋・羽黒・白山・小高・岩崎・馬籠の6支群からなり、朽木橋支群では玄室が複室構造となるものや、玄室平面形の類例が関東地方に求められるものがある(古川:1996)。このほか、新谷地北遺跡から8世紀前半から10世紀前半以降にかけて造られた木棺墓が100基検出されており、墓域はさらに調査区の南北に拡がると考えられる(木皿・早川:1992)。

城州官衙とその関連遺跡としては、まず本遺跡の南1kmにある伏見廃寺があげられる。金堂跡とみられる乱石積み基壇が確認され、周辺からは名生館遺跡第 期郡庁院と同笵、同類の瓦や多賀城跡政庁第期の瓦が多数出土しており、名生館官衙の付属寺院と考えられる(佐々木:1971、進藤:1990)。また、本遺跡の南西4kmには色麻州跡推定地の城生伊跡と付属寺院の菜切谷廃寺跡があり、そのさらに西には賀美郡家跡の東山遺跡がある。

江合川を越えた東方 5 kmには、城州でも最大級の規模をもつ宮沢遺跡(玉造州跡推定地)があり、南東に隣接する三輪田遺跡は付属寺院跡と考えられている。さらに東の小丘陵と裾部には権現山遺跡がある。外郭は三辺に大溝と棚を巡らし、南は東流する川に接続する環濠集落とみられ、内部は掘立柱建物を主体とし、それらがブロック毎に棚や溝で区画されている。開始時期は 7 世紀後葉以降で、宮沢や三輪田の創建に先行することから、その造営にかかわる集落とみられる。

名生館と宮沢のほぼ中間からも、築地を巡らす官衙跡が確認されている(杉の下・小寺遺跡)。昨年度の調査では、遺跡南東端付近から大型の瓦葺き総柱建物を含む複数の建物跡が検出されている。年代は8世紀前半代に遡る可能性がある。さらに杉の下の南東1kmに位置する南小林遺跡でも多賀城創建前の瓦葺き総柱建物跡が検出されている(古川市教育委員会:2000)。こうした城栅官衙の立地をみると、7世紀代に創建された名生館や南小林が段丘や自然堤防に立地するのに対し、8世紀以降の創建とみられるものの多くが丘陵やその末端に立地することから、創建時期による官衙立地の傾向性が指摘できる。

大崎地方における関東系土師器を出土する遺跡数のピークは7世紀後葉から8世紀前半である。名生館周辺でも、本遺跡はもちろん集落跡の上代遺跡、墳墓の日光山・塚原古墳群、川北・小野横穴墓群・新谷地北遺跡、官衙跡の南小林遺跡や宮沢遺跡、宮沢の付属寺院である三輪田遺跡、両者の造営にかかわったとみられる権現山遺跡などから出土している。権現山では7世紀後葉から8世紀前葉の土師器のうち、約7割が関東系土師器であるとの指摘がある(高橋・村田:1996)。いかに大量の人々

の移住が行われたかが想像されよう。

関東系土師器の出土地は墳墓を除くと官衙・寺院やその周辺であること・大崎地方のピーク期が官衙・寺院の造営や改修期(=建評・建郡期)であることを考えると、関東からの移民はこれらに深く関与していたと考えられる(村田:1995)。最近ではこれらの移民について、関東系土師器と墳墓(群集墳の石室構造 横穴墓の玄室形態) 双方の系譜を追うことによってその出自が明らかになりつつある(古川:1996)。

8 世紀前半の多賀城創建期は、大崎地方の各所に窯が営まれる。ここで生産された瓦や須恵器は 多賀城はもとより黒川以北十郡の城棚官衙・寺院・墳墓・一部の集落へ供給されている。多賀城を 頂点とした窯業生産品の供給ネットワークが構築・整備されるのである。名生館遺跡の南 10 kmに ある日の出山窯跡群はそれが最も整備され、供給量がアップした段階、東 2 kmにある大吉山窯跡は 最後の段階の窯跡である。

このように大崎平野は、7世紀後葉から8世紀前半の城棚官衙跡、寺院跡、生産遺跡が多く認められる。多賀城創建前、北へ約40㎞離れた大崎平野に律令国家の支配拠点を置き、ある程度の安定をみた8世紀前葉に郡を再編成し、それらを管轄する城棚を設置した。多賀城の創建はこうした大崎地方の拠点施設の創建・大改修の時期に一致する。官衙創建が大崎地方における城棚官衙のなかでも最も早い段階に位置付けられる名生館遺跡は、当地域における律令制支配の成立と浸透過程を知る上できわめて重要な遺跡といえる。

第二章 調査の経過と調査方法

. 調査に至る過程

平成 8 年度に宮城県農政部農地整備課から古川市東大崎地区県営ほ場整備事業の計画が持ち上がった。ほ場整備事業の対象となる東大崎地区・名生北館地区ほかは、当時、遺跡としては登録されていなかったが、国指定史跡名生館官衙遺跡や中世の大崎氏の居城跡である名生城跡と隣接する地域であるため、これらに伴う遺構が引き続き存在することが予想された。そこで、ほ場整備事業に先立ち文化財保護課が平成 8 年 11 月 12 日~29 日に遺跡の範囲、遺物の有無、そして現田面から遺構面までの深さなどを調べる試掘調査を行ない、事業計画に反映させるとともに、事前調査の作業量を算出する基礎資料を得た(天野:1999)。

試掘調査の結果、沢や湿地を除くほ場整備対象地域のほぼ全域で遺構が確認され、本遺跡南側の上代遺跡や南西の高幌遺跡と一連のものと認識されるに至った。遺構の密度は遺跡東側の東大崎駅付近や南西部の高幌遺跡付近が比較的濃い傾向にあったものの、全体的に密度が薄い。しかし、連続して遺構が認められることから全体的には相当数の遺構が存在しているものと予想された。

遺構の種類は掘立柱建物跡・竪穴住居跡・竪穴遺構・井戸跡・土壙・溝跡・堀跡などであり、このう ち溝跡、土壙は全域で認められるが、掘立柱建物跡、竪穴住居跡は北側の段丘付近や東大崎駅付近 に多く分布する傾向が認められた。

また、道路・水路部分の調査に直接は関係ないが、東大崎駅から西へ約200m地点の農道、用水路に近世の窯跡に伴うものと思われる焼台と、陶器片が多数散乱していた。詳細は不明であるが、「大崎窯跡」と考えられた。

上述の成果を基に農地整備課と文化財保護課が話合いを行なった結果、田面はすべて 1m以下の盛土 工法で対応し、水路と道路部分が調査対象となった。このうち水路は遺構面まで掘削が及ぶため事前調 査を行なうが、道路部分は未舗装で削平も遺構面に及ばないことから基本的に遺構確認に留めることと なった。また、窯跡については位置や規模を確認する調査を行なうこととなった。

調査対象地域は調査着手順に第 工区~第 工区に区分され、調査期間は各工区1年の計3年と積算された。第1次調査は第 工区(A~K区)を対象に平成10年10月19日~12月18日に行なった。今年度の第2次調査は第 工区(L~O区)を対象に平成11年10月4日~12月13日に行なったが、東大崎駅付近は遺構が多く、当初予定していた面積の約1/4を調査するに終わった。そこで第2次調査終了後の12月20日に改めて農地整備課と文化財保護課の間で今後の調査の進め方について協議が行なわれた(第1表)。

調 査 次 ・ 期 間	ほ場整備工区	備考
試掘調査 平成8年11月12~29日		調査結果は宮文報第181集に掲載
第1次調査 平成10年10~12月	第I工区	A~K区(終了)
第 2 次調査 平成11年10~12月	第II工区東	L~O区 (終了)
第 3 次調査 平成12年 4 ~ 7 月	第II工区東	
1,742	第II工区西	
<i>:</i>	第II工区	大崎窯跡の範囲・規模の確認
第 4 次調査 平成12年10~12月	第I工区	F区東側(計画田面高変更のため)
-	第III工区北	

第1表 調査計画

ほ場整備工事開始時期

第 I 工区: 平成 11 年度(平成 11 年 8 月~) 第 工区: 平成 12 年度(平成 12 年 8 月~)

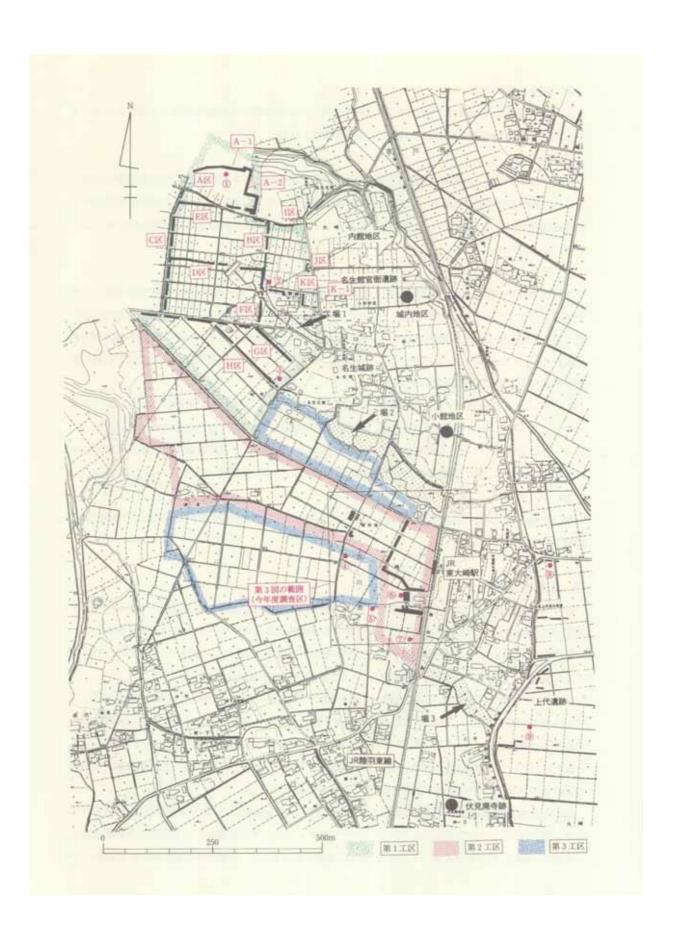
第 工区: 平成 13 年度以降

. 第1次調査の成果

第1次調査は遺跡北西部の第 工区(A~K区)を対象とし、旧石器時代~中近世の遺構・遺物が発見された。時代ごとにみてみる(第2図)。

旧石器時代

A - 1 区で石器 7 点が出土した。このうち S X I 00 旧石器集中地点から出土した荒屋型彫刻刀形石器は、県内で 2 遺跡目の出土例である。



縄文・弥生時代

A - 2 区で弥生時代天王山式期の竪穴住居跡を確認した。当該期の住居跡は県内で 5 例目となる。また、H区では縄文晩期~弥生時代の粘土採掘坑が確認された。

古墳時代

A区で円形周溝跡・土壙墓・土器埋設遺構、B・D区で粘土採掘坑を検出した。円形周溝跡は古墳とみられ、遺跡北西端部は5世紀代の墓域であることがわかった。このうちA-1区では南小泉式期の土器埋設遺構が集中して確認され、赤彩土器が出土していることからこの付近で祭祀が行なわれたことが明らかとなった。

奈良・平安時代

掘立柱建物跡、溝跡、合口甕棺墓、粘土採掘坑などを検出した。 K - 1 区の掘立柱建物跡は柱穴 1 個を確認しただけであるが、長軸 142 cm、短軸 118 cmの隅丸長方形の平面形を呈するもので、大型の建物跡である可能性が高い。位置的にも名生館官衙遺跡との境界であることから、官衙遺構との関連が注目される。 C 区 S D 224 からは斎串が出土した。周辺で祭祀が行なわれた可能性がある。来年度近隣の調査を予定しているので調査結果に注目したい。

A - 1 区の合口甕棺墓は9世紀代の乳幼児の甕棺とみられるが、この付近に墓域が形成されていたかについては不明である。C区で検出した粘土採掘坑は10世紀前葉以前で、白色粘土の採取を目的としている。その用途としては、土器製作がまず思い浮かぶが、本遺跡は7世紀後葉以降、カマド本体に白色粘土を用いている竪穴住居が多いため、カマドの構築材としての需要に応じたケースも考えられる。

中近世

掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡などがある。このうちH区で確認したSD203は名生城に伴う堀跡(第2図堀1)である。

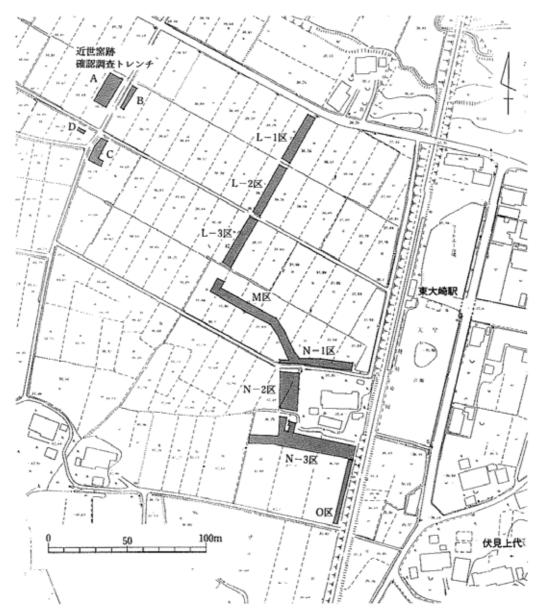
. 調査の方法

今年度の調査区はJR東大崎駅の西側で、遺跡の南東部にあたる。調査対象は道路・水路部分で、水路部分は事前調査、道路部分は未舗装であり削平も遺構面に及ばないことから遺構確認に留めた。

調査区は細長く、かつ広範囲に及ぶため、(昨年度の調査区A~K区に引き続き)L区~O区に分割し、さらに畦畔などを境にL-1区、L-2区などのように細分した調査区もある(第3図)。

ところで、平成8年度の試掘調査の際、JR東大崎駅から約200m西方に近世の窯道具や製品が散乱している地点が確認された。水路・道路部分の調査に直接の係わりはないが、付近に窯跡(大崎窯跡)の存在が予想されたため、11月19日に窯道具や製品が散乱している地点を中心にトレンチを設定し(A~Dトレンチ)、窯跡の位置や規模を確認する調査を行なった。なお、窯跡については本遺跡とは性格が異なることから、大崎窯跡(遺跡記号PZ)として登録した(註)。

検出した遺構は国家座標軸を基準線として 3×3 mグリットを設定し、1/20 平面図、1/20 断面図を作成した。写真記録については 35 mm、 6×7 モノクロ・カラーリバーサル写真によって行なった。調査は 10 月 4 日から開始し 12 月 13 日に終了した。調査対象面積は約 3,490 ㎡、発掘面積は約 2,490 ㎡(窯 跡 $A \sim D$



第3図 トレンチの位置と名称

トレンチの 330 me含む) であった。

註 本窯跡の名称については、「大崎焼」のほかに地名をとった「名生館焼」がある。『日本近世窯業史』に「大崎焼」の名があり、これが本窯跡を指すと考えられる(藤沼:1997)ため地元の古川市教育委員会と相談の上、「大崎焼」の名称に統一することとした。

第三章 発掘調査の成果

.基本層序(第4図)

本遺跡の層序は地点により層厚が異なるものの、基本的に 層:耕作土、 層:旧表土(黒ボク土) (註) ~ :ローム層、 :岩盤に大別される。以下、各層の特徴を記す。

層:耕作土である。部分的に現代の盛土が含まれる。

層:黒ボク土(旧表土)である。 層との境界に部分的に漸移層が認められる。

層:尾花沢-肘折テフラ層(肘折軽石層)で、主に遺跡北西部に認められる。

層:ソフト・ローム層(10YR5/4にぶい黄褐色)。縄文時代~近世の遺構確認面。場所によってしまりのない同色砂質シルト・粘土または白色粘土となる。

層: ソフト・ローム層 (10 Y R 5/4 にぶい) 黄褐色)。旧石器時代文化層。 層よりしまりがある。

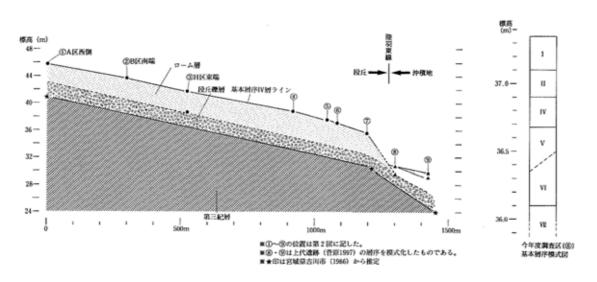
層: ハード・ローム層(10 Y R 6/4 にぶい 黄褐色)。下位は灰白色(10 Y R 8/2) 粘土になる ところもある。

層:凝灰岩層(10YR6/6明黄褐色)。

今回の調査対象である遺跡南東側をみると、 層は認められず、 ・ ・ ~ 層の層序となる。遺構確認面となる 層は場所によってしまりのない砂質シルト・粘土または灰白色粘土となっている。

また、基本層序 層の標高を比較してみると(第4図地点 ~) 北西端のA区地点 から緩やかに南東に向かって傾斜し、JR陸羽東線付近の地点 から地点 に向かって沖積地下に没していくのがわかる。これは遺跡が立地している高位段丘面の地形を反映したもので、今回はこの段丘と沖積地との漸移部分にあたる調査といえる。

註 昨年の報告書(天野:1999)に示した層序は、上述の ・ 層をまとめて 層としていたため本報告の層序とは異なっている。



第4図 基本層序

. 発見された遺構と遺物

今回、発見した遺構は掘立柱建物跡 66、掘立柱列跡 1、井戸跡 14、竪穴遺構 10、土壙 56、溝跡 74 などで、確認面は基本層序 層である。出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器、石器、石製品、木製品などで整理用テンバコで 15 箱ある。

遺構は調査対象区域北側の L 区から南側の O 区まで途切れることなく分布する。特に L - 3 区、N - 1 ~ 3 区にかけては掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡が多数検出され、竪穴遺構もこの区域に集中して認められる。一方、 L - 1 区、 L - 2 区、O 区は掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などが認められるものの密度は薄い。遺物は L - 3 区、N - 1 区 ~ 3 区の主として井戸跡、竪穴遺構、溝跡から出土しており、時期的には古代が主体である。このほか中世の陶磁器が若干出土している。

以下、L区、M区.......O区の順に調査結果を記述するが、水路や道路部分の調査であるため調査区の幅に制限があり、遺構の全容がわかるものが少ないため、調査区ごとの特徴と主要な遺構について記述し、遺構全体の属性は第2~10表に示した。

1. L区

調査対象区域北側の調査区で、農道や水路で3区に細分される(第3図)。掘立柱建物跡22、井戸跡3、竪穴遺構1、土壙18、溝跡15を検出した。遺構は調査区全体に認められるが、1区北側と3区が密度が高く、その間は比較的希薄である。このうち竪穴遺構と井戸跡、比較的大きな掘方をもつ掘立柱建物跡は南側の3区でのみ検出された。

(1) 掘立柱建物跡

22 棟確認した。調査区全体に分布するが、なかでも 3 区に比較的多く認められる。建物規模は、調査区に制約があって全容が分かるものはないが、桁行 3~4 間、梁行 2~3 間の小型のものが多く、廂が付くものや床束をもつものは少ない。建物方向は、 北で西に振れるもの(N-5°~28°-W-SB 329~331・338・508・509) ほぼ真北のもの(SB333・337・507) 北で東に振れるもの(N-7°~22°-E-SB323・324・332・334~336・339・340・506)がある。調査区ごとにみると1区は が目立ち、2区・3区は ・ が多いという傾向がある。柱穴は平面形が方形を基調としており長軸が30~40 cm前後のが大半で、方形で長軸 50~60 cmのもの(SB324)や80~90 cm(SB323)のものは少ない。埋土はいずれも地山ブロックを少量含む黒色シルト~砂質シルトが主体である。

【SB329建物跡】(第5図)

1区北側で確認した東西3間以上、南北2間以上の東西棟とみられる建物跡である。

柱穴は4箇所で検出しており、すべてで径12cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長4.46m以上、柱間寸法は東から2.12m、2.34m、梁行は不明である。方向は南側柱列で測るとE-5°-Nである。柱穴は一辺が40cmほどの不整な方形をなし、深さは38cmある。埋土は地山ブロックを含む黒色シルトが主体である。

遺物は柱穴埋土から土師器甕が微量出土している。

【SB330A・B建物跡】(第5図)

1区中央で確認した南北3間、東西2間の南北棟である。A建物からB建物へ建替えられている。SD513・514溝跡より古い。

B建物の柱穴は9箇所で検出しており、すべてで径10~12 cmの柱痕跡を確認している。平面規模は 桁行が東側柱列で総長6.06m、柱間寸法は北から2.14m、1.70m、2.22m、梁行が南妻で総長3.66m、 柱間寸法は東から1.92m、1.74mある。方向は東側柱列で測るとN-11°-Wである。柱穴は長軸40~60 cm×短軸40 cmの方形もしくは長方形で、深さは南西隅柱で24 cmある。埋土は地山ブロックを少量含む黒色シルトが主体である。遺物は出土していない。

A建物の柱穴は8箇所で検出している。これらをもとにすると、規模や方向はB建物とほぼ同じとみられる。

【SB331建物跡】(第5図)

1 区北側で確認した南北 3 間、東西 3 間の東廂付き南北棟建物跡とみられる。S K 326・490 土壙より新しい。

身舎の柱穴は7箇所で検出しており、すべてで径10~12 cmの柱痕跡を確認している。廂の柱痕跡は8 cmである。平面規模は桁行が西側柱列で総長6.04mで、柱間寸法は北から2.10m、1.90m、2.04mである。梁行が北妻で総長4.24m、柱間寸法は東から2.00m、2.24m、廂の出は2.20mである。方向は西側柱列で測るとN-11°-Wである。柱穴は身舎が長軸40~60 cm×短軸40 cmの方形もしくは長方形、廂が一辺30 cmの不整方形、深さは身舎が北東隅柱で43 cm、廂が20 cmある。埋土は地山ブロックを少量含む黒色シルトが主体である。

遺物は柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器坏・甕が微量出土している。

【SB332建物跡】(第5図)

1区北側で確認した南北2間、東西2間以上の建物跡である。

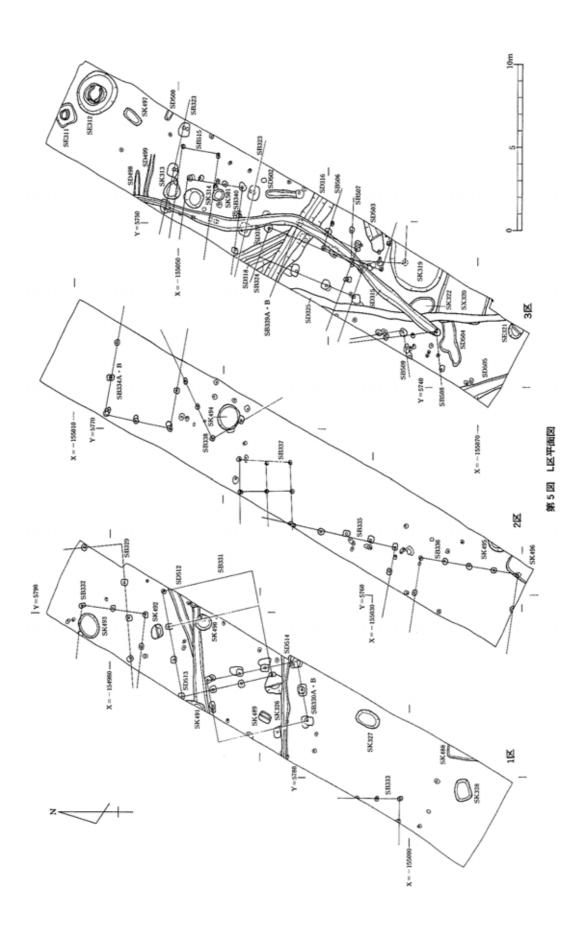
柱穴は4箇所で検出しており、すべてで径10 cmの柱痕跡を確認している。平面規模は南側柱列が総長1.88m以上、東側柱列で総長4.20m、柱間寸法は北から2.04m、2.16mである。方向は東側柱列で測るとN-7°-Eである。柱穴は一辺40 cmの不整な方形で、深さは南東隅柱で36 cmある。埋土は地山ブロックを少量含む黒色シルトが主体である。

遺物は柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器甕が微量出土している。

【SB333建物跡】(第5図)

1 区南側で確認した南北2間以上、東西1間以上の建物跡である。

柱穴は4箇所で検出しており、すべてで径10 cmの柱痕跡を確認している。平面規模は東側柱列で総長2.82m以上、柱間寸法は北から1.30m、1.52m、南側柱列が総長1.36m以上である。方向は東側柱列で測るとN-2°-Eである。柱穴は径20~30 cmの不整な円形で、深さは南東隅柱で18 cmある。埋土は黒色シルトが主体で地山ブロックを少量含む。出土遺物はない。



【SB334A・B建物跡】(第5図)

2 区北側で確認した東西 3 間以上、南北 2 間の東西棟建物跡である。A 建物から B 建物へ建替えられている。

柱穴は6箇所で検出しており、すべてで径12cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長4.02m以上、柱間寸法は西から1.96m、2.06m、梁行が西妻で総長4.22m、柱間寸法は北から1.92m、2.30mである。方向は西側柱列で測るとN-11°-Wである。柱穴は長軸35~40cm×短軸30cmの不整方形を呈し、深さは北西隅柱で38cmである。埋土は地山ブロックを含む黒色シルトが主体である。

遺物は柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕が微量出土している。

A建物の柱穴は4箇所で検出している。これらをもとにすると、規模や方向はB建物とほぼ同じとみられる。

【SB335建物跡】(第5図)

2区南側で確認した南北4間以上、東西2間以上の南北棟建物跡である。SB337建物跡より新しい。 SB336建物跡とは東側柱列の筋がほぼ揃う。

柱穴は6箇所で検出しており、すべてで径10cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が東側柱列で総長7.22m以上、柱間寸法は北から2.04m、1.92m、1.62m、1.64mである。梁行が南妻で総長1.40m以上である。方向は東側柱列で測るとN-11°-Eである。柱穴は一辺35cm前後の方形で、深さは東側柱列の北端で62cmある。埋土は黒色シルトが主体で地山ブロックを含む。

遺物は柱穴埋土から土師器甕が微量出土している。

【SB336建物跡】(第5図)

2 区南側で確認した南北4間、東西2間以上の南北棟建物跡である。S K496 土壙より古い。S B335建物跡とは東側柱列の筋がほぼ揃う。

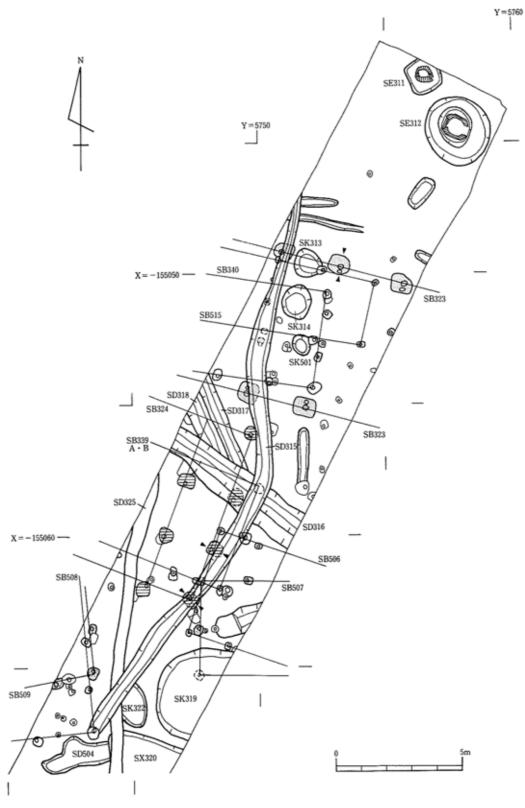
柱穴は7箇所で検出しており、すべてで径10~12 cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が東側柱列で総長6.42m、柱間寸法は北から1.58m、1.64m、1.60m、1.60mである。梁行は南妻で総長1.60m以上である。方向は東側柱列で測るとN-9°-Eである。柱穴は一辺35 cm前後の方形で、深さは北東隅柱で33 cmある。埋土は地山ブロックを含む黒色シルトが主体である。遺物は出土していない。

【SB337建物跡】(第5図)

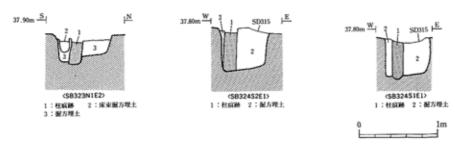
2 区中央で確認した東西 2 間以上、南北 2 間の総柱建物跡とみられる。 S B 335 建物跡より古い。 柱穴は 7 箇所で検出しており、すべてで径 10 cmの柱痕跡を確認している。平面規模は入側柱列で総 長 3.24m、柱間寸法は北から 1.60m、1.64mである。南側柱列は総長 2.06m以上ある。方向は東側柱 列で測るとN - 1° - Wである。柱穴は径 20~30 cmの不整円形で、深さは入側柱列南端で 19 cmある。 埋土は地山ブロックを含む黒色シルトが主体である。遺物は出土していない。

【SB323建物跡】(第6·7図)

3 区北側で確認した東西 3 間以上、南北 3 間とみられる床束をもつ東西棟建物跡である。 S D 315 溝跡より古い。



第6図 L-3区の遺構



第7回 SB323・324建物跡柱穴断面図

柱穴は5箇所、床束柱穴は5箇所で検出しており、このうち柱穴は5箇所、束柱穴は4箇所でそれぞれ径25 cm、径12 cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長4.86m以上、柱間寸法は東から2.52m、2.34mである。梁行は総長5.60mで、柱間寸法は束柱の位置から復元して北から1.60m、1.50m、2.00mである。方向は北側柱列で測るとE-14°-Sである。柱穴は長軸85 cm前後×短軸70 cmの方形、束柱穴が30 cm前後の方形である。深さは前者が36 cm、後者は15 cmある。埋土は黒色シルトが主体で地山ブロックを含む。

遺物は柱穴埋土から土師器と須恵器の甕が微量出土している。

【SB324建物跡】(第6·7図)

3 区中央で確認した南北 3 間、東西 2 間以上の建物跡である。東廂付き南北棟とみられる。 S D 315・316 溝跡より古い。

柱穴は 7 箇所で検出しており、このうち 5 箇所で径 15 cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が東側柱列で総長 4.80m、柱間寸法は北から 2.60、2.20、2.00mである。梁行は 1.80m以上である。方向は東側柱列で測るとN - 22° - Eである。柱穴は一辺が 50 ~ 65 cmの不整方形である。深さは南東隅柱で 53 cmある。埋土は黒色シルトが主体で地山ブロックを含む。

遺物は柱穴埋土から須恵器甕が微量出土している。

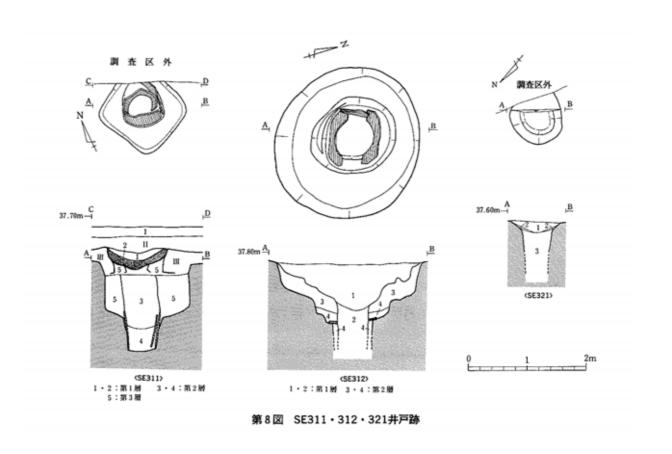
(2) 井戸跡

3 区北端で 2 基、南端で 1 基確認した。井戸側をもつもの(SE311・312)ともたないもの(SE321)がある。

【SE311井戸跡】(第8図)

3 区北端で確認した。掘方を掘り、刳抜きの側を据えた井戸跡であるが、側上部は抜取られている。掘方は一辺 1.2mほどの隅丸方形で、深さは 1.90mある。抜取り穴は長軸 1.10m、短軸 0.75mの楕円形である。側は一本の木を刳抜いたもので底面から 70 cmほど残存している。内径は底面付近で 46 cm、上部で 56 cmとやや広がっている。

掘方の断固形は逆凸形をする。途中の平坦部は井戸構築時の足場と考えられる。堆積土は3層に大別できる。第1層(1·2)は井戸側抜取り後の自然堆積土で、2は灰白色火山灰の再堆積層である。第2層(3·4)は黒色シルト主体の井戸側内堆積土で、4は機能時の自然堆積土、3は廃絶後の自



然堆積土、第3層(5)は掘方埋土である。

遺物は掘方埋土から非ロクロ調整の土師器甕が微量出土している。3・4 層からは非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が少量出土している。土師器坏は有段丸底で、須恵器坏の底部調整は静止糸切りののち回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリ(第9図1)があるほか、ヘラ切り無調整で皿形のものがある。第1層からはロクロ調整の土師器甕が出土した。

【SE312井戸跡】(第8図)

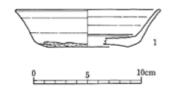
3 区北端、S E 311 井戸跡の東で確認した。掘方を掘り、刳抜きの側を据えた井戸跡であるが、側自体は抜取られ、掘方の途中に設けられた、側を押さえた板(樹種:クリ)が残っていた。掘方は径 2.50 m前後の円形で、深さは 1.60 m以上ある。抜取り穴は径 2.60 mの円形である。側の押さえ板の内側が円形になっており、側の径は 50 cmとみられる。

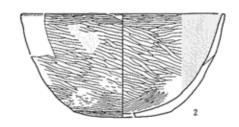
掘方の断面形は上部が階段状になっているが、これは井戸構築時の足場と考えられる。堆積土は 2層に大別できる。第1層は側抜取り後の側内部(2)と抜取り穴(1)の人為的埋土、第2層(3・4)は掘方埋土である。

遺物は掘方埋土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏が微量出土している。土師器坏は有段丸底で、須恵器坏は手持ちヘラケズリ調整が施されている。第1層からは非ロクロ調整の土師器坏は・甕、 須恵器高台坏が微量出土している。

【SE321井戸跡】(第8図)

3 区南端で確認した素掘りの井戸跡である。掘方は径 85 cmほどの円形とみられ、深さは 64 cm以上あ





							tills	(IZ:cm)
No	雅別	出土遺構・騒位	10 fb	口任	遊師	器高	残存率	写真团版
1	領底器・坪	SE311・枠内上層	外面:粉止糸切り→手持ケズリ 内面:立上り沈線状 産地:日の出山繁群	(13.4)	(7.40	3.5	1/4	
2	土師器・袴	SE321 · 堆積土	外面:ココナデ・ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ→無色処理 網接接款	(18.80)	(9.2)	9.7	1/4	

第9図 SE311・321井戸跡出土遺物

る。断面形はロート状である。廃絶後の堆積土は黒色シルト主体で、自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・椀・甕、須恵器甕が少量出土している。土師器椀(第 9 図 2)は銅椀を模倣したもので、底部は丸底気味の平底である。両面ともミガキが施され、内面は黒色処理されている。

(3) 竪穴遺構

一辺が2m以上で、平面形が方形を基調とし、壁が急に立上るものを竪穴遺構とした。

【SX320竪穴遺構】(第6·10図)

3区南側で確認した。SD504溝跡より新しく、SD325溝跡より古い。

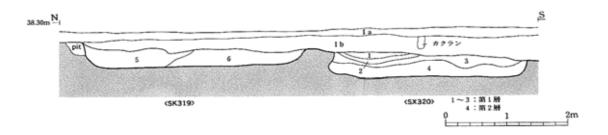
南北3.20m、東西2.80m以上あり、平面形は方形とみられる。底面は北壁付近が10 cmほど階段状に高くなるが、全体的にはほぼ平坦である。壁は北壁はオーバーハング気味に、南壁は急に立上り、深さは北壁で40 cmある。方向は北辺でみるとE-19°-Sである。堆積土は2層に大別できる。第1層(1~3)は黒褐色シルト主体の自然堆積土、第2層(4)は地山ブロックを多量に含む人為堆積土で、本遺構は廃絶後すぐに埋戻されたと考えられる。

遺物は第1層から出土している。下層(3)からは非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕が少量出土している。土師器坏は有段丸底である。上層(1~2)からは非ロクロ調整の土師器坏・高坏・甕、須恵器甕が少量出土している。

(4) 土壙

L区全体で 18 基確認した。1 区に比較的多く認められるものの、特に偏在する傾向はない。規模は長軸が 1.00m以下のもの(SK489・492・501) 1.00~2.00mのもの(SK313・314・322・326~328・490・491・493~495・497) 2.00m以上のもの(SK319・488)があり、2.00m以下の小規模のものが 2/3 を占める。

平面形は不整円形、不整方形のものが多く、断面形はいずれも壁がゆるやかに立上がる皿状のものである。深さは最も深いもので 50 cmで、ほとんどが 20 cm以下の浅いものである。堆積土はいずれも黒色シルトを主体とした自然堆積土である。



第10回 SX320竪穴遺構、SK319土壙断面図

遺物はSK313・314・326・328 の堆積土から、非ロクロ調整の土師器などが微量出土している。また、SK327の堆積土からは、ロクロ調整の土師器坏・高台坏・甕、非ロクロ調整の土師器、須恵器高台坏・甕が少量出土している。

【SK319土壙】(第6·10図)

3区南東端で確認された。SB507建物跡より新しい。

南北3.30m、東西3.00m以上あり、平面形は不整円形とみられる。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立上がり、断面形は皿状を呈する。深さは北壁で40cmある。堆積土は地山ブロックを少量含む黒色シルトを主体とした自然堆積土である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏、甕が微量出土している。坏は有段丸底である。

(5) 溝跡

15 条確認した。1 区中央と3 区に認められる。規模は上幅が1m以下の小規模なものが大半で、1m以上のものは3 区のSD316・504の2 条だけである。深さは最も深いもので60 cm(SD325)あり、30 cm前後のものが多い。断面形は浅い皿状のものが多いが、SD325 はほぼ垂直に立上るU字形である。方向は1区SD513・514 が平行してほぼ東西方向に延びること、SD325 がやや湾曲しながらもほぼ南北方向にM区まで延びていく以外は特徴や規則性は認められない。

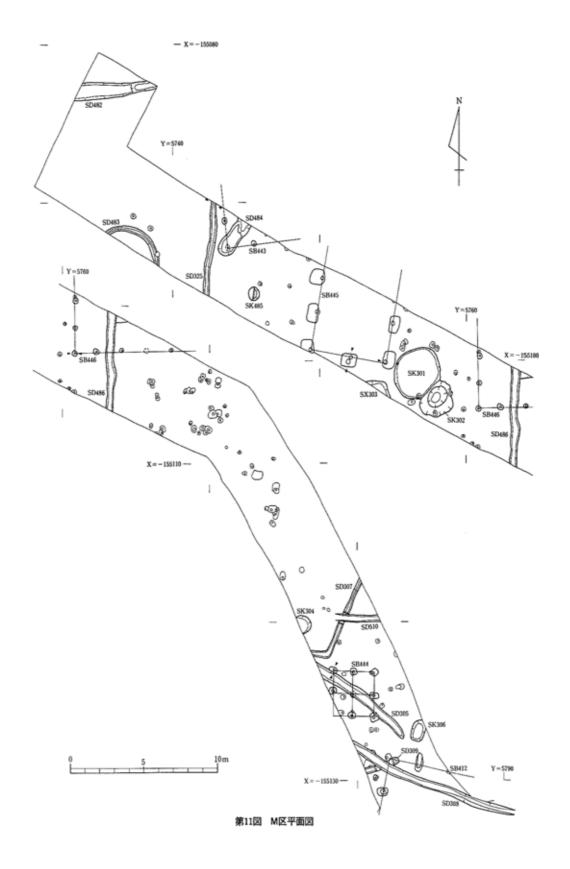
遺物はSD315・316の堆積土から非ロクロ調整の土師器甕などが微量出土している。なお、SD325の詳細はM区で記述する。

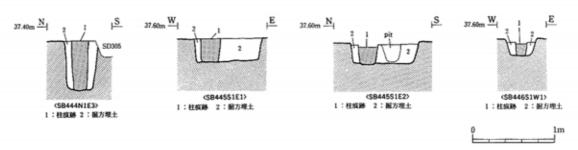
2. M区

調査対象地域ほぼ中央に位置する東西方向の調査区である(第3図)。掘立柱建物跡4、竪穴遺構1、 土壙5、溝跡10などを確認した。遺構は調査区全体に分布しているが、西端は比較的密度が希薄で、 逆に東端のN-1区と接する付近から密度が濃くなっていく。

(1) 掘立柱建物跡

4 棟確認した。調査区中央と東端に認められる。方向は真北を向くか東に振れる。 S B 412 建物跡は N - 1 区で記述する。





第12図 SB444~446建物跡柱穴断面図

【SB444建物跡】(第11·12図)

調査区東端で確認した東西2間、南北2間の総柱建物跡とみられる。SD305溝跡より古い。

柱穴は8箇所で検出しており、7箇所で径20 cmほどの柱痕跡、2箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は東西・南北とも総長2.80m、柱間寸法は1.40m等間である。方向は東側柱列で測るとほぼ真北を向く。柱穴は長軸50 cm前後の方形で、深さは南東隅柱で60 cmある。埋土は地山ブロックを少量含む黒色シルトが主体である。遺物は出土していない。

【SB445建物跡】(第11·12図)

調査区西側で確認した南北3間以上、東西2間の南北棟建物跡である。

柱穴は6箇所で検出しており、すべてで径25 cmほどの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長4.44m以上、柱間寸法は南から2.34m、2.10m、梁行は南妻で総長5.20m、柱間寸法は西から2.80m、2.40mである。建物の方向は西側柱列で測るとN-9°-Eである。柱穴は長軸1.1m前後×短軸0.8m前後の隅丸長方形で、深さは南東隅柱で28 cmある。埋土は地山ブロックを少量含む黒色シルトが主体である。

遺物は柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器坏・甕が微量出土している。

【SB446建物跡】(第11·12図)

調査区中央で確認した東西4間以上、南北2間以上の東西棟建物跡である。

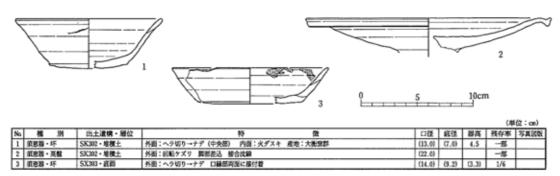
柱穴は6箇所で検出しており、すべてで径10 cmほどの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長6.51m以上、柱間寸法は西から1.50m、1.66m、3.35m(2間分)、梁行は西側柱列で総長3.24m以上、柱間寸法は南から1.56m、1.68mである。方向は西側柱列で測るとN-2°-Eである。柱穴は径20~40 cmの不整円形で、深さは南西隅柱で20 cmある。埋土は地山ブロックを少量含む黒色シルトが主体である。

遺物は柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器甕が微量出土している。

(2) 竪穴遺構

【SX303竪穴遺構】(第11図)

調査区西側で確認した。北東隅の一部を検出したに過ぎないため規模は不明だが、平面形は隅丸方形とみられる。底面はほぼ平坦で、甕は比較的急に立上る。深さは北壁で28 cmある。方向は北辺で見



第13回 SX303竪穴遺構、SK302土壙出土遺物

ると真東を向く。堆積土は地山粒を少量含む黒褐色砂質シルトが主体だが、底面付近は厚さ 1 cm前後の 薄い粘土層が認められる。

遺物は底面から皿形で、ヘラ切り無調整の須恵器坏が出土している(第13図3)。口縁部の内外面に 漆が付着している。堆積土からは非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕が微量出土している。

(3) 土壙

調査区中央と東端で5基確認した。長軸が2.00m以上のもの(SK301・302)と1.00m前後のもの(SK304・306・485)がある。平面形は不整円形、不整隅丸長方形である。断面形は壁がゆるやかに立上る皿状のもので、SK302は途中に段が付く。深さはいずれも40cm未満である。

【SK301土壙】(第11図)

調査区西側で確認した。SK302土壙との新旧関係は不明である。

長軸 3.20m x 短軸 3.00mの不整円形である。底面はほぼ平坦で、断面は壁がゆるやかに立上る。深さは東壁で 26 cmある。堆積土は黒褐色シルト主体の自然堆積土である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕が出土している土師器坏は有段丸 底で、須恵器坏は回転ヘラケズリが施されている。

【SK302土壙】(第11図)

調査区西側で確認した。SK301土壙との新旧関係は不明である。

長軸 2.40m×短軸 1.90mの不整円形である。底面は中央がややくぼむがほぼ平坦である。壁は底から比較的急に立上るが、上部は傾斜が変わってゆるやかになる。深さは 36 cmある。堆積土は底面付近は地山ブロックを少量含むが、全体に黒色シルトが主体で自然堆積土とみられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高盤・蓋・壷が出土している。土師器坏は無段で底部は平底に近い。須恵器坏は逆台形でヘラ切り無調整(第 13 図 1)のほか、回転糸切りがある。高盤は身が浅く、端部が折れて縁帯状になる(第 13 図 2)。

(4) 溝跡

10 条確認した。調査区全体に散在している。規模は上幅が50 cm以下の小規模なものがほとんどで、100 cmを超えるのはS D482・484 である。深さはS D325 が60 cmを測る以外は40 cm以下である。後者の断

面形は浅皿状のものがほとんどである。方向は円形の S D483 を除くと、 ほぼ真北方向 (S D325・486) ほぼ東西方向 (S D482・487・510) 北で東に振れる (N - 25°~35°-E S D307・484) 東で南に振れる (E - 20°~35°-S S D305・308) 東で北に振れる (E - 17°-N S D309) とに分けられる。

遺物はSD305 堆積土から非ロクロ調整土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕が少量出土している。須恵器坏はヘラ切り無調整がある。SD307 堆積土からは非ロクロ調整土師器坏・甕、須恵器坏・甕が微量出土している。土師器坏は有段丸底である。SD308 堆積土からは非ロクロ調整土師器坏・甕、須恵器甕が微量出土している。

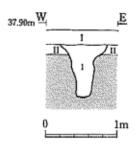
【SD309溝跡】(第11図)

調査区南端のN-1区と接する部分で検出した東西溝跡で、長さ約5m分を確認した。SB412建物 跡より新しい。上幅40cm前後、下幅25cm前後、深さ20cmある。方向は、E-17°-Nである。底面 は平坦で、断面形は壁が急に立上るU字形である。堆積土は地山ブロックを多量に含む黒褐色粘土質シ ルトで、人為堆積土と考えられる。

堆積土から非ロクロ調整土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕が少量出土している。須恵器坏には回転へ ラケズリやヘラ切り無調整がある。

【SD325 溝跡】(第11·14 図)

L - 3 区からM区にまたがる南北溝跡で 38m分を検出した。S X 320 竪穴遺構、S K 322 土壙より新しく、S D 315 より古い。上幅 $40 \sim 50$ cm、下幅 $20 \sim 26$ cm、深さはM区北壁で 72 cmある。方向は蛇行しているが、おおよそ N - 5 ° - E である。底面は平坦で、断面形は壁が急に立上り上部がやや開く U字形である。堆積土は地山ブロックを多量に含む黒褐色粘土質シルトで、人為堆積土と考えられる。遺物は出土していない。



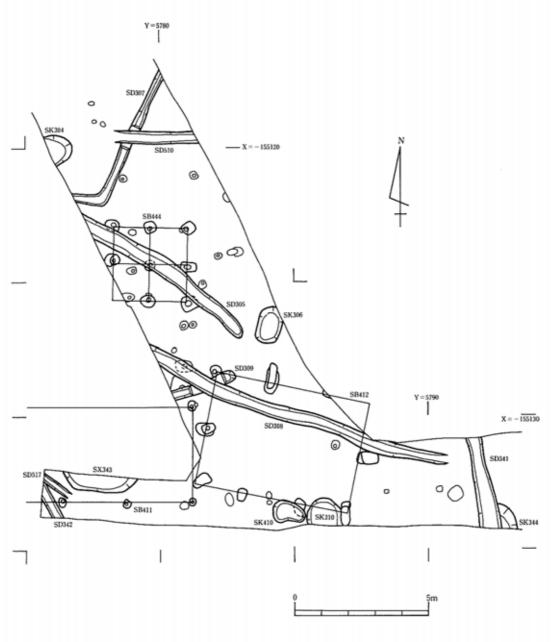
第14図 SD325溝跡 断面図

3. N区

調査対象地域のほぼ中央に位置し、民家を囲むように「逆ユの字」形になる調査区である。民家からみて北辺をN-1 区、西辺をN-2 区、南辺をN-3 区とした。これらの調査区は農道や用水路によって分断されており、また 2 つ以上の調査区にまたがって検出された遺構がないことから、N-1 区から順に記述する。

N - 1区

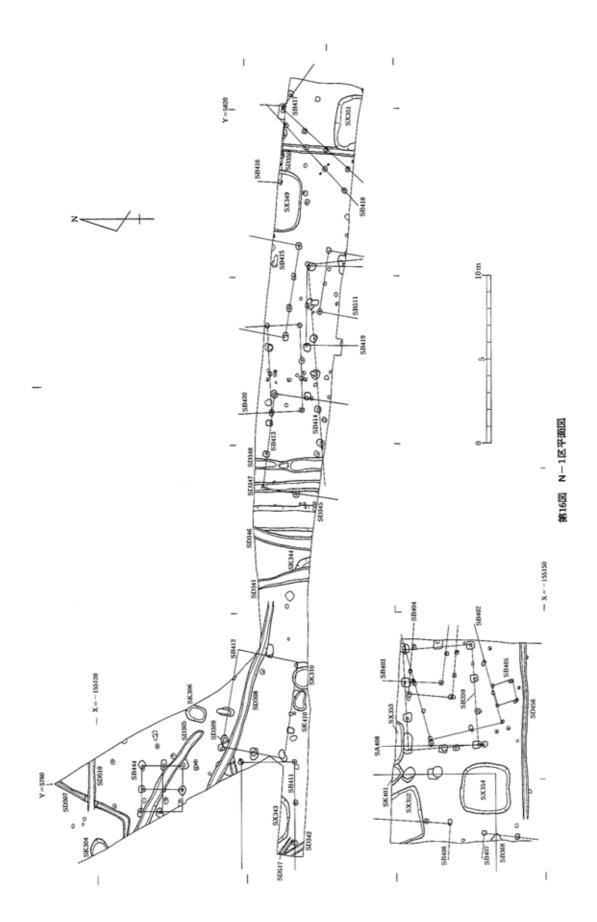
民家から見て北側の調査区である。掘立柱建物跡 11、竪穴遺構 3、土壙 3、溝跡 8 を確認した。これらの遺構は調査区全体に分布し、密度も濃い。とくに中央から東側に掘立柱建物跡が集中する。遺物は竪穴遺構を中心に土師器、須恵器、瓦などが出土しており、時期的には古代のものがほとんどを占める。その他、溝跡から中世陶器が少量出土している。

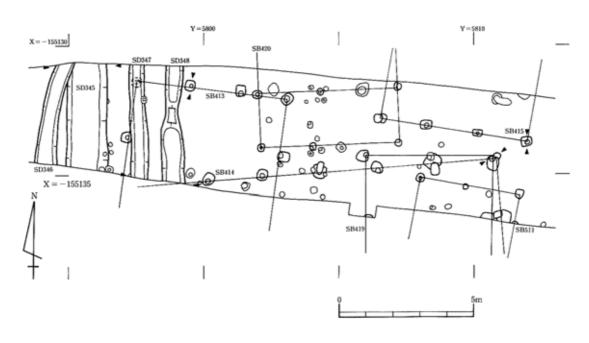


第15図 N-1区西側の遺構

(1) 掘立柱建物跡

11 棟確認した。調査区中央から東側に集中するが、調査区の制限から全容がわかるものはない。方向は 北で西に振れるもの(N-5°-W SB414) ほぼ真北を向くもの(SB411・416・419・420) 北で東に振れるもの(N-7°~12°-E SB412・413・415・511) 東に大きく振れるもの(N-40°~45°-E SB417・418)に分けられる。柱穴は40cm前後の隅丸方形のものが多い。





第17図 N-1区中央部の遺構

【SB411建物跡】(第15·18図)

調査区西端で確認した東西2間以上、南北2間とみられる東西棟建物跡である。

柱穴は4箇所で検出しており、すべてで径14cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長4.74m以上、柱間寸法は東から2.46m、2.28m、梁行は東妻で総長3.60m(2間分)である。方向は東側柱列で測るとほぼ真北方向である。柱穴は30cm前後の不整な方形で、深さは北東隅柱で33cmある。埋土は黒色シルトが主体で地山ブロックを少量含む。

遺物は柱穴埋土から須恵器甕が微量出土している。

【SB412建物跡】(第15·18図)

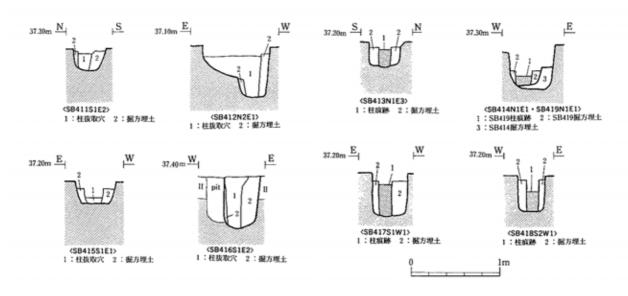
調査区西端で確認した東西 3 間、南北 2 間の東西棟建物跡である。S K 310・410 土壙、S D 308・309 溝跡より古い。

柱穴は9箇所で検出しており、このうち2箇所で径14cmの柱痕跡、7箇所で柱抜取穴を確認している。抜取穴をみると、柱のほとんどは建物外側に倒している。平面規模は桁行が南側柱列で総長5.60m、柱間寸法は東から1.80m、2.20m、1.60m、梁行は西妻で総長4.10m、柱間寸法は北から2.10m、2.00mとみられる。方向は西妻で測るとN-12°-Eである。柱穴は北西隅柱で長軸50cm×短軸40cmの不整方形を呈し、深さは14cmである。埋土は地山ブロックを少量含む黒色砂質シルトが主体である。

遺物は柱抜取穴から非ロクロ調整の土師器甕が微量出土している。

【SB413建物跡】(第17·18図)

調査区中央で確認した東西 3 間、南北 2 間以上の東西棟とみられる建物跡である。 S D347 溝跡より 古



第18図 SB411~419建物跡柱穴断面図

ll.

柱穴は6箇所で検出しており、4箇所で径15 cm前後の柱痕跡、2箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長5.76m、柱間寸法は東から1.94m、1.84m、1.98m、梁行は東妻で総長2.10m以上である。方向は東妻で測るとN-7°-Eである。柱穴は40 cm前後の方形である。深さは(N1・W2)柱穴で30 cmある。埋土は地山ブロックを少量含む黒色砂質シルトが主体である。

遺物は柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕、柱抜取穴から非ロクロ調整の土師器坏が微量出土している。

【SB414 建物跡】(第 17・18 図)

調査区中央で確認した東西5間以上、南北1間以上の東西棟建物跡である。SB419建物跡より古い。 柱穴は7箇所で検出しており、4箇所で径18㎝ほどの柱痕跡、3箇所で柱抜取穴を確認している。平 面規模は桁行が北側柱列で総長10.66㎜以上、柱間寸法は東から2.16㎜、2.08㎜、2.18㎜、深行は東妻で総長1.96㎜以上である。方向は北側柱列で測るとE-5°-Nである。柱穴は一辺50~70㎝の方形である。深さは(N1・W1)柱穴で40㎝ある。埋土は地山ブロックを少量含む黒褐色シルトが主体である。

遺物は柱抜取穴から非ロクロ調整の土師器甕が微量出土している。第 20 図 1 は小型球胴甕で、胴部外面調整はハケメ・ケズリ ヘラミガキである。

【SB415 建物跡】(第 17·18 図)

調査区中央で確認した東西3間、南北1間以上の東西棟建物跡である。

柱穴は4箇所で検出しており、2箇所で径18 cmほどの柱痕跡、2箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が南側柱列で総長5.52m以上、柱間寸法は東から1.85m、1.87m、1.80mである。方向は南側柱列で測るとE-10°-Sである。柱穴は一辺30~40 cmほどの方形である。深さは(S1・E1)柱穴で25 cmある。埋土は地山ブロックを少量含む黒褐色シルトが主体である。遺物は出土していない。

【SB417建物跡】(第16·18図)

調査区東端で確認した南北3間以上、東西2間以上の南北棟建物跡である。SB416建物跡、SD350 溝跡より新しい。

柱穴は5箇所で検出しており、すべてで径16cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長5.42m以上、柱間寸法は北から1.84m、1.76m、1.82m、梁行は北妻で総長1.06m以上である。方向は西側柱列で測るとN-40°-Eである。柱穴は一辺35cm前後の隅丸方形である。深さは(S1・W1)柱穴で50cmある。埋土は地山ブロックを少量含む暗褐色粘土質シルトが主体である。遺物は出土していない。

【SB418建物跡】(第16·18図)

調査区東端で確認した南北4間以上の南北棟とみられる建物跡である。

柱穴は4箇所で検出しており、すべてで径16 cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長5.35m以上、柱間寸法は北から1.85m、1.75m、1.75mである。方向は西側柱列で測るとN-45°-Eである。柱穴は一辺35 cm前後の隅丸方形である。深さは(W1・S2)柱穴で40 cmある。埋土は地山ブロックを少量含む暗褐色粘土質シルトが主体である。遺物は出土していない。

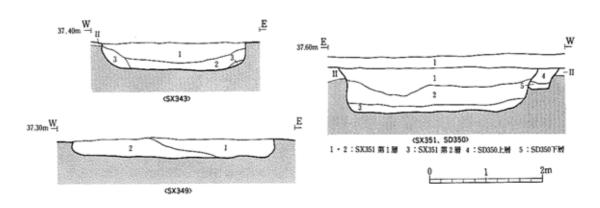
【SB419建物跡】(第17図)

調査区東側で確認された東西 1 間、南北 1 間以上の南北棟とみられる建物跡である。 S B 414 建物跡より新しい。

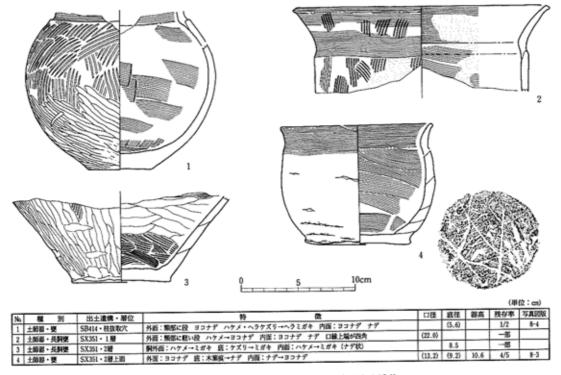
柱穴は4箇所で検出しており、1箇所で径22㎝円形の柱痕跡、2箇所で柱抜き取り穴を確認している。 建物の平面規模は桁行が東側柱列で総長1.96m以上、柱間寸法は1.96m、梁行は北妻で総長4.62m、 柱間寸法は4.62mである。建物の方向は東側柱列で測るとN-3°-Wである。柱穴は長軸46㎝×短軸44㎝の不整方形を呈する(柱穴N1・W1)。埋土は地山ブロックを少量含む黒褐色シルト主体である。 遺物は出土していない。

(2) 竪穴遺構

調査区東端で2基、西端1基確認した。いずれも全容は不明である。



第19回 SX343・349・351竪穴遺構、SD350溝跡断面図



第20図 SB414建物跡、SX351竪穴遺構出土遺物

【SX343竪穴遺構】(第15·19図)

調査区西端で南辺付近を検出した。

平面形は不整な隅丸方形とみられ、南辺は約 2.50mある。底面はほぼ平坦で、壁は比較的急に立上り、上部はほぼ垂直になる。深さは調査区北壁で 50 cmある。方向は南辺で測ると E - 7° - Sである。 堆積土は 3 層が黒色砂質シルト、2 層は地山を含む灰黄褐色砂質シルト、1 層が地山粒や焼土を含む黒色砂質シルトで、人為堆積とみられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕が少量出土している。

【SX349竪穴遺構】(第16·19図)

調査区東端で南側を検出した。SB416建物跡より新しい。

平面形は隅丸方形とみられ、南辺は約3.60mある。底面は西壁付近が10 cmほど高くなるがほぼ平坦で、壁はオーバーハング気味に急に立上る。深さは調査区北壁で32 cmある。方向は南辺で測るとE-7°-Sである。堆積土は2層が地山ブロックを多く含む黒色砂質シルト、1層が地山小粒を含む黒色砂質シルトであり、人為堆積とみられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕が少量出土している。

【SX351竪穴遺構】(第16·19図)

調査区東端で北側を検出した。SD350 溝跡より新しい。

平面形は隅丸方形とみられ、北辺は約 3.50mある。底面は東側がやや低くなるもののほぼ平坦で、 壁はオーバーハング気味に比較的急に立上る。深さは調査区南壁で 70 cmある。方向は北辺で測ると E

29

7°-Sである。堆積土は2層に大別される。第2層(3)は地山ブロックを含む黒色砂質シルト、第1層(1・2)は焼土や炭化物、地山小粒を含む黒色砂質シルトで、いずれも人為堆積とみられる。遺物は2層から非ロクロ調整の土師器甕(第20図3)が微量出土している。2層上面からは非ロクロ調整の土師器坏・甕(第20図4)、須恵器坏・甕が出土している。土師器坏には在地の内黒坏とともに内面ナデ調整の関東系土師器が認められる。須恵器坏は回転ケズリが施されたものがある。1層からは非ロクロ調整の土師器坏・高坏・甕(第20図2)、須恵器坏・蓋・甕が出土している。土師器坏は有段丸底、須恵器坏には静止糸切りののち回転ケズリがある。土師器甕のうち2は口縁端部が四角になること、3は胴部内外面の調整がミガキであることから東北地方北部系統の甕とみられる。

(3) 土壙

調査区西側で3基確認した。平面形は円形(SK310・344)と不整楕円形(SK410)がある。規模はSK310が径約1.20m、SK410の長軸が約1.20mである。断面形はいずれも浅皿状で、深さは5~30cmと浅い。堆積土はいずれも黒色砂質シルトが主体で自然堆積とみられる。

遺物はSK310 堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器高台坏・甕が少量出土している。SK344 堆積土からは非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕が微量、SK410 堆積土から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕が微量出土している。

(4) 溝跡

8 条確認した。調査区の東端、中央、西端に認められる。規模は上幅が 1.50m前後のもの(SD345) 80 cm前後のもの(SD341・346・347・348) 40 cm前後のもの(SD342・350・517)に分けられる。深さは のものは 40~70 cmと深く、 は 10~20 cmと浅い。断面形も は逆台形やU字形であるのに対し、 は浅皿状であり、溝跡の規模と断面形には関連性がある。

方向は1)ほぼ真北方向(SD345・347・348・350) 2)北で東に振れるもの(N-10°-E SD346) 3)北で西に振れるもの(N-10°-W SD341) 4)大きく西に振れるもの(N-30°~65°-W SD342・517)がある。

遺物はSD345・346などから土師器、須恵器、中世陶器、瓦などが出土している。

【SD345 **溝跡**】(第 17・21 図)

調査区中央で確認した南北溝跡で、4.10m分を検出した。SD346溝跡より古い。

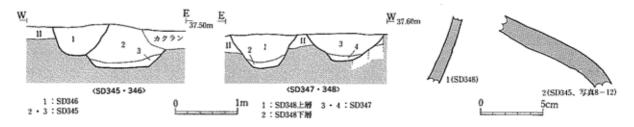
上幅 1.50m、下幅 90 cm、深さは調査区北壁で 70 cmある。方向はN - 1° - Eで、ほぼ真北を向く。 底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色粘土質シルト主体の自然堆積土である。

遺物は堆積土から土師器、須恵器、瓦、中世陶器が出土している。中世陶器は常滑産の大甕(第 21 図 2)である。

【SD346溝跡】(第17·21図)

調査区中央で確認した南北溝跡で3.90m分を検出した。SD345 溝跡より新しい。

上幅 80 cm、下幅 40 cm、深さは調査区北壁で 50 cmある。方向はN - 11° - E である。底面はほぼ平垣で、



第21図 SD345・346・347・348溝跡断面図、SD345・348溝跡出土中世陶器

断面形は逆台形である。堆積土は黒色粘土質シルトが主体で自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から土師器、須恵器、瓦が出土している。

【SD347 溝跡】(第17·21 図)

調査区中央で確認した南北溝跡で4.40m分を検出した。SB413溝跡より新しい。

上幅 65 cm、下幅 36 cm、深さは調査区南壁で 44 cmある。方向はN-1°-Wでほぼ真北を向く。底面はほぼ平坦で、壁は 10 cmほど急に立上るが、その上は1るやかに開く。堆積土は黒色粘土質シルトが主体で自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から土師器、須恵器、瓦が微量出土している。

【SD348溝跡】(第17·21図)

調査区中央で確認した南北溝跡で4.60m分を検出した。

上幅 $40 \sim 80$ cm、下幅 $25 \sim 60$ cmで、中央部が狭い。深さは調査区南壁で 54 cmであるが、狭くなる部分は他より 10 cmほど高くなっている。方向はN - 1° - E で、ほぼ真北を向く。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は 2 層に分けられ、下層は地山ブロック主体、上層は黒色シルトが主体であり、後者は自然堆積とみられる。

遺物は上層から土師器、須恵器、瓦、中世陶器が出土している。中世陶器は常滑産大甕である(第 21 図 1)。

【SD350溝跡】(第16·19図)

調査区東端で確認した南北溝跡で 4.90m分を検出した。 S B 417・418 建物跡、 S X 351 竪穴遺構より古い。

上幅 50 cm、下幅 30 cm、深さは 21 cmある。方角はN - 4° - Eである。底面は平坦で、断面形は箱形である。堆積土は 2 層に分けられる。下層 (5) は地山ブロックを含む黒色砂質シルト、上層 (4) は黒褐色砂質シルトで、後者は自然堆積土とみられる。

遺物は上層からロクロ調整と非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が出土している。

N - 2区

民家からみて西側の調査区である。掘立柱建物跡 10、掘立柱列跡 1、井戸跡 4、竪穴遺構 3、土壙 6、 溝跡 7 を確認した。遺構は調査区全体に認められるが、北側に掘立柱建物跡、竪穴遺構、南西部に井戸 跡、土壙が集中する傾向がある。中央には井戸跡と溝跡がある。

遺物は井戸跡、竪穴遺構、土壙から多く出土している。土師器、須恵器が主体で、ほかに瓦、木製

品などがある。

(1) 掘立柱建物跡

10 棟確認した。調査区北側に集中するが、全容が分かるものは少ない。方向は 北で西に振れるもの(N-8°~18°-W SB370・402・405)、 ほぼ真北を向くもの(SB359・368・409)、 北で東に振れるもの(N-4°~7°-E SB403・404・406・407)に分けられる。柱穴は30cm前後の不整な方形(SB402~407・409)と、長軸40~60cmの方形もしくは長方形(SB359・368・370)がある。柱穴埋土は地山ブロックを含む黒褐色または黒色粘土質シルトを主体とする。

【SB359建物跡】(第23·24図)

調査区北端で確認した東西 3 間、南北 2 間の東西棟建物跡である。 S B 402 建物跡、 S X 353 竪穴遺構より新しい。

柱穴は 10 箇所すべてを検出しており、7 箇所で径 20 cm前後の柱痕跡、5 箇所で柱抜取穴を確認した。 平面規模は桁行が南側柱列で総長 5.90m、柱間寸法は東から 2.00m、1.96m、1.94m、梁行は東妻で 総長 4.40m、柱間寸法は 2.20m等間である。方向は東側柱列で測るとN-3°-Wである。柱穴は長軸 40~60 cm×短軸 32~46 cmの隅丸長方形で、深さは南西隅柱で 21 cmある。埋土は黒色シルトを含む地 山ブロックが主体である。

遺物は柱抜取穴や柱痕跡から非ロクロ調整の土師器坏・甕(第26図5) 須恵器坏・甕が出土している。土師器坏には内面ナデ調整の関東系土師器がある。須恵器坏は回転ケズリのものがある。

【SB368建物跡】(第23·24図)

調査区北端で確認した南北4間以上、東西2間以上の南北棟とみられる建物跡である。SX354竪穴遺構より古い。

柱穴は3箇所検出しており、すべてで柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が東側柱列で総長5.80m以上、柱間寸法は南から4.00m(2間分) 1.80m、梁行は南妻で総長4.20m(2間分) 方向は東側柱列で測るとN-3°-Wとみられる。柱穴は一辺60cm前後の隅丸長方形である。深さは(S1・E3)柱穴で32cmある。埋土は黒色シルトを含む地山ブロックが主体である。

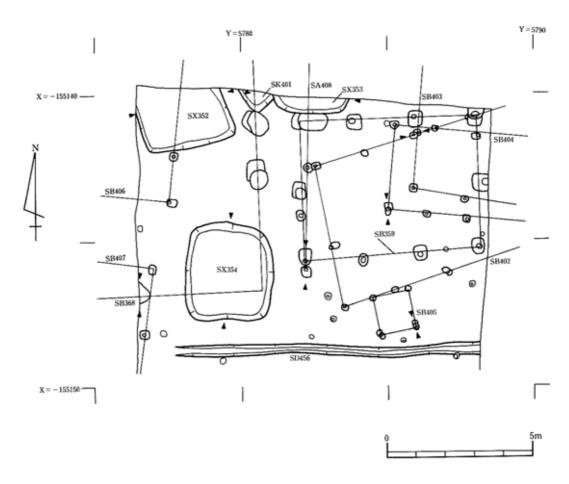
遺物は柱抜取穴から非ロクロ調整の土師器坏・甕、平瓦が微量出土している。土師器坏には内面ナデ調整の関東系土師器がある。平瓦(第 26 図 6)は桶巻き作りによる平瓦円筒を一枚分に分割した後、個々に一枚用の凸型調整台で調整を加えたもので、多賀城分類の平瓦IC類にあたる(宮城県多賀城跡調査研究所:1982)。胎土に海綿骨針を多量に含むことと斜格子タタキ具の特徴から、三本木町下伊場野窯跡(宮城県多賀城跡調査研究所:1994)の製品と考えられる。

【SB370建物跡】(第22・24図)

調査区南東郡で確認した南北2間以上の建物跡である。

柱穴は3箇所検出しており、すべてで径20 cmほどの柱痕跡を確認した。平面規模は総長4.00m以上、柱間寸法は2.00m等間とみられる。方向はN-8°-Wである。柱穴は長軸40~60 cm×短軸32~46 cmの隅丸長方形で、深さは(W1・N3)柱穴で50 cmある。埋土は地山ブロックが主体で黒色シルトを含む。





第23図 N-2区北側の遺構

遺物は柱穴埋土から須恵器坏が微量出土している。

【SB402建物跡】(第23·24図)

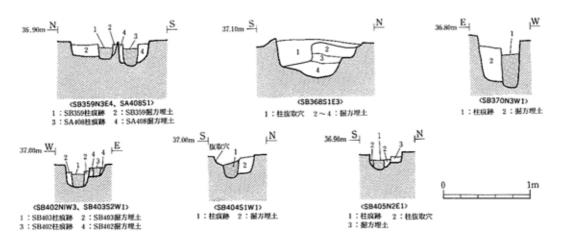
調査区北端で確認した東西 3 間以上、南北 2 間の東西棟建物跡である。S A 408 柱列跡より新しく、S B 359・403 建物跡より古い。

柱穴は8箇所検出しており、3箇所で径14 cmほどの柱痕跡、2箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長5.38m以上、柱間寸法は西から1.72m、1.76m、1.90m、梁行は西妻で総長4.88m、柱間寸法は北から2.80m、2.08mである。方向は北側柱列で測るとE-18°-Nである。柱穴は一辺が20~30 cmの不整方形で、深さは南西隅柱で24 cmある。埋土は地山ブロックを含む黒色シルトが主体である。遺物は出土していない。

【SB404建物跡】(第23·24図)

調査区北端で確認した東西2間以上、南北1間の東西棟建物跡である。

柱穴は6箇所検出しており、すべてで径15 cmほどの柱痕跡、1箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長2.80m以上、柱間寸法は1.40m等間、梁行は西妻で総長2.80mである。方向は西妻で測るとN-4°-Eである。柱穴は一辺20~30 cmの不整方形で、深さは北西隅柱で24 cmあ



第24図 SB359・368・370・402~405建物跡、SA408柱列跡断面図

る。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトが主体である。遺物は出土していない。

【SB405建物跡】(第23·24図)

調査区北側で確認した東西1間、南北1間の建物跡である。

柱穴は4箇所検出しており、3箇所で径10 cmほどの柱痕跡、2箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は東西が南側柱列で1.22m、南北は西側柱列で1.24mである。方向は西側柱列で測るとN-10°-Wである。柱穴は一辺16~24 cmの隅丸方形で、深さは南東隅柱で18 cmある。埋土は黒褐色シルトを含む地山ブロックが主体である。遺物は出土していない。

(2) 掘立柱列跡

【SA408柱列跡】(第23·24図)

調査区北側で確認された南北2間の柱列跡である。SB402建物跡より古い。

柱穴は3箇所検出しており、すべてで径14cmほどの柱痕跡を確認している。柱間寸法は北から1.60m、1.80mである。方向はN-2°-Eとみられる。柱穴は一辺32~44cmの不整方形で、深さは北端で18cmある。埋土は黒褐色シルトを含む地山ブロック主体である。遺物は出土していない。

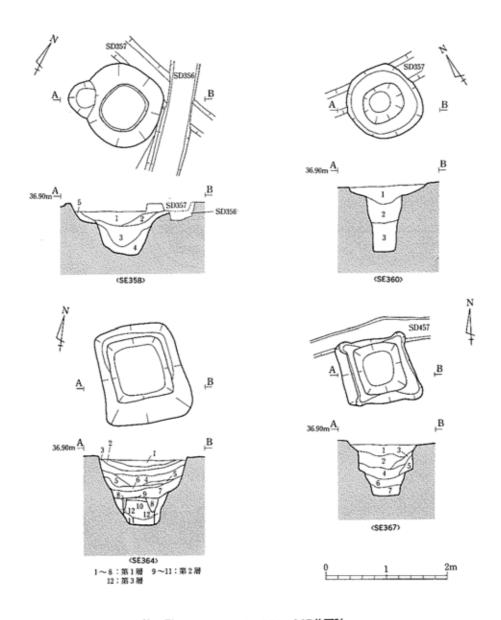
(3) 井戸跡

調査区中央と南側で 2 基ずつ確認した。井戸側をもつもの(SE358・364・367)ともたないもの(SE360)とがあり、前者の側はいずれも抜取られている。掘方の平面形は前者が方形もしくは隅丸方形で、後者は円形である。

【SE358井戸跡】(第25図)

調査区中央で確認した。SD357 溝跡より古い。

掘方を掘り、井戸側を据えたものとみられるが、側はすべて抜取られている。深さは86 cmあり、壁は下部が急に立上がっており、上部はゆるやかに開く。下部は70 cm×80 cmの隅丸方形で、側はこれよりやや小さいとみられる。また、南西側にはステップ状の段があるが、これは井戸構築時の足場と考



第25図 SE358・360・364・367井戸跡

えられる。抜取穴は長軸 $1.60m \times 短軸 1.40m$ の円形で、側抜取後は地山ブロック主体の粘土で埋戻されている (1~5)。

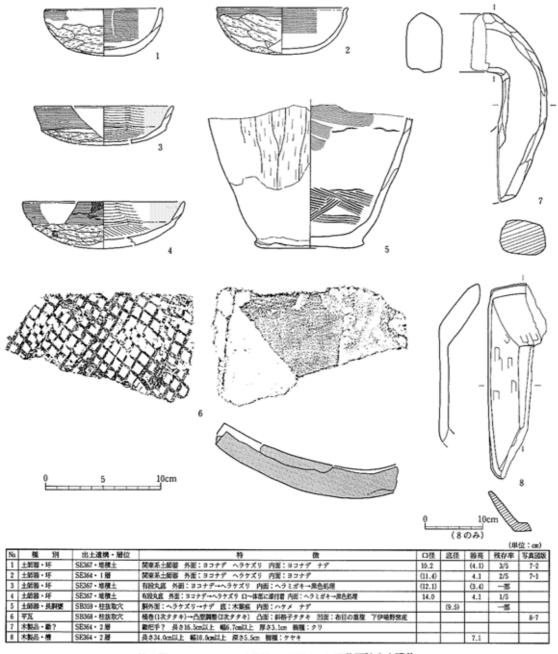
遺物は埋土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏が微量出土している。土師器坏には内面ナ デ調整の関東系土師器が含まれる。須恵器坏は回転ケズリが施されている。

【SE360井戸跡】(第25図)

調査区中央東側で確認した。 S D357 溝跡より古い。

掘方は径 1.20mほどの円形で深さは 1.10mある。底面は平坦で、80 cmほど垂直に立上ったところに平坦部を設けており、断面形はT字形である。底面付近の径は 38 cmである。廃絶後は黒色粘土(2・3) や砂を多く含む黒色シルト質粘土(1) が堆積しており、いずれも自然堆積とみられる。

遺物は1・2層から非ロクロ調整の土師器坏・高盤・甕、須恵器甕が少量出土している。土師器坏



第26図 SE359・368建物跡、SE364・367井戸跡出土遺物

には有段と無段がある。高盤は関東系土師器で、S D356 溝跡出土品と同一個体である(第29図4)。 【SE364井戸跡】(第25図)

調査区南端で確認した。掘方を掘り、木組みの井戸側を据えたものであるが、側は最下部(一辺 50 cmの方形)を残して抜取られている。掘方は抜取穴が入るため上部は不明だが、下部は一辺 90 cmの隅丸方形である。井戸の深さは 1.16mである。抜取穴は 1.64m×1.34mの隅丸長方形で、深さは 70 cmある。堆積土は 3 層に大別できる。第 1 層 (1~8) は側抜取後の堆積土で、地山ブロックを含む黒褐色土が主体であり、人為的に埋戻されている。第 2 層 (9~11) は機能時の堆積土で、褐灰色粘土が主体

である。第3層(12)は地山ブロック主体の掘方埋土である。

遺物は 1 層と 2 層から出土している(第 26 図)。 2 層からは非ロクロ調整の土師器坏、須恵器甕、木製品が出土している。木製品は槽(8)、鋤?(7)がある。1 層からは非ロクロ調整の土師器坏・高坏・高盤・甕・甑、須恵器坏・壷・甕が出土している。土師器は坏に内面ナデ調整の関東系土師器(2)がある。高盤は関東系土師器で、SD356 溝跡出土品と同一個体(第 29 図 4)、甑は多孔式である。なお、樹種同定の結果 7 がクリ、8 はケヤキで、小破片で図示できなかった槽はクリであった。

【SE367井戸跡】(第25図)

調査区南端で確認した。SD457溝跡より新しい。

掘方を掘り、木組みの井戸側を据えたものであるが、側はすべて抜取られている。掘方は一辺 1.10 mほどの方形であるが、上部の側を支える隅柱の位置が径 20 cm前後の半円形状に突出する。深さは 90 cmで、断面形は途中に段が付く箱形である。下部は一辺 40 cmほどの方形である。側抜取り後の堆積土は 7 層に分けられる。 7 層は地山崩壊土、1~6 層は黒色の粘土質シルトや砂質シルトを主体としており、自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台盤・甕のほか、桃の種子が出土している。土師器坏は扁平な有段丸底(第26図3・4)とともに内面ナデ調整の関東系土師器(第26図1)があり、須恵器坏は静止糸切りののち回転ケズリや回転ケズリのものがある。

(4) 竪穴遺構

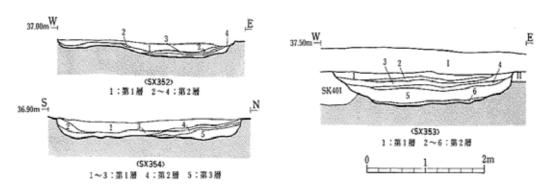
調査区北側で3基確認した。

【 S X352 竪穴遺構】(第 23・27 図)

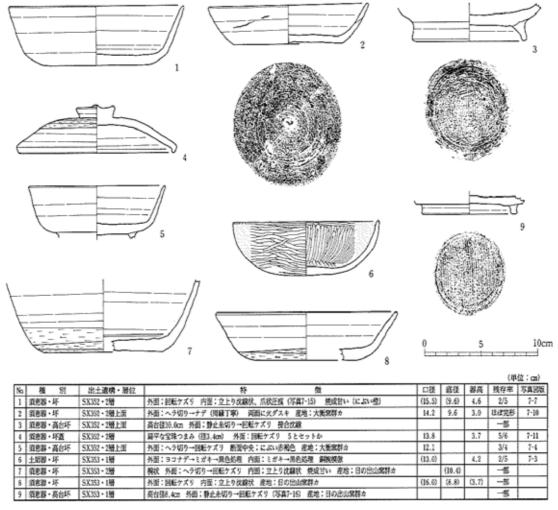
調査区北西端で確認した。SB406建物跡より新しい。

遺構の南側を検出した。平面形は南辺で 3.00mの隅丸方形とみられる。底面は凹凸があり、南東隅に向けて低くなっており、高低差は 21 cmある。壁は比較的急に立上り、深さは調査区北壁で $34 \sim 55$ cmある。方向は南辺で測ると E-10°-Nである。堆積土は 2 層に大別できる。第 2 層 $(2\sim 4)$ は 2 と 2 が灰層、3 は炭化物層である。第 1 層 (1) は黒色シルトで、本遺構は機能停止後に灰や炭化物が捨てられ(第 2 層)、その後自然堆積(第 1 層)で埋まったと考えられる。

遺物は堆積土から出土している(第28図)。第2層から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕が出土している。土師器坏は有段丸底、須恵器は坏が箱形で回転ケズリが施され(1)、蓋は扁平な



第27回 SX352 · 353 · 354竪穴遺構断面図



第28図 SX352 · 353竪穴遺構出土遺物

宝珠つまみを持ち、端部が短く折れている(4)。第2層上面からは非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏、平瓦が出土している。土師器坏は内面ナデ調整の関東系土師器である。須恵器は坏が皿形でヘラ切り無調整である(2)。高台坏は静止糸切りののち回転ケズリ(3)やヘラ切りののち回転ケズリ(5)がある。平瓦は一枚作りで凸面に縄タタキが施されている。第1層からは非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・短頸壷・甕が出土している。須恵器坏はヘラ切り無調整、静止糸切りののち回転ケズリもしくは手持ちケズリがある。

【SX353竪穴遺構】(第23·27図)

調査区北端で確認された。SB359建物跡、SK401土壙より新しい。

南端付近を検出した。平面形は隅丸方形とみられ、東西は 3.10 m ある。底面はほぼ平坦で、壁は小さな段をつくりながらゆるやかに立上がる。深さは調査区北壁で 50 cm ある。方向は南辺で測ると真東を向く。堆積土は 2 層に大別できる。第 2 層 $(2\sim6)$ は、 $6\cdot3$ が炭化物層、 $4\cdot2$ が灰層、5 が黒色シルトである。第 1 層 (1) は黒褐色シルトで、本遺構は機能停止後炭化物や灰が捨てられ(第 2 層 $(2\sim6)$ その後自然堆積 (9.1) で埋まったとみられる。

遺物は堆積土から出土している(第28図)、第2層からは非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕が出土している。土師器坏は有段丸底、須恵器坏はヘラ切り 回転ケズリがある(7)。第1層

からは非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・短頸壷・甕が出土している。土師器坏は 有段丸底、無段平底とともに内面ナデ調整の関東系土師器がある。無段平底のものは両面ミガキの後、 内面が黒色処理されている(6)。須恵器は坏がヘラ切り無調整、静止糸切り 回転ケズリ、静止糸切りののち手持ちケズリ、回転ケズリ(8)があり、高台坏は静止糸切り 回転ケズリである(9)。

【SX354竪穴遺構】(第23·27図)

調査区北側で確認された。SB368建物跡より新しい。

南北3.20m、東西3.00mで、平面形は隅丸方形である。底面は壁付近がやや低く、中央が高くなっている。壁は底面からゆるやかに立上り、上部はほぼ垂直になる。深さは南壁で50 cmある。方向は西辺で測るとほぼ真北方向である。堆積土は3層に大別できる。第3層(5)は地山ブロック主体の粘土、第2層(4)は炭化物を含む灰層、第1層(1~3)は黒色シルトや暗灰色砂質シルトである。本遺構は機能停止後、壁の一部が崩壊(第3層)し、その上に灰が捨てられた(第2層)後、自然堆積(第1層)で埋まったものとみられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕が出土している。土師器坏には無段 平底、須恵器坏には手持ちケズリがある。

(5) 土壙

6 基確認した。5 基は調査区南側で検出している。規模は長軸が70 cm前後のもの(S K 361・365) と長軸100 cm前後のもの(S K 366・369・401・458)がある。平面形は円形を基調とするもの(S K 365・366・458)と方形を基調とするもの(S K 361・369・401)とがある。

遺物はS K361 堆積土から非口クロ調整の土師器甕、S K365 堆積土から非口クロ調整の土師器甕、へラ切り無調整の須恵器坏、S K366 堆積土から非口クロ調整の土師器坏・甕、S K401 堆積土から非口クロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕が少量出土している。

【SK369土壙】(第22·29図)

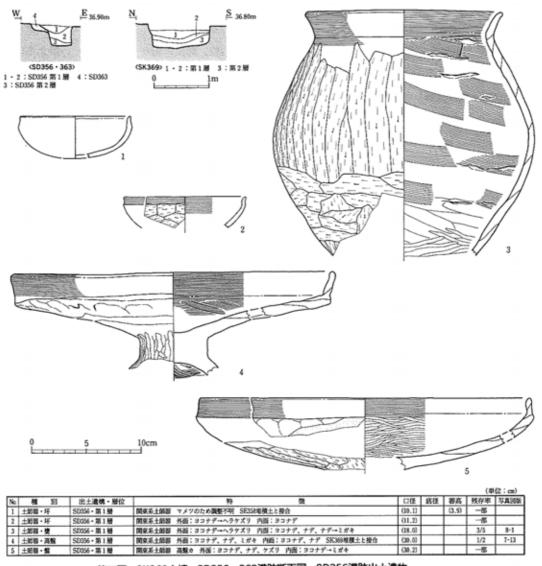
調査区南東部で確認した。規模は 120 cm x 54 cmで、平面形は隅丸長方形である。底面は平坦であるが、わずかに北に向けて低くなる。断面形は箱形である。深さは北壁で 46 cmある。堆積土は 2 層に大別できる。第 2 層(3) は地山ブロック主体の粘土質シルト、第 1 層(1・2) は黒色粘土質シルトや褐灰色砂質シルトで、後者は自然堆積とみられる。

遺物は第 1 層から関東系土師器高盤が出土しているが、これは S D 356 溝跡出土品と同一個体である(第 29 図 4)。

(6) 溝跡

調査区中央から南側で 7 条検出した。上幅が最も広いのは S D 357 の 66 cm、その他は 40 cm前後である。深さは最も深い S D 356 が 32 cmで他は 10 cm前後である。断面形は S D 356 が U 字形、その他は浅皿状である。

方向は 東西方向のもの(SD357・456) 北で西に振れるもの(SD355・356・362・363) 東で



第29図 SK369土壙、SD356・363溝跡断面図、SD356溝跡出土遺物

北に振れるもの(SD363 北部・457)に分けられる。このうちSD363 は北でL字形に東に曲がる。 新旧関係をみてみると、おおよそ の傾向がある。

堆積土は黒色または黒褐色土主体の自然堆積のもの(SD355・356・357・362・456)と地山ブロック主体の人為堆積のもの(SD363・457)に分けられる。

遺物はSD355 堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、ヘラ切り無調整の須恵器坏・須恵器壷、SD357 堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕、平瓦、SD362 から非ロクロ調整の土師器甕、静止糸切りののち手持ちケズリの須恵器坏が少量出土している。

【SD356溝跡】(第22·29図)

調査区南側で確認した南北溝跡で 11.30m分を検出した。S D363 溝跡より新しく、S D357 溝跡より古

110

上幅 48 cm、下幅 40 cm、深さは 32 cmある。方向はおよそN-18°-Wである。底面は平坦で断面系は箱形である。堆積土は 2 層に大別できる。第 2 層(3) は地山ブロック主体、第 $1 \text{ 層}(1\cdot 2)$ は黒色シルトや暗褐色砂で、後者は自然堆積とみられる。

遺物(第29図)は第1層から非ロクロ調整の土師器坏・盤・高盤・甕(3)が出土している。これらはいずれも関東系土師器とみられ、食膳具の内面調整は坏(1・2)と高盤(4)がナデ、盤(5)がナデののちミガキである。

【SD363溝跡】(第22·29図)

調査区南側で確認した北で L 字状に折れる溝跡である。 S D 356・357 溝跡より古い。

上幅 46 cm、下幅 38 cm、深さは 12 cmある。方向は南北部分がおよそN - 18° - Wで、東西部分はほぼ直交する。底面は平坦で断面形は箱形である。堆積土は地山ブロック主体で、人為堆積とみられる。遺物は出土していない。

N - 3 区

民家からみて南側の調査区である。掘立柱建物跡 13、井戸跡 6、竪穴遺構 1、土壙 22、溝跡 25 を確認した。遺構は調査区全体に分布し、密度も濃い。とくに溝跡が多く調査区西側は東西溝が多く、東側は南北溝が目立つ。また、調査区中央北側には掘立柱建物跡、南端西側には土壙が多く認められる。

遺物はSD372・384など溝跡を中心に出土しており、掘立柱建物跡、井戸跡、土壙からは少量出土している。古代の土師器・須恵器が主体で、中世陶器・青磁・石製品は少量である。

(1) 掘立柱建物跡

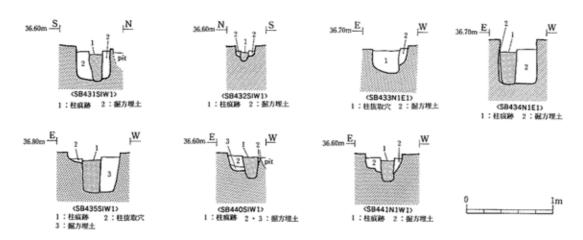
13 棟確認した。調査区中央北側に集中している。全容が分かるものは少ないが、多くは桁行 3 間、梁行 2 間程度の小規模な建物と思われる。方向は 北で西に振れるもの(N-13°-W S B 436) ほぼ真北を向くもの(S B 431・432) 北で東に振れるもの(N-5~19°-E S B 433・434・435・437・440・441・442・516)に分けられる。

柱穴は a) 長辺 80 cmの隅丸方形(SB438) b) 一辺 50 cm前後の方形(SB431・433~436、439~441) c) 一辺 20~30 cmの方形(SB432・437・442・516) がある。埋土は地山ブロックを少量含む黒色または黒褐色土を主体とするものが多い。

【SB431建物跡】(第22·30図)

調査区中央で確認された南北 1 間以上、東西 2 間の南北棟とみられる建物跡である。 S K339 土壙より古い。

柱穴は4箇所検出しており、3箇所で径15cm前後の柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長2.40m以上、梁行は南妻で総長3.28m、柱間寸法は1.64m等間である。方向は南妻で測るとE-3°-Nである。柱穴は一辺40~50cmの方形で、深さは南西隅柱で40cmある。埋土は黒色シルトをを少量含む地山ブロックが主体である。遺物は出土していない。



第30図 SB431~435·440·441建物跡柱穴断面図

【SB432建物跡】(第22·30図)

調査区中央で確認した南北2間以上、東西2間の南北棟とみられる建物跡である。

柱穴は5箇所検出しており、3箇所で径12 cmほどの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長2.20m以上、梁行は南妻で総長3.80m、柱間寸法は東から1.80m、2.00mである。方向は南妻で測るとE-2°-Nである。柱穴は一辺20~30 cmの方形で、深さは南西隅柱で18 cmある。埋土は焼土を含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

【SB433建物跡】(第22·30図)

調査区西側で確認した東西2間以上、南北2間の東西棟とみられる建物跡である。SE380井戸跡、SD372溝跡より古い。

柱穴は4箇所検出しており、2箇所で径16 cmの柱痕跡、2箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長4.20m以上、柱間寸法は東から1.80m、2.40m、梁行は東妻で総長2.10 m以上とみられる。方向は北側柱列で測るとE-19°-Sである。柱穴は一辺50 cmほどの方形で、深さは北東隅柱で32 cmある。埋土は地山ブロックを含む黒色砂質シルトが主体である。

遺物は柱抜取穴から非ロクロ調整の土師器甕、柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕が 微量出土している。

【SB434建物跡】(第22·30図)

調査区西側で確認した東西1間以上、南北2間の東西棟とみられる建物跡である。SE380井戸跡、SD372溝跡より古い。

柱穴は3箇所検出しており、2箇所で径16cmの柱痕跡を確認している。平面規模は桁行が北側柱列で総長2.50m以上、梁行は東妻で総長2.50m以上とみられる。方向は東妻で測るとN-10°-Eである。柱穴は一辺45cmほどの方形で、深さは北東隅柱で50cmある。埋土は地山ブロックを斑状に含む黒色砂質シルトが主体である。遺物は出土していない。

【SB435建物勧】(第22·30図)

調査区北側で確認した東西2間、南北2間の東西棟総柱建物跡である。

柱穴は9箇所すべてで検出しており、7箇所で径16 cmの柱痕跡、4箇所で柱抜取穴を確認している。 平面規模は桁行が北側柱列で総長3.52m、柱間寸法は東から1.72m、1.80m、南北は西妻で総長2.92 m、柱間寸法は北から1.42m、1.50mである。方向は西妻で測るとN-5°-Eである。柱穴は一辺 50~60 cmの方形で、深さは南西隅柱で48 cmある。埋土は地山ブロックを多量に含む黒色砂質シルト である。遺物は出土していない。

【SB440建物跡】(第22·30図)

調査区中央で確認した南北2間以上、東西2間の南北棟建物跡である。SE379井戸跡、SK378・382土壙より古い。

柱穴は5箇所検出しており、4箇所で径14cmの柱痕跡、1箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が西側柱列で総長3.80m以上、柱間寸法は1.90m等間、梁行が南妻で総長3.86m、柱間寸法は1.93m等間とみられる。方向は西側柱列で測るとN-14°-Eである。柱穴は一辺40cm前後の方形で、深さは南西隅柱で30cmある。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトと地山ブロック主体土である。遺物は出土していない。

【SB441建物跡】(第22·30図)

調査区中央で確認した南北2間、東西2間の南北棟建物跡である。SK466 土壙より新しく、SE 379・385 井戸跡、SD372・374 溝跡より古い。

柱穴は5箇所検出しており、3箇所で径14 cmの柱痕跡、2箇所で柱抜取穴を確認している。平面規模は桁行が東側柱列で総長4.40m、柱間寸法は北から2.00m、2.40m、梁行は北妻で総長4.20m、柱間寸法は東から1.80m、2.40mとみられる。方向は東側柱列で測るとN-7°-Eとみられる。柱穴は一辺45 cm前後の方形で、深さは北西隅柱で32 cmある。埋土は地山ブロックを少量含む黒色砂質シルトが主体である。遺物は出土していない。

(2) 井戸跡

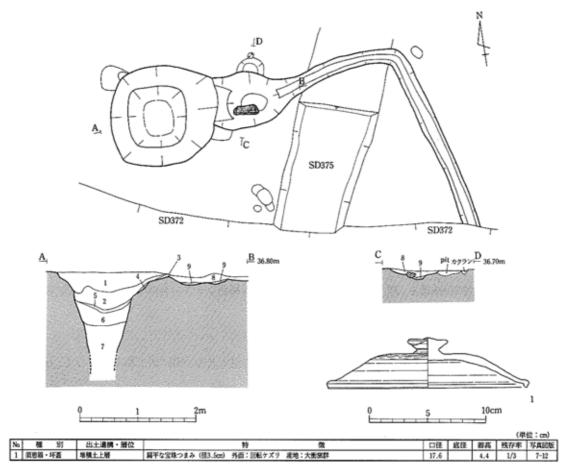
井戸跡は中央から西側で5基、東端で1基確認し、このうち4基を精査した。

【SE380井戸跡・SD381溝跡】(第31図)

調査区中央で確認した井戸跡で、SD381 溝跡が伴う。SB433・434 建物跡、SD375 溝跡より新しい。井戸の底は湧水等で掘削が不能となったため不明である。

規模は一辺が 1.90mほどの方形で、深さは 1.35m以上ある。下端は 60 x 50 cmの隅丸方形であり、底面の形状もこれとほぼ同じとみられる。断面形はロート状をなす。 S D 381 溝跡は S E 380 の東に接続しており、約 3m先で南に折れている。底面レベルは東へ傾斜することから、排水溝と考えられる。上幅 30 cm前後、深さは約 10 cmで、井戸との接続部は上幅 100 cm、深さ 20 cmの土壙状になる。この部分の底面から南へ立上った位置に 40 x 15 cmの石が据えられている。石は長軸を東西に向け、上面中央はかなり磨り減っていることから、踏台として利用されたものと考えられる。

S E 380 の堆積土は 7 層に分けられる。いずれも黒色の粘土質シルトで、自然堆積と考えられる。 S D 381 の堆積土は 2 層に分けられる。下層 (9) は黒褐色砂質シルトで接続部分の底面を薄く覆う。 上



第31図 SE380井戸跡と出土遺物

層(8)は灰黄褐色砂で、溝機能時の堆積土と考えられる。

遺物は 1~6 層から土師器、須恵器が出土している。土師器は非ロクロ調整の坏・甕が主体で、わずかに胴部回転ハケメの甕がある。須恵器は坏、高台坏、蓋、壷がある。蓋(第31図1)は扁平な宝珠つまみを持ち、口縁端部が下に折れる。

【SE379井戸跡】(第32図)

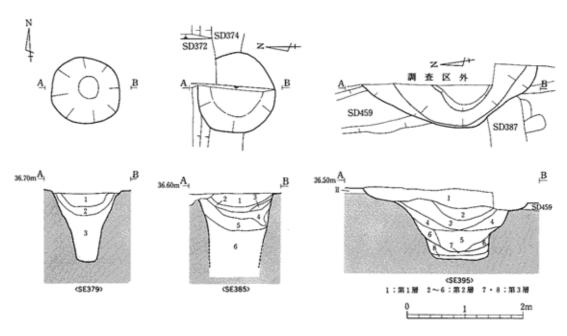
調査区中央で確認した井戸跡である。SB440・441建物跡より新しい。

径1.25mほどの円形で、深さは1.22mある。断面形は上部が開くU字形で、底面は径35 cmほどの不整円形である。堆積土は3層に分けられる。3層は黒色砂質シルト、2層は黒色シルトとスクモの互層、1層は地山ブロック主体の粘土質シルトであり、2~3層は自然堆積、1層は人為的な埋土と考えられる。遺物は出土していない。

【SE385井戸跡】(第32図)

調査区中央で確認した井戸跡である。SD372 溝跡より古い。井戸の底は、湧水等で掘削が不能となったため不明である。

径 1.40mほどの円形で、深さは 88 cm以上ある。断面形は上部がやや開く円筒形である。堆積土は 6 層に分けられる。 $2\sim6$ 層は黒色砂質シルトや粘土質シルトで、自然堆積土である。1 層は地山ブロ



第32図 SE379・385・395井戸跡

ックを多く含む黒褐色シルトで、人為的な埋土である。

遺物は堆積土からロクロ調整の土師器甕、須恵器高台坏・甕が微量出土している。高台坏はヘラ切りののち回転ケズリである。

【SE395井戸跡】(第32図)

調査区東端で確認した井戸跡である。SD387・459溝跡より新しい。

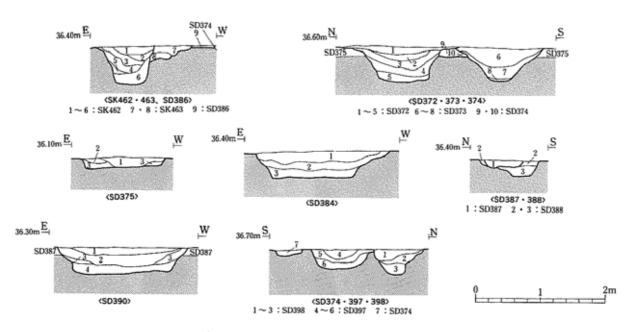
本来井戸側を据えたと考えられるが、側はすべて抜取られている。掘方は底面付近しか残っておらず、その部分は一辺 60 cm以上の方形とみられる。深さは 1.20mである。抜取穴は径 2.20mの円形で、深さは約 1mである。堆積土は 3 層に大別できる。第 3 層 $(7\cdot8)$ は砂を多く含む暗緑灰色粘土で、機能時の堆積土とみられる。第 2 層 $(2\sim6)$ は地山ブロックを多く含む黒色砂質シルトなどで、側を抜き取った後の人為的な埋土である。第 1 層 (1) は黒褐色砂質シルトで、埋戻し後の凹地に自然堆積したものである。遺物は出土していない。

(3) 竪穴遺構

【SX371竪穴遺構】(第22図)

調査区北端で確認した。遺構の南端を検出したにすぎない。

規模は南辺で2.70mあり、平面形は不整な方形とみられる。底面はほぼ平坦で、壁は比較的ゆるやかに立上り、深さは調査区北壁で11 cmある。方向は南辺で測るとおよそ東西方向である。堆積土は2層に分けられる。下層は褐灰色粘土質シルト、上層は黒色シルトであり自然堆積とみられる。遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕が微量出土している。須恵器坏は手持ちケズリが施されている。



第33図 SK462・463土壙、SD372~375・384・386~388・390・397・398溝跡断面図

(4) 土壙

22 基確認し、このうち 9 基を精査した。調査区中央と南西に集中する。規模は S K 473 が 2.50m × 0.80mと比較的大きいが、大部分は長軸 1m前後の楕円形である。深さは S K 462 が 57 cmである他は 10~30 cmと浅い。

【SK462土壙】(第22·33図)

調査区中央東側で確認した。SK463土壙より新しく、SD372溝跡より古い。

規模は90 cm×70 cm以上あり、平面形は不整な楕円形である。底面はほぼ平坦で、壁は急に立上り、断面形は箱形である。深さは57 cmある。堆積土は6 層に分けられるが、いずれも黒色砂質シルトが主体で自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

(5) 溝跡

25 条確認した。調査区全体に分布するが調査区西側に東西溝が多く、東側は南北溝が目立つ。上幅が 20~50 cm (S D 374・381・394・461・477・480) 50 cm ~ 100 cm (S D 374・376・377・386・388・389・391・392・393・396・397・459) 100~150 cm (S D 372・373・375・387・398) 210 cm以上(S D 384・390) のものがある。大部分は ・ の上幅 100 cm以下と小規模であるが、 ・ の大きな溝跡が調査区全体に広がっていること、新旧関係で ・ より新しいことから、面積的には ・ が占める割合が多い。断面形は ・ が浅皿状や上部が開くU字形のものが多いが、 ・ は 逆台形である。

方向は、蛇行気味のものが多いが、おおよそ東西方向(15条)と、南北方向(12条)に分けられる。このうちSD372は方向や規模、断面形からN-1区SD345と一連の溝跡とみられる。堆積土は黒色または黒褐色砂質シルト主体で、自然堆積のものが多い。遺物は土師器・須恵器・中世陶器、青磁、石製品などがあるが、SD372・384・387を除くと他は数点ずつ出土しているにすぎない。

【SD372溝跡】(第22·33図)

調査区南側で確認した東西溝跡で 44.60m分を検出した。調査区中央で南に分岐し、東側ではT字状に方向を南北に転ずる。SB433・434・441 建物跡、SE385 井戸跡、SK462~466 土壙、SD373・374・375・376・377・381・386・387・389・398 溝跡より新しく、SE470 井戸跡より古い。N-1区SD345 と一連の溝跡とみられる。

上幅 0.56~1.50m、下幅 45~60 cm、深さは 56 cmある。方向はやや蛇行しているが、およそ東西方向である。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。堆積土は 5 層に分けられる。いずれも黒色または黒褐色のシルトや砂質シルトであり、自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から常滑産中世陶器の大甕(第34図4)が出土しているほか、非ロクロ調整の土師器 坏・甕、須恵器坏・蓋・甕・壷、瓦が出土している。

【SD373溝跡】(第22·33図)

調査区西側で確認した東西溝跡で 7.00m分を検出した。調査区西側の S D 398 とは一連の溝跡とみられる。 S D 374~376 溝跡より新しく、 S D 372 溝跡より古い。また、 S D 398 は S D 396・397 溝跡より新しく、 S K 479 土壌、 S D 372 溝跡より古い。

上幅 1.30m、下幅 52 cm、深さは 57 cmある。方向はおよそ E - 40° - Sで、S D 398 はおよそ E - 10° - Nである。底面はほぼ平坦で、断面形は開きが大きい逆台形である。堆積土は 3 層に分けられる。3 層は褐色粘土で壁の崩壊土、2 層は黒色砂質シルトで、機能時の堆積土である。1 層は地山ブロックを多く含む黒色砂質シルトで人為的な埋土とみられる。遺物は出土していない。

【SD374溝跡】(第22·33図)

調査区西側で確認した東西溝跡で、東端でT字状に南北に折れる。東西 40.00m分を検出した。S B 441 建物跡、S D 375 溝跡より新しく、S E 385 井戸跡、S K 383 土壙、S D 372・373・386・387・396 溝跡より古い。上幅 20~80 cm、深さは 21 cmある。底面は平坦で、壁は急に立上る。方向はやや蛇行しているがおよそ東西方向である。堆積土は黒色砂質シルト主体で、自然堆積とみられる。

遺物は堆積土からロクロ調整の土師器坏・高台坏・甕、高台坏、甕、須恵器坏・甕が微量出土している。

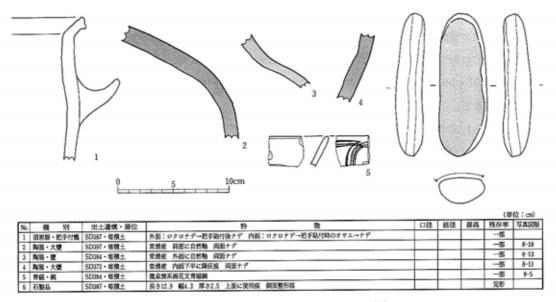
【SD375溝跡】(第22·33図)

調査区中央で確認した南北溝跡で 19.50m分を検出した。S B $438 \cdot 439$ 建物跡、S D $372 \cdot 373 \cdot 374 \cdot 376 \cdot 381$ 溝跡より古い。上幅 $1.00 \sim 1.40$ m、下幅 $1.00 \sim 1.12$ m、深さは 18 cmある。底面は平坦で、壁は急に立上る。方向はN -21° - E である。堆積土は 3 層に分けられる。 $2 \cdot 3$ 層は明黄褐色粘土で壁の崩壊土、1 層は黒色砂質シルトであり、いずれも自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏が少量出土している。須恵器坏は回転ケ ズリが施されている。

【SD384溝跡】(第22·33図)

調査区東側で確認した南北溝跡で 8.60m分を検出した。 S B 437 建物跡、 S D 387・388・389・393 溝跡より新しい。上幅 2.40m、下幅 1.45m、深さは 40 cmある。底面は平坦で断面形は逆台形である。 方向



第34図 SD372・384・387・397溝跡出土遺物

はN-21°-Eである。堆積土は3層に分けられる。3層は明黄褐色粘土で壁の崩壊土、1・2層は黒色砂質シルトであり、Nずれも自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から常滑産中世陶器の甕(第34図3) 龍泉窯系画花文青磁碗(第34図5)が出土しているほか、非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・甕が出土している。

【SD386溝跡】(第22·33図)

調査区東側で確認した南北溝跡で 7.80m分を検出した。S D 374・377 溝跡より新しく、S K 463 土 壙、S D 372・387 溝跡より古い。上幅 30~80 cm、深さは 20 cmある。底面はほぼ平坦で、壁はゆるや かに立上る。方向はおおよそ南北方向である。堆積土は黒色砂質シルトの自然堆積土である。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・題・甕が微量出土している。須恵器坏は回 転ケズリが施されている。

【SD387溝跡】(第22·33図)

調査区東側で確認した東西溝跡で 31.00m分を検出した。SB436・516 建物跡、SK460 土壙、SD374・386・388・394 溝跡より新しく、SE395 井戸跡、SD384・390・391 溝跡より古い。南北方向のSD459 とは一連の溝の可能性がある。上幅 0.50~1.20m、深さは 30 cmある。底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立上る。方向は東西方向である。堆積土は黒色砂質シルトで、自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕・把手付甑(第34図1) 石製品(第34図6)が少量出土している。

【SD390溝跡】(第22·33図)

調査区東側で確認した南北溝跡で 8.40m分を検出した。 S D 393・394・461 溝跡より新しい。上幅 2.10m、下幅 1.20~1.65m、深さは 40 cmある。底面は平坦で、断面形は逆台形である。方向はN - 8° - E である。堆積土は 4 層に分けられる。 4 層は地山ブロック主体で壁の崩壊土、1~3 層は黒色砂質シル

トが主体で、いずれも自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

【SD397溝跡】(第22·33図)

調査区西端で確認した東西溝跡で 5.30m分を検出した。 S K 479 土壌、S D 396・398 溝跡より古い。上幅 88 cm、下幅 50 cm、深さは 40 cmある。方向はおよそ東西方向である。底面はほぼ平坦で、壁は急に立上る。堆積土は 3 層に分けられる。3 層が褐色粘土、2 層が褐色砂質シルト、1 層が地山ブロックを多量に含む黒色砂質シルトであり、本溝は人為的に埋戻されたと考えられる。

遺物は堆積土から常滑産の中世陶器大甕(第34図2)が出 土している。

4.0区

調査対象地域南東部のJR陸羽東線に沿う調査区である。 掘立柱建物跡6、井戸跡1、竪穴遺構1、土壙2、溝跡9を確認した。遺構は調査区全体に認められるが、密度は薄い。遺物は井戸跡、竪穴遺構などから土師器、須恵器が出土している。

(1) 掘立柱建物跡

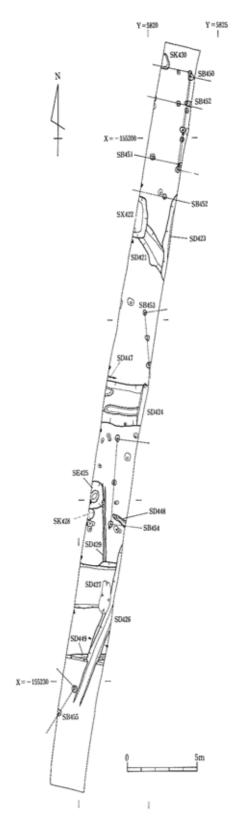
6 棟確認したが、全容が分かるものはない。建物跡の方向は 北で西に振れるもの(N-6°-W SB453) 北で東に振れるもの(N-6~10°-E SB450~452・454)

東に大きく振れるもの(N-38°-E SB455)がある。 柱穴は30cm前後の方形で、柱痕跡は径12cm前後である。柱 穴埋土は地山粒を少量含む黒色または黒褐色砂質シルトが 主体である。

【SB451建物跡】(第35図)

調査区北端で確認した南北3間、東西2間以上の南北棟と みられる建物跡である。SB450建物跡、SK430土壙より 古い。

柱穴は 5 箇所で検出しており、4 箇所で径 12 cmほどの柱 痕跡を確認している。平面規模は南北が桁行が東側柱列で総 長 5.12m、柱間寸法は北から 2.16m、1.58



第35図 0区平面図

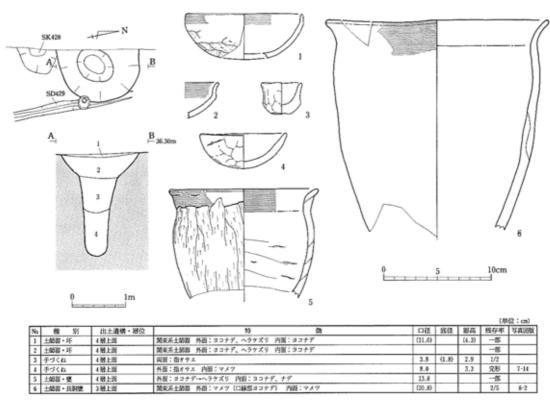
m、1.38m、梁行は南妻で総長 1.88m以上ある。方向は東側柱列で測るとN - 10° - Eである。柱穴は一辺 30 ~ 40 cmの方形で、深さは南東隅柱で 22 cmある。柱穴埋土は地山ブロックを少量含む黒色シルトが主体である。遺物は出土していない。

(2) 井戸跡

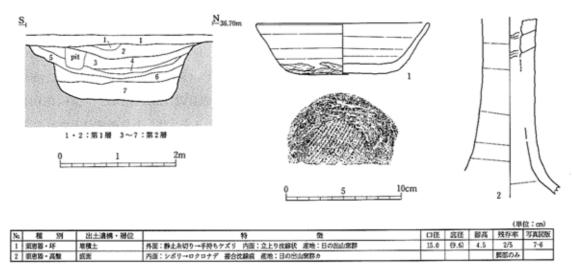
【SE425井戸跡】(第36図)

調査区南側で確認した井戸跡である。SD429 溝跡より古く、SK428 土壙より新しい。平面形は 円形で、径は確認面が1.50m前後、底面付近は44 cmである。断面形はロート状である。堆積土は4 層に分けられる。4層は黒色粘土、3層はオリーブ黒色粘土、2層は暗オリーブ灰色砂質シルト、1層 は黒褐色砂質シルトであり、いずれも自然堆積とみられる。

遺物は堆積土から出土している(第36図)。4層上面からは非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕、手づくね土器が出土している。土師器は坏が内黒の在地のものに加えて内面ナデ調整の関東系土師器(1・2)がある。小型甕は外面にケズリが施されている(5)。手づくね土器は指オサエのみの粗い仕上げである(3・4)。3層上面からは非ロクロ調整の土師器甕が出土している(6)。器形からみて関東系土師器とみられる。このほか1~3層から非ロクロ調整の土師器坏・高坏・甕、須恵器高台坏、手づくね土器が出土している。土師器坏は有段丸底のほか、関東系土師器もある。須恵器高台坏は回転ケズリが施されている。



第36図 SE425井戸跡と出土遺物



第37図 SX422竪穴遺構と出土遺物

(3) 竪穴遺構

【SX422竪穴遺構】(第35·37図)

調査区北側で確認した。SD421 溝跡より新しい。

南北は2.30mあり、平面形は方形とみられる。底面はほぼ平坦で、壁は急に立上る。上部は北側でや中開き、南は段を形成する。断面形はビーカー形で、深さは調査区西壁で1.00mある。堆積土は大別2層に分けられ、さらに第2層は5層、第1層は2層に細分される。第2層(3~7)は7が黒色粘土、5・6が黒褐色粘土質シルト、4は炭化物を多量に含む焼土層、3は黒褐色砂質シルトである。4は自然堆積で埋まる過程で、焼土や炭化物を廃棄したものと考えられる。3まで埋まった段階でピットが造られ、その後凹地に第1層(1・2)の黒色砂質シルトが堆積している。

遺物は底面から須恵器高盤、堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・盤・甕、須恵器坏・高盤・甕が 出土している(第 37 図)。高盤は脚部のみ(2)で、堆積土の土師器坏や高盤のうち内面ナデ調整の ものは関東系土師器である。須恵器坏は静止糸切りののち手持ちヘラケズリが施されている(1)。

(4) 土壙

調査区北端と南側で2基確認した(SK428・430)。いずれも径80cm前後の円形を基調とする小規模なものである。

【SK428土壙】(第35·38図)

調査区南側で確認した。S E 425 井戸跡より古い。平面形は径 70 cm前後の円形とみられる。底面はほぼ平坦で、壁は底面からゆるやかに立上る。深さは調査区西壁で 64 cmある。堆積土は 3 層に分けられるが、いずれも黒褐色シルト主体の自然堆積土である。遺物は出土していない。

(5) 溝跡

9 条確認した。このうち S D 447 は S D 424 北側の西壁で確認している。上幅から 2.30 ~ 2.50 m の もの (SD424・427)、1.00m前後のもの(SD421・426)のもの、0.30m前後のもの(SD429・448・449)に分けられる。方向はa)東西方向のもの(SD424・427・449)、b)南北方向のもの(SD423・429)、c)北で西に振れるもの(SD421・448)、d)北で東に振れるもの(SD426)がある。深さは1.10mのSD424を除けば0.30~0.50mのもの(SD426・427)と20cm以下のもの(SD421・423・429・448・449)があり、全体的に浅い。堆積土はいずれも黒色または黒褐色シルトを主体した自然堆積土である。

【SD424 溝跡】(第35·38 図)

調査区中央で確認した東西溝跡で3.00m分を検出した。上幅2.30m、下幅1.20m、深さは1.10m ある。底面は壁が立上るところで窪む部分があるが、おおむね平坦である。壁は底面からゆるやかに立上り、断面形は逆台形である。方向はほぼ東西方向である。堆積土は3層に大別される。第3層(7・8)は地山ブロックを主体としており、壁の崩壊土とみられる。第2層(2~6)は黒褐色の細砂と砂質シルトの層が互層になっており、自然堆積土である。第1層(1)は地山ブロックを多量に含む黒色シルトで、人為的な埋土である。遺物は出土していない。

【SD426溝跡】(第35·38図)

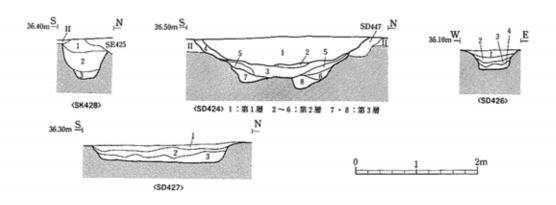
調査区南側で確認した溝跡で 9.50mを検出した。 S D427・449 溝跡より新しい。

上幅 86 cm、下幅 56 cm、深さは 32 cmある。底面はほぼ平坦で、壁は底面から垂直に立上り、上部で開く。断面形はビーカー形である。方向はN - 27° - Eである。堆積土は 4 層に分けられる。3・4 層はオリーブ色粘土、2 層は暗褐色砂質シルト、1 層は黒褐色砂質シルトで、いずれも自然堆積とみられる

遺物は非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕が微量出土している。土師器坏は有段丸底である。 【SD427 **溝跡**】(第35・38 図)

調査区南側で確認した東西遺跡で 2.90m分を検出した。 S D 429 溝跡より新しく、 S D 426 より古い。

上幅2.48m、下幅2.18m、深さは調査区西壁で34cmある。底面は平坦で、壁は急に立上り、断面形は皿状である。方向はE-4°-Sである。堆積土は3層に分けられる。3層は地山ブロックを主体とし、2層はオリーブ黒色粘土、1層は地山ブロックを多量に含む黒褐色砂質シルトで、本溝は人為的に埋戻されている。遺物は出土していない。



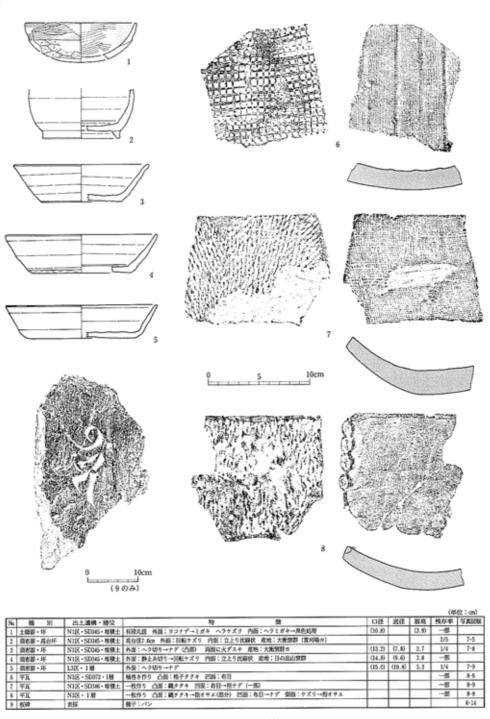
第38図 SK428土壙、SD424・426・427溝跡断面図

5. 表土等の出土遺物

第 層の出土遺物や中世の溝跡から出土した古代の遺物を一括した(第39図)。1 は小型の有段 丸底の土師器坏である。口縁部はヨコナデののちミガキが施されている。2 は小型の高台坏である。 口縁部が直立気味になっている。3~5 は須恵器坏で、器形は3が逆台形、4・5 が皿形である。底 部は3・5 がヘラ切り、4 は静止糸切りののち回転ケズリが施されている。6 は桶巻き作りの平瓦 である。凸面に正格子タタキが施されている。7・8 は一枚作りの平瓦で、凸面には縄タタキが施 されている。8 の側面はケズリののちに指オサエがみられる。9 は調査区周辺で表採した板碑であ る。種子はバン(大日如来)である。

連構名	横流	規模(間)	総長(n	n)		- 1	生間寸法	(m)		T	生穴平面形と	规模(長輪・	短輪・深さ	cm)	注83铢(on)	方向(*)	重	複	関(踩
SB450	不明	3X7年 5.	20×不明	北北	Þ61.50	1.50	2.20			7	不整方形	38~42	28~36	26	径i0~12	N-10'-E	SB45	l→SB	450	
SB451	南北棟	3XXXL 5.	12×1.88	以上 北太	⊳52.16•	1.58	1.38 東	から1.88			方形	30~40	30~40	22		N-10"-E	\$B451-	SB450,	SK430	
SB452	不明	21년×11년 1.	.70以上×5	5.30 西北	から1.70)				- 1	不整円形	32	30	L	任10	E-10"-S				
SB453	不明	2以上X研 4.	00以上×7	7明 北太	აგ2.00	1.0)			_;	不整方形	26~32	26~32	12		N-6-W				
SB454	不明	微上X环 4.	80以上×7	不明 南本	b 52.40	1.2.4						30~32		_	100.00	N-5'-E				
SB455	不明	ILLX標 1.	80以上×7	不明 北太	b 61.80)				_	不整方形	38	36			N-38'-E				
遺構名	平面形	新面形	規模(長報)	X短職:n)	深さ(cm)	;	敢 複	関	係				堆積土	<i>t</i>	どその他の	の特徴				
SE425	円形	ロート状	径1,50	-	190	SK4	28→SE42	5→SD42	9	最下	幕に自物? 1・	2署-共興-日	オリープ区	201	シルト(自然)、34曆-素	きオリー	プ属色料	生(自)	9
SX422	方形	ピーカー形	2.30×0.	860XLE	100	SD42	21→SX42	2		期湯	- 別色砂質シルト	(自然)、影響	6:展開色砂質	91/	(自数),7: 统	場(人類)。か	19: A66	土主体(自	8	
SK428	円形	U字形	径0.70		64	SK4	28→SE42	5		_	褐色シルト									
SK430	楕円形	U字形	0.86ILE	×0.80	17	SB45	31→SK43	10		地	自プロック	を含む川	「褐色シル	レト	主体(人	Ά)				
連構名	上幅(m)	下概(m)	蒸さ(m)	斯面	形 加	旬(*)	魚	復関	係	\Box			堆積	土な	どその他	の特徴				
SD421	1.00~1.20	0.44~0.80	11	皿 状	N-4	r-W	SD421→	SX422,S	D423		暗褐色シル	/ト主体	(自然)							
SD423	0.54以上	0.10以上	17	U字形	N-8	ř-E	SD421→	SD423			上層一里視	色シルト主	体(自然)	、 F/	要ったよい	黄褐色砂	質シル	ト主体(自然)	
SD424	2.30	1.20	110	逆台形	E-8	-S	\$D447→	SD424		- 1	町屋-地山ブロック	を含む場合ジネ	十(人為)、第28	-56	创始的	6頭(0数).	飘唱·籼	プロック主	值图	
SD426	0.86	0.56	32	ピーカー	形 N-2	7-E	SD427+4	49→SD42	26		1・2層-黒褐	色谱褐色	砂質シル	1) (自	然)、3・4周	-オリー2	類色點	注(自)	5)	
SD427	2.48	2.18	34	皿状	E- 4	*-S	SD429→SE	M27→SD42	5		層-地山ブロック	を含む開発色色	増シルト(人2	U.2#	オリーブ開创	胜(人為)、第	カリブロ	7.夕主锋()	(数)	
SD429	0.22	0.08	3	浅皿状	N-I	'-W	SE425→SD	429→SD427	1		風褐色シル	/ト主体	(自然)							
SD447	0.55以上	0.28以上	40	皿状	E-8	:-S	SD447→	SD424		- 1	眼褐色土	(自然)								
SD448	0.30	0.20	9	皿状	E-30	r-S					肌褐色土	(自然)								
SD449	0.34	0.10	8	皿 状	E- 3	:-N	SD449→	SD426			風褐色土	(自然)								

第2表 0区遺構属性表



第39回 第 I 層出土遺物

連携名	構造	規模(国)	総長 (m)		桂印	明寸法 (m)		柱穴平側形と	規模(長輪・	短輪・探さ	_	柱痕跡(cn)	方向(*)	雅	视「	関 係
SB329	東西株	SILVELL (4.46以上×不明	東から2.17	2.34	不明	ij.		T 1885 2 7 7 7 10	40	40		長12	E-5'-N	-		
SB330	東北部(四部)	3X2 6	6.06×3.66	北から2.14・	1.70-2.2	12 東白	r61.92	1.74		40~60					SB330		
SB331	原用信用北核	3×3 (5.64×4.24	北から2.10・	1.90-2.0		52.60-2.2		長方形	40~60				N-H'-W	SK326-	SB331	+SK490
SB332	不明	201.Ex2	1.88ULE×4.20	東から1.88	8	北台	≥62.04	+2.16	不整方形	40	40			N-7'-E	-		
SB333	不明	SULVALUE 2	1.80以上×1.36以上		0.1.52	東台	÷61.36		不整円形	25~30				N-2'-E			
遺構名	平面形	新面布	· 超技術的/短輪		惠	複	80	係				4	どその他	の特徴			
SK326	不整方形	皿 状	1.10×1.10	30	SK326-	→SB331	SD514		用色シルト主			_					
SK327	長楕円形	皿状	1.60×1.00	31					黒色シルト主								
SK328	不整方形	皿 状	1.30×1.00	13					顔色シルト主								
SK488	異丸長方形	田 状	2.10以上×4.70以						用色シルト主								
SK489	異丸長方形	皿状	0.80×0.55	28					顔色シルト主								
SK490	不整件円形	皿状	1.10×1.00	17	SB331,	SD513-	+SK490		黒色シルト主			_					
SK491	長楕円形	皿 状	1.30×0.205	E 18	SD513-	→SK491			風色シルト主								
SK492	不整方形	進台形	0.80×0.75	13					風色シルト主			_					
SK493	楕円形	组 状	1.55×1.30	13					単色シルト主	:体 (人2		_					
遺構名	上幅(m)	下幅(m)	深さ(四) 数	面形 方	9(°)		被関	係				土な	とどその作	物の特徴			
SD512	0.45~0.60	0.25~0.3	6 後			D512→S			黒色シルト			_				_	
SD513	0.45~0.90	0.30~0.5	5 16 改和	E秋 E-3		330, SD612			風色シル!								
SD514	0.30~0.50	0.10~0.3	6 线(E-2	N SI	B330,SK	(326→S	D514	黒色シルト	・主体 ()	183)						

第3表 L-1区遺構属性表

遺蹟名	横流	規模(間) 総長 (m)	柱間寸	法 (m)	程大平面形と	規模(長輪·矩					重	複関	係
	RONGER	1512×2 4.0254.2×4.22	西から1.96・2.06	北から1.92・2.30	不整方形	35~40	30	38	模12	N-III-W			
		411-x511- 7.2011-x1.4011-		東から1.40	方形	40	30~35	66	狂物	N-11'-E	SB337	→SB33	5
			24-61.58-1.64-1.60-1.60	東から1.60	方形	35~40	30	33	径10~12	N-9'-E	SB336	→SK49	6
		251.1×2 2.0613.1:×3.24		北から1.60・1.64	不整円形	20~30	20	19	径10	N-1'-W	SB337		
SB338		SLEXSLE 1.MIZEX1.MIZE		北から2.20	不整円形	35~45	20~30	18	径10	E-28"-N	SB338	→SK49	4
	平面形		(m) 原3 (m) III	夜 関 係			堆積土	4	ぐその他の	の特徴			
SK494		皿 状 径1.40~1.50		K494	黒色シルト主	体(自然))						
SK495		皿 状 径1.20	15		馬色シルト主	体(自然)						
	開丸方形	四 秋 1.7%让×4.9%	11 17 SB336→SI	K496	助色砂質シA	/ト密体 (自然)						

第4表 L-2区遺構属性表

遺構名	構造	規模(間)	総長 (m)		ŧ	間寸法	(m)		1	生穴平面形と							夏 関 係
SB323	東西線(灰嶺)	MALENS .	4.86以上×5.	60 単め	962.52	-2.34	2	\$+61.60	1.50-1.5	0 7	方形	80~90			理25		SB323→	
SB324	京窑行商北接	3×201.h	4.80×1.80D	上北か	-52.60	2.20-2	.00 東	から1.8	90	- 1	不整方形	50~65				1- 00 0		SD315+316
SB339	不明(2時期)	從比以	4.100XE×4	20 東か	-61.90	-2.20	#b	から1.9	0.2.30		不整方形					1	-	SD315-316
SB340		窓上×2	3.700X.E×3.	70 東か	r61.70	-2.00	北	か61.9	0-1.80	:	不整方形	35~55	25~30	20			SB340→	SD315
SB506			1.7002.E×4	00 西か	r 51.70)	#t	から4.0	00	7	不整方形	20~30	20	15	提10~12	N-19'-E		
SBS07			1.80GLE ×3.	50 西か	n 61.80)	12	から1.7	75-1.75	- 1	不整方形	40	30		提12			K319,SD815
SB508		SILENBLE	3.46LLE × 2.300	上博か	951.60	1.80	東	p-62.3	30	- 1	不整円形	25~45	25~40	35	復12~14	N-E-R	SB508-	SD315
SB509		提上xt以上	1.20%E×1.600	上 押女	-61.70)	東	\$ 61.6	50	- 1	不整方形	40~50	30~40	40	班12~14	N-6-W		
	東西線		3.90GLE×2				北	p.62.4	10		不整方形	25~40	20~30	10	在10	E-8'-S	SKX1-501-4	8865~5005
			現機技能×			1		(4)	係	Т					どその他			
	腐丸方形	地凸形	1.20×1.2		190					993	井戸観,後数穴1.	Next2ie46	讲明,相限土壤	18-9	idekuk ti	位置音シルト。	以着・見意シルト。	第3種・地址プロック主体
SE312		逆凸形	₹2.50		160					761	(6月後,600大年)	1,650m8.5	建上军港市	JPpd	化物性质色能力	费303.影響·	組プロックも多葉	公会も原色を土質ショナ
SE321	7 7 7 7	ロート状	₹\$0.85		64						下部に曲物							
SX320		箱形	3,20×2.8	10	40	SD50	4→SX32	00→SD3	325	第1	第一周褐色	シルト主	*(自然)、	Ħ2#	一地山フ	ロック主	体(人為) 7	5向: E-19'-S
SK313	不整円形	旦 状	1.29×1.3	50	18	SK31	3→SB51	5		J.J.	色シルト主	体(自然	\$)					
		Ⅲ 状	1.30×1.3	0	20					馬1	色シルト生	(体(自然	\$)					
		皿 状	3.38×3.6	MACH:	18	SB50	7→SK31	9			色シルト主							
SK322	長楕円形	皿 状	1.46EEX1	1,000	20	SK32	2→SD31	5-325			色シルト主							
SK497	不整長方形	皿 状	1.30×0.6	60	30					馬	色シルトま	E体(自然	(2					
	楕円形	田 状	0.85×0.8	0	13	SK50	1→SB51	15		.851	色シルトま	E体(自角						
遊機名	上幅(m)	下6版(m)	原さ(cm)	新加州	ら か	R(")	701	被目	第 係						どその作			
	0.32~0.72			皿 状		1000	B223-324-	335-340-50	08+505_SX32		16-325SD61				体(自然)		
SD316	1.00~1.50	0.30	43	U字形	E-35	7-5	SB024, SD01	17-318SI	0806-+SD815		用色シルト			側	(軽い段			
SD317	0.50~0.60	0.12~0.2	38 30	リ字形	N-2	7-W	SD318→	SD317-	→SD315		想色シルト	上主体([1然)					
SD318	0.76	0.20~0.3	30 28	U字形	N-2	2-W :	SD318→	SD316+	317		題色シル?							
SD325	0.40~-0.50	0.20~0.3	60~72	U字形	N-5	-E S	SX320,SK	322SD3	25→SD315		地山プロ:			明褐	色粘土質	シルト(人24)	
SD498	0.16	0.18	5	浅皿状	E-1'	-N :	SD498→	SD315			風色シル)							
SD499	0.24~0.30	0.12~0.1	14 9	线皿状	E-13	r-S :	SD499→	SD315			風色シル1							
SD500		0.20		浅皿状	E-25	y-S					風色シル							
SD502	0.40	0.22	4	线皿状	N-2	3-°					黒色シル!							
SD503	0.90	0.48	31	U字形	E-20	r-N					黒色シル!							
	0.80~1.10	0.52~0.6	54 8	浅皿状	E-13	8'-N	SD504→	SX320			黒色シル]							
SD505	0.66~0.90	0.40~0.6	60 12	线皿状	N-I	T-W					黒色シル	主体(1然)					

第5表 L-3区遺構属性表

遺構名	構造	規模(間) 総長 (m)	柱間寸	法 (m)	柱大平面形と規模(長齢	短輪・深さ:			重	视同	
SB443		1011×1012 1.80012×1.80012	南から1.80	否から1.80	不整円形 38			N-8'-W	SB443		
	- Control of the Cont	2×2 2.80×2.80	北から1.40・1.40	北から1.40・1.40	方形 46~56	32~46	60 提18~20	真北方向	SB444	→SD44	16
		30LE×2 4.440X.E×5.20	南から2.34・2.10	東から2.80・2.40	製丸長方形 100~116	70~92	28 提35	N-9-E			
			西から1.58-1.66-3.35(2間分)		不整円形 25~40	20~35	20 径19~12	N-2-E			
	平面影	新面形成原设地区地		複 関 係			などその他の				
	関丸方形	图 状 1.300±×1.000			黒褐色砂質シルト主体	* (自然)、	底面付近薄	く粘土化	。方向:	ほぼま	西方向
	不整円形	田 秋 3.20×3.00	26		黒褐色シルト主体 ()	(1然)					
		設付すり算状 2.40×1.90	36		想色シルト主体(自)	然)					
	商円形	皿 状 0.80以上×1.			黒褐色シルト主体 ()	自然)					
	異角長方形	証 状 1.34×0.90	27		黒褐色シルト主体 ()	自然)					
	不整円形	皿 状 0.84×0.80	30		黒褐色シルト主体()						

第6表 M区遺構属性表1

57

遺構名	上幅(m)	下幅(m)	探さ(cm)	新面形	方向(°)	重複関係	単模土などその他の特徴
SD305	0.50~0.64	0.26~0.42	19	皿 状	E-35'-S	SB444→SD305	黒褐色シルト主体 (自然)
	0.20~0.40			皿 状	N-25'-E	SD307→SD510	暗褐色砂質シルト主体 (自然)。南側でし字状に組曲
SD308	0.44~0.62	0.10~0.24	11	餁 状	E-207-S	SB412, SD309-+SD308	黒褐色シルト主体 (自然)。蛇行気味
	0.32~0.48			U字形	E-17-N	SB412→SD309	馬褐色粘土質シルト (人為)
	0.50~1.10			回状一部配形	E-5'-N		第1層-周褐色砂質シルト(自然)、第2層-黒褐色粘土(人為)
	0.28~-0.40			U字形	門形		黒色シルト主体 (自然)
SD484	$0.96 \sim 1.12$	0.64~0.84	23	U字形	N-35'-E	SB443SD484	黒色シルト主体 (自然)
	$0.46 \sim 0.60$		11	皿状	N-T-E	SD487→SD486	皿褐色シルト主体 (自然)
SD487	0.500X.E	不明	10	皿 状	E-2'-N	SD487→SD486	風褐色シルト主体 (自然)
SD610	$0.38 \sim 0.44$	0.22~0.34	4	皿 状	E-1'-S	SD307→SD510	退褐色シルト主体(自然)

第7表 M区遺構属性表2

遺構名	構造	規模(第0	総長(n	n)		ŧ	間寸法	(m)		- 1	柱穴平面形と	規模(長龍・	短輪・探さ:	m)	柱成路(云)	方向(*)	雅	被馬	Ø 66
SB411	東西株	ULX2	4.74以上×1	1.60 東台	+52.4	.2.28	4	\$ 63.6	0(2間分)	7	不整方形	30	26	33	£14	異之方向			
SB412	来西陳	3×2	5.60×4.10	東か	61.80	2.20-1	.60 #	たから2.1	0-2.00	7	不整方形	50	40	14	214	N-17-E	B412~SX2	08-400.SI	008-309
	東西棟	1×2以上	5.76×2.10	江上 変か	61.94	1.84-1	.98 #	t \$62.1	0		方形	44	34	30	掛14~18	N-7'-E	SB413	→SD3	47
SB414	東西株	型以此	10.66以上×1.9	磁上 數特	2,842.00	2.16-2.06	2.18 #	たから1.9	6		方形	50~70	40~50	40	生14~18	E-5'-N	SB414	→SB4	19
SB415	東西棟	DARTE	5.52×不明	楽か	61.85	1.87-1	80 年	喇			方形	44	28~38	25	登12~30	E-10"-S			
SB416		型上X種	4.40×不明	東か	61.50	1.28-1	.66 P	alili			不整円形	30~38	30	30	但14~16	N-3-W	SB416	→SX3	49
SB417	南北棟	SULVEU	5.420 <u>L</u> ×2.10	乱上 北か	61.84	1.76-1	82 25	から1.0	6		異丸方形	30~36	30	50	復16	N-40'-E	SB417-+	\$8406,3	SD050
	南北棟	似LX科	5.3SULE × 2	何り北か	61.85	1.75-1	.75 3	199		7	方形	30~36	30	40	2£16	N-45'-E			
SB419	南北榛	能比如	1.96以上×4	1.62 記か	61.90	,	7.	たら4.6	2	7	不整方形	46	44	51	復22	N-3-W	SB414	→SB4	19
SB420	不明	ZXIBLE .	5.00×2.200	は上 楽か	63.10	-1.90	19	₩62.2	0		異丸方形	30~36	30		径16~18	E-37-N			
SB511	不明	2/1일上	3.66×1.20	果か	61.90	1.70	- 2	th 61.2)		不整方形	20~34	20~30		£14	N-II'-E			
消機名		新国发	(現場() ()	(機):00	要さ(cm)	10	複	140	GE.	Г			地積土	tel	でその他の	の特徴			
SX343	隅丸方形	箱形	2,5000	60以上	50					18	- 無色砂質シ	ルト(人為)	,2個一灰美	Nei	砂質シルト	(人為)、3種	- 黑色砂	マルト	(A,2h)
	隅丸方形	箱形	3.60×1.	60以上	32	SB416	→SX3	49		馬	色砂質シル	ト主体	(人為)						
	飘丸方形	和形	3.50×1.		70	SD350	→SX35	51		黑色	色砂質シル	ト主体	(人為)	_					
SK310		田 状	径1.20以	Ŀ	31	SB412	→SK31	10		黑	色砂質シル	卜主体	(自然)						
SK344		旦状	径0.90以	£	5	SK344	→SD34	41		黑色	色砂質シル	卜主体	(自然)						
		且状	1.20×5.			SB412	→SK31			馬包	色砂質シル	ト主体	(自然)						
	上幅(m)	下幅(m)	200			10	Ĥ		低				堆積	土な	どその他	の特徴			
	0.50~0.76			皿 状	N-10		K344→	4004.11											
SD342		0.20		後証状	N-28		D342→												-
SD345		0.92		遊台形	N-F	_	D345→			- 1	用褐色粘土	質シルト	·主体 (E	(然)	. SD372	と一連			
	0.64~0.80			逆台形	N-11		D345→				明色粘土質								
SD347		0.36		遊台形	N-1		B413→	SD347		_ /	医色粘土質	シルトま	体(自然	(2					
	0.42~0.84			造台形	N-11						上層一點色	シルト	(自然)、7	層	- 地山ブ	ロック主	体		
	0.45~0.80			箱形	N-C				18,SX351	1 ,	上層一無色	夕質シルト	(自然)、7	M	地山ブロ	ックを含	ひ黒褐色	砂質シ	ルト
SD517	0.30	0.12	10	浅皿状	E-35	-S S	D342→	SD517											

第8表 N-1区遺構属性表

連携名	構造	規模(周)	総長 (r	n)		柱間寸	法 (m)		柱穴学術形と	個域(収集)	初輪・資金	(m)	RESIDENCIA	方向(*)	意 複 間 係
SB359	東西棟	102	5.90×4.40	集	sh 52,00	1.96-1.94	北から2.	20+2.20			32~46			N-3'-W	SB402, SX303 SR368
SB368	南北棟	611×511	5.800E×4.3	OULL MIS	6-54,0002	類分)・1.96	東から4.		異丸長方形	66	60		担6~18	N-Y-W	SB368-+SX354
SB370	不明	部上×種	4.00GLE×	不明 北	か 52.0	0.2.00	3,410		偶丸長方形				S16~18	N-E-W	30300 -3A334
SB402	東西株		5.38×4.88			1.76-1.90	北から2.	80-2.08		24~34	20~26		担12~14	E-18'-N	SAMS-58M5-58353-465
SB403	不明	以比如此	1.800L±×1.8	101E 182	から1.8)	西から1.	80	不整方形	24~32		14	22.00	N-C-E	SB402→SB403
SB404	東西株	部止料	2.80以上×	2.80 25	から1.4	3-1.40	北から2.		不整方形		22~30			N- 1-E	Direc Direc
	南北棟	101	1.24×1.22	北	か61.2	4	東から1.	22	現丸方形		16~22		32.00	N-10'-W	
	不明	ILL12種	1.06以上×	不明 南	から1.0	5			朝丸方形	28~36	26			N-5'-E	SB406→SX352
	不明		2.20以上×	7明 北	から2.2)			開丸方形		28			N-7-E	0.000
SB409			2.30×不明	#b	から2.3)			隅丸方形	38~48	34~46	38	E20	真北方向	SB409→SD357
	南北柱列		3.40以上		から1.6	0.1.80			不整方形	32~44	32~44	18	径14	N-T-E	SA408→SB402
遊構名			超數項權			撤	複 関	係			堆積土	20	その他の	の特徴	
	異众为形(下部)	遊凸形	0.80×0.3	70(下車)		SE358→SI			木組井戸側?我又	欧: 但1.5	Am刺後のP	98,4	(株土:地	白プロック。	主体の転士(人為)
SE360		T字形	径1.30			SE360→SI	357		最下部に曲物	1? 堆材	t 主:用仓	シル	レト質粘	土(自然)
	異文法(下面)	上開く円袋を			116			米超水产的 的数	C1.680×1.340±6,58.	.有理土农场·6	能力いた機	動士	12:3E-6	(() 自由土地市)	原暦・地口でった主体人型
SE367		段付箱形	-			SD457→SE			木挺井戸側?相貌生	::1~6勝-	黑色粘土有-	8價2	ルト主体()	图,语-8	山南基土(自然)
		箱形	3.00×0.			SB406→S2			第1層-馬色:	シルト(自	(然)、第2	F-	灰と炭化	物の互属	(人為)
		箱形	3.10×2.			SB359, SK		53	第1層-馬色:	シルト(自	(然)、第2	計一	灰と炭炎	:物の互服	(人為)
77		箱形	3.20×3.	-		SB368→S>	354		第1種-昆色シルト	主体(自然)。	第2等-页化	ne:	も気器(人2	4)、第3署-共	約個基土(自然)
		且状	0.66×0.		22				黒色シルト主	体(自然	()				
SK365	and the last of th	皿 状	0.76×0.		14				顔色シルト主	体(自然	()				
SK366	2017 2112	皿状	0.90×0.		20				居色シルト主						
		箱形	1.30×0.		46										ク主体の秘土質シルト
		旦 状	1.02×0.			SK401→S3	1353		上推一用褐色粘土						
		皿状	1.62×0.		27				上層一周褐色砂管	シルト、中	第一地山ブ	1272	主体、下層	一周報告的	償シルト
	上幅(m)		要多(cn)				康 按 2						どその他	の特徴	
	0.32~0.72			皿状			→SD355-		黒色シルト						
SD356		0.40		新彩		- 10000	→SD356-					⊕ø	(自然)、	第2層一地	山ブロック主体
	0.50~0.60			U字形			9-002,5005-09		黒色シルト		.,				
SD362		0.20~0.3		U字形	N-22		→SD355+		馬色シルト						
_	0.40~0.50	7100		箱形			→SD356+	357	地山ブロッ			側で	CL字(c)	田曲	
SD456		0.18		线里状			a mass		思色シルト						
2040/	0.24~0.30	$0.12 \sim 0.1$	4 9	浅皿状	E-11	5 SD457	→SE367		黒色シルト	主体(自	(25)				

第9表 N-2区遺構属性表

		Timberon I	1011	2.1						Abote Stranger o	ATT OF THE OWNER.	MIN W .		Santana C	distant.	1 at the 100
	構造		総長 (n			the second second	す法: (m)		_	柱大平面形と						重複関係
	南北棟		2,48以上×3				東から1.			方形	32~42			提14~15 提12~14		SB431→SK339
	南北棟		2.380X.E×				東から1.3			方形	50	42~50			E-15'-N	SB433→SE380, SD072
	東西棟	Acres (Section 1997)	4.200X.EX				北から2.			方形 方形	46	42~44			N-19-14	SB433-SE380, SD072
	東西様 総柱建物		2.50(1.E×2.5) 3.52×2.92		m61.7		北から1.			方形	60	50		径16	N-5-E	30400 ~30000,30010
SB436			5.00×1.80				西から1.		-	楕円形	50	34		在10~14		SB516→SB436→SD387
SB437			2.00G1E×2.00				西から2.		-	隅丸方形					N-5'-E	SD092→SB437→SD384
SB438		極	不明	NAT IN	2-92.0	,	E10.06.	w			80	60		極22	14.0.E	SD375→SB438
SB439			不明	\rightarrow					-	不整長方形	52	36	1/46	(E20)		SD375→SB439
	南北棟		3.80DLE ×	1.86 (8)	th 6.1.9)+1.90	東から1.5	93-1.93	-	方形	40	32	30	祭14	N-147-E	SB440 - SE379, SK378-382
-	南北棟		4.40×4.20		p 52.0		東から1.3		$\overline{}$	方形	48	42		任14	N-7'-E	SIGN -5840 -58279-365,50072
SB442			4.60以上×2				74.4 54.1		-	不整方形		28		(第12	E-4'-S	SB442→SK467
SB516		拉上×不明								不整方形		24	-	€£10	N-18-E	SB516-+SB436, SD387
遺構名	平面形						複関	96	Г			堆積:	· 4	どその他	の特徴	
SE379	円形	上篇《U字表	径1.25		122	SB440+44	11→SE379		81	思い合物? 単模士	2番組がの	が雑(人類)、	2後-第	色りがしなりも	の征服(自然)、	1場・県色砂雪シスト(自然)
SE380	方形	ロートお	1.90×1.	.85	135以上	SB433+43	4→SE380		般	下部に曲物	/ 堆積土	:風色粒	土質	シルト(自	然)。SD38	(1講路(資水講)と一連
SE385		上第〈円原理					E385→SD3									注質シルト(自然)
SE395	方影(下部)	上層〈円間	0,60×0,60	(TED	120	SD387 • 45	9→SE395	本起并产便性收收							現金装置シスト(人為人數權・母母灰色指土信仰
SE400	楕円形	不 明								山ブロック			٠ ((,2 _k)		
SE470		不 明	径1.22			SD372→5	E470			色シルト主						
	不整方形	皿状	2,70×0.		11	an				層-馬色シ					土質シル	ト (自然)
	不整円形	皿状	1.20×1.	.00		SB440→5				山ブロック						
SK382		回状	径1.10		-	SB440→5				土・炭化物						
	不整円形	皿状	0.88×0.		_	SD374→5	and the same of th			土・炭化物・			(1)	75.)		
	楕円形	田状	0.88×0.			SB431→5 SK460→5			*	色シルト主						
	不整円形	皿状	1.20×0.					222		色シルト主						
		新 形 皿 状	0.94×0.				SK462→SD 463→SK462,SI			色砂質シル図ー用知り			67 .	TS 985 460	ir/na	ク主体 (人為)
	楕円形 不整楕円形	皿状	0.96×0.		_	SK464→:		nore		色シルト		L OHN	27.	1 49 46	4747	X THE CYCHY
	不整種円形	皿状	1.08×0.			SK465-1			-	色シルト						
	不整核円形	不明	1.00×0				SB441, SD3	72		山ブロック		25.)				
	不整方形	不明	0.84×0.			SB442→5				色シルト				-		
	不整模円形	不明	1.26×0			SD377→5				灰色砂質シ		(然)				
	方形?	不明	1.901Ex			SK469→5										
	不整方形	不明	0.64×0.													
SK472	不整核円形	U字形	1.40×0.	.38以上	17											
SK473	不整楕円形	U字形	2.50×0	.60	20	SK473→5	SK475		桦	灰色シルト	(自然)					
	楕円形	皿状	0.82×0.		29					色シルト						
	魏丸長方形	皿状	1.46%		_	SK473→5			無	色シルト	(自然)					
	楕円形	不明	1.46LEX		1913LE	SK476-1			-	Maria I. S.	(d) 80-1					
	不整方形	不明	0.60×0. 650.60	,SOALE	-	SK478-45	8→SK479		-	色シルト 色シルト						
SK479	上幅(m)			新遊	#1 70	SD397-3:	重 複 !	25 (6)	1786	BANK	111/10/27	維持	+ 12	どその他	の特徴	
	0.56~1.50			連台形					80-0	W-10-39-38-52	m-san #					方向も変更_SE0.65と一連
SD373		0.52		逆台形			(~376→SD073			地山ブロッ						
	0.20~0.80			遊台影			50075-450074-450									
	1.00~1.40			逆台形			-53438-409, SE672			1層-馬色						
	0.40~0.50			箱形		·E SD3	76→SD372•	373	J	風色シルト	主体(自	燃)				
SD377		0.18		浅且状			-S007-SX40,S			単色シルト						
	0.26~0.30	-		浅皿状			75→SD381-			上層一灰黄褐						
SD384		1.45		連台形			,SD387~389,			1・2階一系					黄褐色粘	土 (自然)
	0.30~0.80			U字形			177 - S2086 - SX 86			風色砂質シ					CD IT	
	0.50~1.20			皿状			516, SK160, SD074-									8→進?
	0.60~0.80			皿 状			88→SD384・		-	思褐色砂質			_			-
	0.25~0.75	1.20~1.6		リ字形			-5009-50072-17			担色砂質シ 1~3層-県						
SD390 SD390	0.50~-0.90			連合形 U字形			93•394•461- 87•389•392-		_	1~3増ール 単色砂質シ		MANAGEMENT OF			MINER	46、日本7
SD092		0.18~0.2	_	リ字形			92→SD391•			用色砂質シ			9.7G	1.80%		
	0.40~0.66			浅皿状			93→SD384•			風色砂質シ			間で	北に湾曲		
SD394		0.20		浅田林			94→SD387•			温色砂質シ				21-1918		
	0.40~0.76			連台形			S2004-391-471-+S			用色砂質シ						
SD097		0.50		連台形			97→SK479.						ルト	人為).2層	黑色砂質:	/ルト、3層-褐色粘土
SD398		0.25		連台形			307-4500H-45X.0			地山ブロッ						
SD459		0.60		皿 状		-E SD4	59→SE395			黒色シルト						
SD461	0.34	0.22	15	U字形	N-1		61→SD390			組色砂質シ	ルト (目	(然)				
SD477		0.30		箱形			77→SD396									
	0.26~0.32			皿状												
SD\$20	0.28~0.46	0.18~0.2	2 11	U字形	8 E-1	N SDS	20→SK478						_			
CENTER																

第10表 N-3区遺構属性表

第四章 考 察

今回の調査で発見した遺構は掘立柱建物跡 66、掘立柱列跡 1、井戸跡 14、竪穴遺構 10、土壙 56、溝跡 74 などである。出土遺物には土師器・須恵器・陶器・磁器・瓦・石製品・木製品があり、総量はテンバコで 15 箱になる。これらを時代別にみると、奈良・平安時代と中世以降に大別できる。遺構は調査区の制限から全形を検出したものはきわめて少なく、土器がまとまって出土した例もない。そこで、遺構の種別ごとに特徴と年代を述べ、最後にこれまでの調査成果との比較検討をとおして時代ごとの概要をまとめることとしたい。

A.奈良・平安時代

1.遺構の特徴と年代

すべての調査区で確認したが、とくに L-3区とN-1~3区にかけての部分で掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡を多数検出しており、竪穴遺構もこの区域に集中する。

掘立柱建物跡・掘立柱列跡

古代の掘立柱建物跡は59棟検出した。

<年代>遺構の重複関係や出土遺物から年代を特定できる建物はない。中世の建物とは方向や埋土が異なっているため、古代の建物と考えた。後述する遺構を含めた各調査区での出土遺物の年代観から、古代の掘立柱建物跡や掘立柱列跡は8世紀代を中心とするとみられる。

<規模・構造・建替>桁行3間、梁行2間程度で、床面積が30㎡以下の小規模なものが主体であるが、桁行が5間を超える大規模な建物も少数存在する。構造は側柱と総柱のものがあるが、前者が大部分を占める。後者は3棟のみで、床面積が10㎡ほどと小規模である。床張りは1棟認められる。(SB323)。この建物は周辺と比較して柱痕跡が太く、規模が大きい。廂をもつもの、廂または縁をもつものは3棟と少ない。建替えも3棟で認められるだけである。

<柱穴>平面形は a : 平面形が方形を基調とし、一辺 80 cm以上と大形の掘方をもつもの、 b : 平面形は方形を基調とし、一辺 $50 \sim 70$ cmの中形の掘方をもつもの、 c : 平面形は不整方形で、一辺 $30 \sim 40$ cmの小形の掘方をもつものに大別できる。

<方向・重複関係>A:北で西に振れるもの、B:ほぼ真北方向のもの、C:北で東に振れるものに大別できる。数的にはA-20 棟、B-12 棟、C-26 棟となり、A・Cが多い。また、新旧関係は少数ながらAB(SB414 419、SB402 SB359・403)、BC(SB337 335)という関係が認められるので、大きくはABCへと変遷するとみられる。さらに、同方向をとるものでも位置的に重複するものがある。Aが古い時期に位置付けられることは、官衙内部における小館地区の建物跡の傾向と一致する(第11表)。

井戸跡

古代の井戸はL-3区で3基、N-2区で4基、O区で1基検出した。

<年代>

【SE311】上層に灰白色火山灰が認められる。下層からは非ロクロ調整の土師器有段坏や須恵器坏で静止糸切りののち回転ケズリや手持ちケズリ(第9図1)が施されるもの、皿形でヘラ切り無調整のものがあることから、8世紀前半から中頃とみられる。

【SE312】廃絶後、側を抜取って埋戻されている。SE311と近接しており、同時存在はあり得ない。 両者とも同じ構造をとること、SE311が廃絶後埋戻されていないことから、312 311という前後関係が考えられる。したがってSE312の年代は8世紀前半以前とみられる。

【SE321】堆積土から銅椀模倣の椀(第9図2)を含む非ロクロ調整の土師器が出土しており、8世紀代とみられる。

【SE367】堆積土から非ロクロ調整で扁平な土師器有段坏(第 26 図 3・4)や関東系土師器坏(第 26 図 1)が出土している。後者は厚手で、褐色を呈する。有段坏の特徴から8世紀前半とみられる。 【SE364】廃絶後、側を抜取って埋戻されている。SE367と近接しており、同時存在はあり得ない。 双方とも同じ構造をとるとみられること、SE367が廃絶後埋戻されていないことから、364 367という前後関係が考えられる。したがってSE364の年代は8世紀前半以前とみられる。これは堆積土から出土した関東系土師器坏(第 26 図 2)の年代観(7世紀後葉~8世紀前葉)と矛盾しない。

なお、S E 360・364 と S D 356、S K 369 は出土遺物に接合関係が認められるため、ほぼ同時期の以降と考えられる。

【SE360】堆積土から非ロクロ調整の土師器が出土している。このうち高盤はSE364と同一個体(第29図4)であることから、8世紀前半以前とみられる。

【SE358】埋土から非ロクロ調整の土師器が出土し、回転ケズリの須恵器坏があることから、8世紀代とみられる。

【SE425】下層から非ロクロ調整の土師器が出土している。関東系土師器坏2点(第36図1・2)は本遺跡小館地区SI236住居跡(宮城県多賀城跡調査研究所:1984)に類似するものがあり、7世紀後葉~8世紀前葉とみられる。

< 位置>井戸は7世紀後葉~8世紀代に機能しており、掘立柱建物跡の年代と一致する。井戸の位置をみると建物とは別の場所に作られ、周辺は空閑地となっている。また、近接する井戸は同時存在ではなく、古い井戸の作り替えが場所をずらして行われたものであり、井戸の位置はある程度限定されていたと考えられる。

〈構造・規模〉井戸側をもつものと素掘りのものとがある。前者はa:方形の側をもつもの(SE364・367) b:刳抜きの側をもつもの(SE311・312) c:抜取りのため側の構造が不明なもの(SE358)とがある。aは側の上部が抜取られており、細部の構造については不明である。下部の側の大きさは一辺 40~50 cmである。bの 312 は掘方の中段にステップを設け、そこに側の拡がりをおさえる板を据えていた。素掘りの3基(SE321・360・425)は下部が径 40~50 cmの円形で、側の痕跡は認められなかった。古代の井戸は側をもつものが大部分であることから、最下部には水溜の曲物を置いたとみられ、あるいはその上にも曲物を重ねた可能性もある。

竪穴遺構

L - 3 区・M区・N - 3 区・O区でそれぞれ 1 基、N - 1 区・N - 2 区で 3 基ずつ検出した。規模は 一辺が 2.5~3mの方形を基調とし、底面はほぼ平坦である。

<年代>

【SX303】底面から皿形でヘラ切り無調整の須恵器坏(第13図3) 堆積土から非ロクロ調整の土師器が出土していることから8世紀後半代とみられる。

【 S X 351】埋土から非ロクロ調整の土師器坏・高坏・甕(第 20 図 2~4) 静止糸切りののち回転ケズリが施された須恵器坏が出土している。土師器坏は在地の有段坏のほかに関東系土師器がある。8世紀前半代とみられる。

【SX352】下層から非ロクロ調整の土師器有段坏、須恵器は回転ケズリが施された坏や扁平な宝珠つまみをもち口縁端部が短く折れる蓋が出土している(第28図1・4)、下層上面からは関東系土師器坏、須恵器は皿形でヘラ切り無調整の坏や高台坏が出土(第28図2・3・5)しており、8世紀後半代とみられる。

【SX353】下層から非ロクロ調整の土師器やヘラ切りののち回転ケズリが施された須恵器坏(第 28 図 7)が出土しており、8世紀前半代とみられる。なお、上層の土師器坏には関東系土師器がある。

【SX422】底面から須恵器高盤(第37図2) 堆積土から非ロクロ調整の土師器や静止糸切りののち手持ちケズリが施された須恵器坏(第37図1)が出土していることから、8世紀前半代とみられる。このほかL-3区SX320、N-1区SX343・349、N-3区SX371は、堆積土から非ロクロ調整の土師器が出土していることから8世紀代とみられ、竪穴遺構は掘立柱建物や井戸と同時期と考えられ

る。 **<機能>**掘立柱建物と同時期で、それが密集する場所に認められる。こうした例は多賀城市山王遺跡多 賀前・伏石・八幡地区に認められる(註1)。伏石地区では堆積土の遺物から、工房または作業所の可 能性を考えている(佐藤則之ほか:1997)。本遺跡の竪穴遺構は伏石地区に較べて小型であることか

溝跡

溝跡は74条検出しているが、遺構の特徴や出土遺物から古代と考えられたのは6条(SD309・325・350・356・363・375)である。

ら、工房または作業所に加えて収蔵施設(物置)の可能性をも考えておきたい。

<規模・方向>a:下幅30~40cmで断面形がU字もしくは箱形になるもの(309・325・350・356・363) とb:下幅100cmほどで断面が浅い箱形のもの(SD375)とに分けられる。方向はaが真北もしく は西偏するのに対して、bは北で東に傾く。

<年代>SD356 は上層から非ロクロ調整の土師器が出土している。図示した土師器坏・高盤(第29図1~4)は関東系土師器で、坏は本遺跡小館地区SI1324住居跡(古川市教育委員会:1994)に類似するものがある。SI1324は7世紀後葉頃とみられるが、本溝は上層から出土していることを考慮して、機能時の年代を7世紀後葉~8世紀前葉の間と幅をもたせておく。したがって、これより古いSD363は8世紀前葉以前とみられる。他の溝の年代は堆積土から非ロクロ調整の土師器が出土しており、8世紀代とみられる。

<機能>古代の溝跡は8世紀代と中心とするもので、掘立柱建物や井戸・竪穴遺構と同時期であることから、これらを区画したものと考えられる。aタイプについては断面形から材木塀の掘方である可能性を考えたが、いずれの場合も明確な材痕跡を確認することができなかった。

2. 奈良・平安時代における官衙と南外側の様子(第40図)

今回の調査区は名生館官衙遺跡とは沢(名生城期の堀)をはさんだ南にあたる。古代の遺構の年代は8世紀代を中心とし、一部7世紀に遡るものがあった。掘立柱建物、井戸、竪穴遺構などから構成され、内部は溝で区画されていた。建物のなかには少数であるが総柱のものがある。宮城県内の古代集落でこうした構成をとるのは、多賀城市山王遺跡多賀前・八幡・伏石地区(菅原弘樹ほか:1996、佐藤則之ほか:1997)や宮崎町壇の越遺跡(八嶋ほか:1998)である。前者は陸奥国府多賀城の、後者は賀美郡家・東山遺跡の南に隣接する。この時期の一般集落は竪穴住居を主体とし、井戸はほとんど伴わない(小井川・村田:1994)。したがって名生館官衙南側の集落は、官衙に近接すること、集落の構成要素から一般集落と異なり官衙と密接なかかわりを持っていたと考えられる。

官衙内部は、これまでの調査で城内地区や小館地区の様相が明らかになってきており(宮城県多賀城跡調査研究所 1981~1986、古川市教育委員会:1987~1996)、大別 期に分けて遺構変遷が考えられている(鈴木:1991)。その後の調査で第 期より新しい遺構が発見されたこともあり、再整理したのが第11表である(註2)。これによると8世紀代の官衙は第 ~ 期にあたり、政庁が城内(第期) 小館南東部(第 期) 小館西部(第 期)へと場所を移しており、性格も丹取郡家および前身の評家から玉造郡家へと変遷している。

今回検出した建物群の年代は8世紀代が中心である。これとほぼ同時期の実務官衙の様子は、第期(8世紀前半~後半)の城内地区や小館地区西部で知ることができる。両地区とも3×2間の掘立柱建物や竪穴住居を主体とした構成をとっており、官衙南外側が掘立柱建物、井戸、竪穴遺構、溝などから構成されているのとは様相が異なる。井戸を伴うこと、桁行き5間以上の大型建物や床張りの建物があることから、生活空間であるとともに格式の高い建物群と考えられる。前述の山王遺跡では東西大路に面した広い敷地を有する格式の高い建物群を「国司館」と考えていることから、今回検出した建物群は郡司をはじめ郡家へ出仕した役人層の住まいとみられる(註3)。

遺構期	政 庁	城内遺構期	方 向	年 代	小館遺構期	方 向	年 代
第I期	城 内?	A 期	真 北	7c後半~末	I 期	西偏	8c前半以前
第II期	城内地区	B 期	真 北	7c末~8c初	II 期	東 偏	8c前半以前
第III期	小館地区				III 期	ほぼ真北	8c前半
	南東部	C1期	ほぼ真北	8c後半			
第IV期	小館地区	C2a期	西偏(傾き大)	8c後半	IV 期	ほぼ真北	8c後半~
	西部	C2b期	西偏(傾き小)	~9世紀			
第V期					V 期	ほぼ真北	~10c初頭頃

第11表 名生館官衙遺跡 政庁の変遷と遺構期

また、その位置は8世紀前半以降政庁が置かれた小館地区の南正面にあたる。確認調査や上代遺跡の調査結果(註4)から、こうした建物群は西にはさほど拡がらず、段丘上の縁辺に沿って南に延び伏見廃寺にいたるとみられる。郡家周辺には郡司などの役人や郡家の機能維持のために徴発された徭丁の住まいに加えて、正倉の補完的役割を果たした借屋・借倉、往来官人の従者などの宿泊施設、富豪層の住まいや収納施設などがあったと考えられている(山中:1994)。また、寺院周辺では営繕施設や炊事・給食機能を持つ付属施設があったと考えられる。したがって8世紀代の玉造郡家の南から付属寺院周辺は、掘立柱建物を中心とする建物群が展開しており、そこにある程度の人々が集まっていた、一般集落とは違った景観が想定される(註5)。

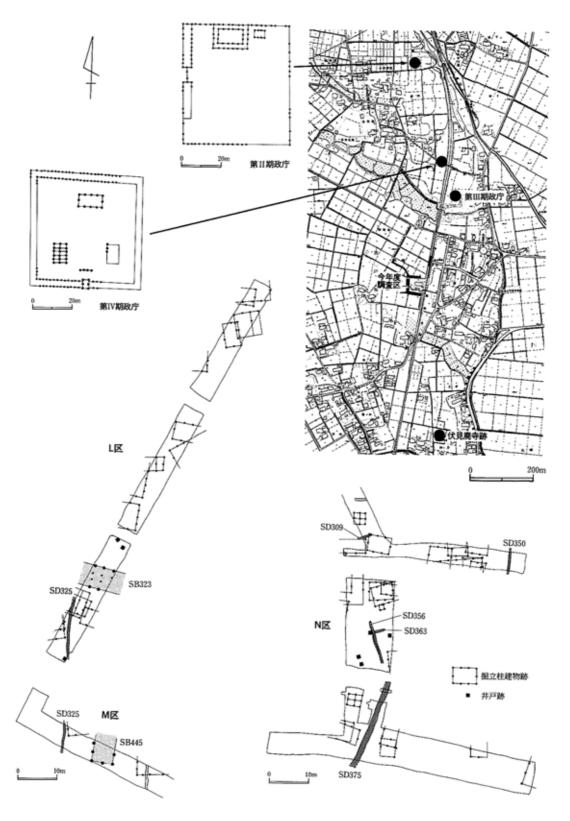
名生館周辺の集落跡では、西側にある高幌遺跡の様相がある程度明らかになっている(佐藤優: 1996)、調査区内は8世紀後半から9世紀中頃に居住域として利用され、9世紀後半以降は生産域(畑)に転じている(註6)、前者の時期、集落は掘立柱建物と竪穴住居で構成され、井戸は検出されておらず、今回検出した建物群とは構成が異なる。両者は時期的に一部重複するが、高幌の方が新しい。こうした違いは、官衙との距離や居住者の違いによるものとみられるが、時期差による可能性もあり、周辺の調査成果の蓄積を待ちたい(註7)、

遺物では7世紀後葉~8世紀前葉の関東系土師器が特筆される。関東系土師器は関東地方からの移民がもたらしたもので、周辺では官衙内はもちろん伏見廃寺東外側(遺跡名は上代遺跡になる)から出土している。城場官衙・寺院・墳墓・一部の集落などから出土しており、城場や官衙など律令制支配(=建郡)を拡大するための諸施設の設置に伴って、その前段階から認められるものである(村田:1995)。こうした土器が玉造郡家の南外側の建物群から出土したことは、居住者である郡司等の役人層に坂東の出身者がいたことを示唆し、これは黒川以北十郡(=辺郡・近夷郡)の郡司が移民系の住人から任用されるという指摘(熊谷:1990)を裏付けるものといえよう。

須恵器や瓦では、器形・製作技法や胎土の特徴から生産地が特定できるものがあった。8 世紀前半の須恵器坏は図示した7点のうち3点が色麻町日の出山窯跡群の製品で、他の4点もその可能性が高い。8世紀中頃~後半の須恵器食膳具は、図示12点のうち3点が大衡村大衡窯跡群の製品で、他に3点はその可能性が高い。したがって須恵器食膳具における生産地の割合は、8 世紀前半は日の出山製品が圧倒的に多く、8世紀中頃から後半代は大衡製品が半数を占めるとみられる。

大崎地方西部(山道)の奈良・平安時代の須恵器生産は、8 世紀前半は日の出山窯という瓦陶兼業の一大生産地、8 世紀中頃~9 世紀代は日の出山の工人や技術を引き継いだ大衡窯という継続生産地を軸として、各地の需要にあわせて小規模かつ短期の窯場を設けたと考えられる。日の出山、大衡とも製品の供給先は城場・官衙・寺院とそれらと密接にかかわる集落・墳墓を優先すると考えられ、今回の名生館遺跡における産地の傾向はこうした状況を示すものといえよう。

一方、平瓦は三本木町下伊場野窯跡の製品(宮城県多賀城跡調査研究所:1994)が認められた。この瓦は本来、名生館官衙第 期政庁もしくは伏見廃寺で葺かれていたものとみられる。判明した下伊場野窯の供給先としては多賀城同廃寺に次いで3例目となる。今後大崎地方の城場・官衙・寺院で多賀城創建期でも古い段階のものに本窯の製品が認められる可能性があり、注意する必要がある。



第40図 官衙との位置関係と主要遺構

B.中世

中世の遺構はN-1・N-3・O区で検出した。N-1・O区で掘立柱建物跡と溝跡、N-3区は多数の 溝跡と掘立柱建物跡や井戸跡が認められた。

<溝跡>

N-3 区では溝跡を多数検出している。方向は東西と南北があり、なかには両者がT字状に接続するものもある(SD372・374)。このうち常滑産の中世陶器や龍泉窯系の青磁碗といった中世の遺物が出土しているのはSD372・384・397 である。このほか中世と考えられるものはSD397 より新しく、SD372 より古いSD396・398、398 と一連のSD373 である。ここで東西溝の方向をみると、SD374・377・387・388 はSD372 と同じく東で北に振れることから、中世とみられる。さらに、南北溝のSD390 は古代のSD375 と方向が異なり、SD384 と規模・断面形が似るため中世とみられる。したがって、N-3 区の溝跡はSD375 を除いて多くが中世と考えられる。

N - 1 区の中世の溝跡は、常滑産中世陶器を出土したS D345・348 である。このうち前者はN - 3 区のS D372 と一連と考えられ、南北長は60m以上になる。また、O区S D424・427 も規模や断面形からみて中世とみられる。

<掘立柱建物跡・井戸跡>

N-3区で検出した掘立柱建物跡のうち、SB431・432・436・442 は方向が古代の建物と異なり・北で西に振れている。これらはSD372 などの中世の溝跡と方向が同じであり、溝から一定の距離をおいて建てられていることから、中世の建物跡と考えられる。また、N-1区のSB417・418 建物跡、O区のSB455 建物跡は方向が大きく東に振れることから古代ではなく中世の建物跡とみられる。こうした建物跡の柱穴は、一辺が30~40 cmの不整な方形で埋土は古代のものに較べてしまりが悪い。 井戸跡はN-3区で5基確認している。精査を行った4基のうち、3基(SE379・380・385)は最下段に水溜の曲物と置いたとみられ、1基(SE395)は側をもっていたと考えられる。時期はSE395・470 が中世の溝跡より新しいため中世以降である。また、SE379・380・385 はいずれも古代の建物跡と重複し、これより新しい。先述したように古代の井戸は建物と離れて作られていることから、3基とも中世とみられる。

<遺構の構成>

中世の遺構は掘立柱建物跡や井戸跡があり、これらが溝によって区画されていたと考えられる。時期は大崎氏の居城であった名生城期のものとみられる。溝跡の規模をみると、a:上幅が2mを超えるもの(SD384・390・424・427)とb:1.5m以下のものとがある。13世紀後半から14世紀前半の屋敷跡が確認された名取市原遺跡をみると、一辺66mの方形の敷地外側を幅2mの溝が巡り、内部は幅1m前後の溝で区画されている(名取市教育委員会:1999)したがって、検出した中世の溝跡のうちaは屋敷地の外側を巡り、bは屋敷内を細分していたとみられる。ところで第2図をみると、今回の調査区は名生城南側の堀2と堀3(上幅25m)で囲まれた曲輪の南部に位置する。曲輪の南北は約330mある。曲輪内は大溝が巡る屋敷が建ち並び、屋敷内部も掘立柱建物や井戸がブロック毎に溝で区画されていたと考えられる(註8)。

註

- 註1 山王遺跡の場合、竪穴遺構としているものは遺構や出土遺物からある程度の機能が推定できるものに限られている。 土壙としたもののなかにも本遺跡の竪穴遺構と規模や形が同じものがあり、形は方形だけでなく円形を基調としたものもある。
- 註2 遺構期の再整理にあたっては、古川市教育委員会の鈴木勝彦氏、高橋誠明氏に教示いただいた。
- 註3 玉造郡は下郡であるため、郡司は大領・小領・主帳の3名である。郡家は、その実務遂行のためにこの3名に加え 正規の任命手続きを経ていない郡司(権任郡司・擬任郡司)や定員外の下級職員を抱えていた(山中:1985)。今回 検出した建物群はこうした役人層の住まいと考える。また、小規模な建物で構成されるブロックは、群家の機能維持 のため徭で徴発された「徭丁」と呼ばれる多数の人々の住まいであった可能性が考えられる。
- 註4 上代遺跡の発掘調査は、段丘の縁辺から沖積地に移行する部分で行われた。その結果、9 世紀前半~後半の基礎地業、 水田跡およびそれに伴なう水路跡、溝跡、河川跡などが検出された(菅原:1997)。 したがって、段丘下は主に耕作 域として利用されていたと考えられる。
- 註 5 群家研究を積極的に推し進めている山中敏史氏は、群家周辺のこうした空間を国府に対して「群府」と仮称している(山中:1994)。
- 註6 高幌遺跡の調査成果については、古川市教育委員会の佐藤優氏に教示いただいた。
- 註7 9世紀代の郡司等役人層の住まいの様子が不明である。周辺の調査でこうした建物群が確認されれば、高幌遺跡との 比較が可能になる。
- 註 8 今回の調査区の西には御所館跡がある。方形の屋敷の周囲を巡る堀と土塁が残っていたという話である。両者の関係については、来年度以降御所館に近い部分を調査するためその結果を待って考えることとしたい。また、S D384 遺跡から出土した龍泉窯系画花文青磁碗の生産年代は、12 世紀中頃~13 世紀前半である。小館地区からは 12~13 世紀に位置付けられた S X 273 かわらけ焼成窯跡が確認されている(宮城県多賀城跡調査研究所:1984)。したがって、鎌倉時代の遺構があった可能性もあるが、その時期の遺物がまとまって出土していないため、今のところ中世の遺構は、名生城期のものと考えておきたい。

第五章 まとめ

- 1. 今回の調査区は名生館遺跡の南側、古代玉造郡家と考えられる官衙の南外側に位置する。発見した遺構は古代と中世である。
- 2. 古代の遺構は調査対象地全域に分布するが、とくにL‐3・N‐1~3区の密度が高い。年代は8世紀代が中心である。掘立柱建物・井戸・竪穴遺構・溝で構成される建物群であり、一般集落とは様相が異なる。また、同時期の名生館官衙内の実務官衙が3×2間の掘立柱建物と竪穴住居を主体とする構成とも異なる。井戸を伴うこと、大型で床張りの建物があることから生活空間であるとともに格式の高い建物群とみられ、郡司をはじめ郡家へ出仕した役人層の住まいとみられる。こうした建物群からなる集落は段丘上の縁辺に沿って南に延び伏見廃寺にいたるとみられ、一般集落とは違った景観を呈していたと推定される。

名生館周辺の集落跡では、西側にある高幌遺跡の様相がある程度明らかになっている。8世紀後半から9世紀中頃の集落は掘立柱建物と竪穴住居で構成され、井戸は検出されなかった。こうした違いは、官衙との距離や居住者の違いによるものとみられるが、時期差による可能性もあり、周辺の調査成果の蓄積を待ちたい。

3. 中世の遺構は大崎氏の居城名生城期のものと考えられ、掘立柱建物や井戸が溝によって区画されていたと考えられる。溝跡には上幅が2mを超えるものと1.5m以下のものとがあり、前者は屋敷地の外側を巡り、後者は屋敷内を細分していたとみられる。今回の調査区は名生城南側の堀2と堀3で囲まれた曲輪の南部に位置する。曲輪内には大溝が巡る屋敷が建ち並び、それぞれの屋敷内部は掘立柱建物や井戸がブロック毎に溝で区画されていたと考えられる。

引用・参考文献

天野順陽・笠原俊哉 (1997):「名生館官衙遺跡の周辺」『第23回古代城市官衙遺跡検討会資料』

天野 順陽 (1999):「名生館遺跡」『名生館遺跡 下草古城本丸跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第 181 集

今泉 隆雄 (1992):「律令国家とエミシ」『新版 古代の日本』第9巻 東北・北海道

氏家 和典(1957):「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

加藤 道男(1989):「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』

熊谷 公男 (1989):「黒川以北十群の成立」『東北文化研究所紀要』第21号 東北学院大学

(1990):「近夷郡と城場支配」『東北学院大学論集』歴史学・地理学第21号

桑原 滋郎 (1992):「城場を中心とする古代官衙」『東北・北海道』 新版古代の日本第9巻

小井川和夫・村田晃一(1994):「古代東北地方南部の集落と生業」『北日本の考古学』

佐々木茂禎(1971):「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』56-3

佐藤則之ほか(1997):『山王遺跡 』 宮城県文化財調査報告書第 174 集

佐藤 優(1996):「高幌遺跡」『平成8年度宮城県遺跡調査成果発表会 要旨』

進藤 秋輝 (1990):「多賀城創建以前の律令支配の様相」『考古学古代史論攷』

(1996):「海道と牡鹿婦」『石巻の歴史』 第1巻 通史編(上)

菅原弘樹ほか(1996):『山王遺跡 - 多賀前地区考察編 - 』 宮城県文化財調査報告書第 171 集

菅原 弘樹(1997):「上代遺跡」『舟場遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第 173 集

鈴木 勝彦 (1991):「名生館官衙遺跡」『第23回古代城城官衙遺跡検討会資料』

高橋誠明・村田晃一 (1996): 「陸奥国における 7 世紀の様相」『飛鳥・白鳳時代の諸問題 』 国際古代史シンポジウム実行委員会

名取市教育委員会(1999):「原遺跡」『平成11年度宮城県遺跡調査成果発表会 要旨』

藤沼 邦彦 (1997):「宮城県」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第73集

古川 一明(1987):「色麻古墳群の諸問題」『北奥古代文化』 第18号

(1996):「北辺に分布する横穴墓について」『考古学と遺跡の保護』

古川市教育委員会 (1987~1996):『名生館官衙遺跡 ~ 』 古川市文化財調査報告書第 6~13・19・21 集

古川市教育委員会 (2000):「名生館官衙遺跡、杉の下八幡先・南小林地区確認調査」『第 26 回古代城 で官衙 遺跡検討会資料』

宮城県多賀城跡調査研究所(1981~1986):『名生館遺跡 ~ 』 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第6~11 冊

宮城県多賀城跡調査研究所(1994):『下伊場野窯跡群』 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第19冊

宮城県古川市(1986):『古川市土地分類調査(細部調査)報告書』

村田 晃一(1995):「宮城県における6・7世紀の土器様相」『東国土器研究』 第4号

(1997):「陸奥中部にみる北との交流」『蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会 1997 年度 秋田大会

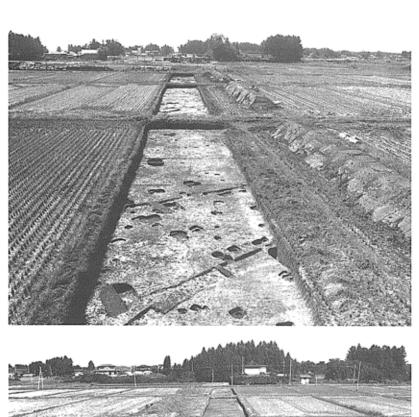
八嶋伸明ほか(1998):「壇の越遺跡」『壇の越遺跡 念南寺古墳』 宮城県文化財調査報告書第177集

山中 敏史(1984):「遺跡からみた郡衙の構造」『日本古代の都城と国家』

(1994):『古代地方官衙遺跡の研究』

山中敏史・佐藤興治(1985):『古代の役所』 古代日本を発掘する5

写 真 図 版



L区全景 (北から)

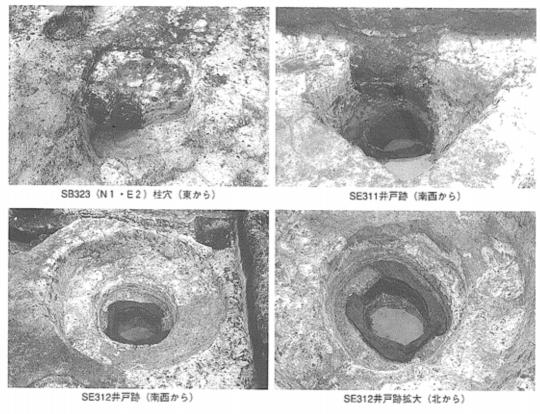


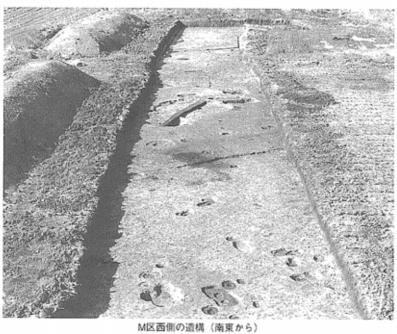
L区全景 (南から)



SB323・340 ・515建物跡 (西から)

図版 1

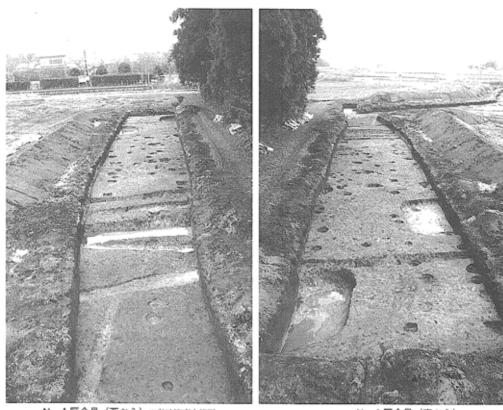




図版 2



M区東側の遺構(北西から)



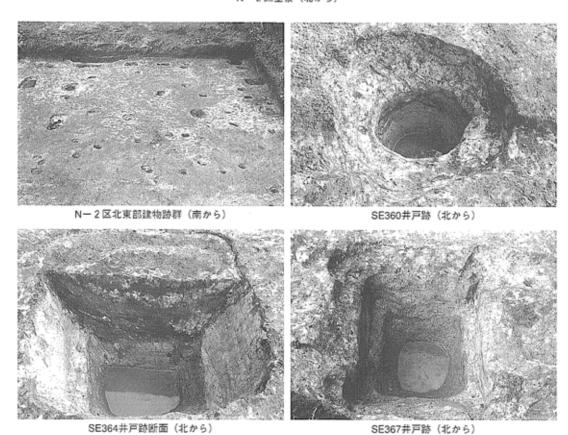
N-1区全景(西から)※與はJR東大崎駅

N-1区全景(東から)

図版 3



N-2区全景(北から)



図版 4



N-3区全景(西から)





SE380井戸跡断面(南から)

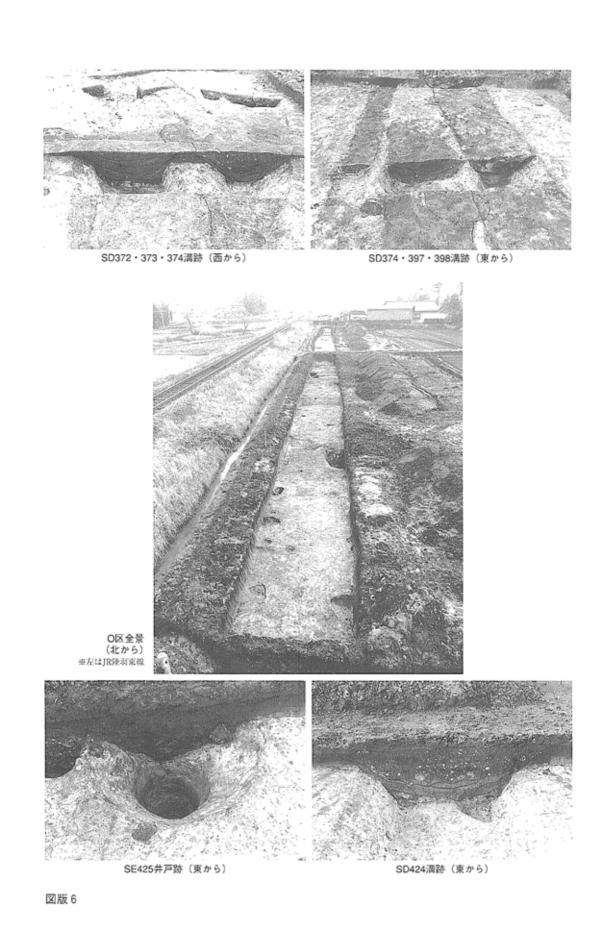


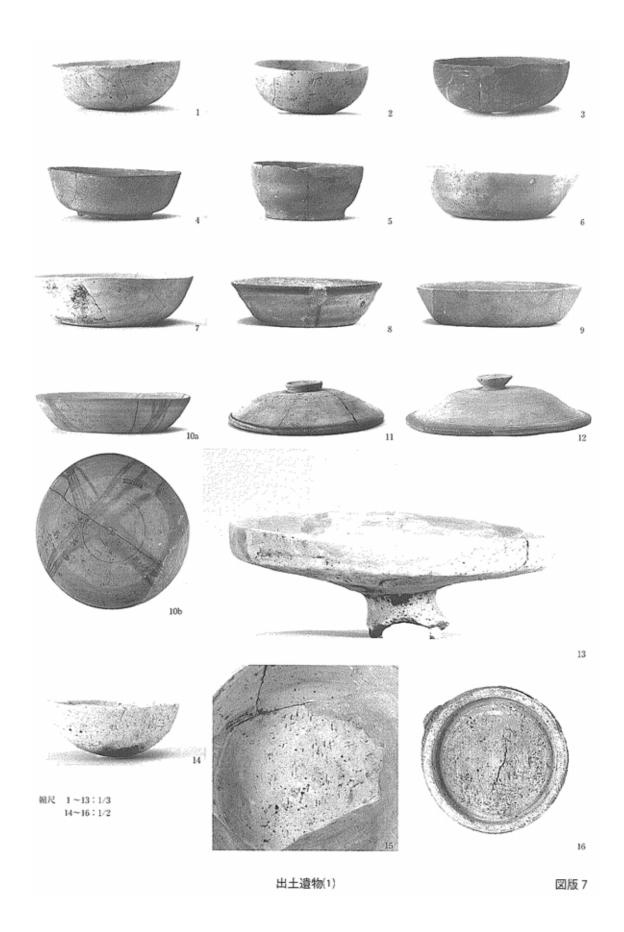
SD384・390溝跡(南西から)

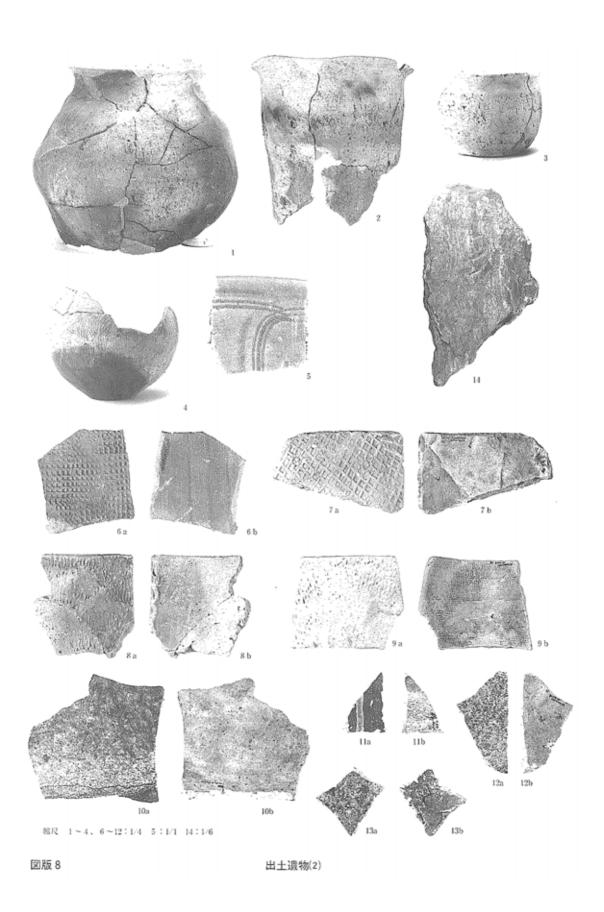


SD390満跡(北から)

図版 5







萩田遺跡

目 次

第	章	はじめに	81
第	章	発掘調査の成果	82
	1	調査の方法と経過	
	2	発見された遺構と遺物	
第	章	まとめ	87
	弓	用・参考文献	87
	写真図	3版	89

調査要項

遺跡 名:萩田遺跡(はぎたいせき)

(宮城黒遺跡地名表記載番号:26039、遺跡記号TK)

所 在 地:宮城県栗原郡高清水町字上萩田

調査原因:ほ場整備事業に伴う道路・水路敷設部分の調査

調査主体:宮城県教育委員会

調查担当:宮城県教育庁文化財保護課

天野順陽、吉野 武

調査期間:1999年(平成11年)4月12日~5月11日

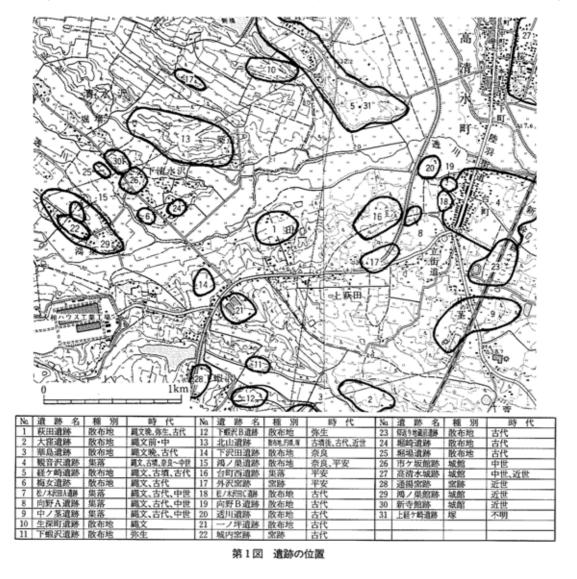
調査面積:約 3300 ㎡

調査協力:高清水町教育委員会

第 章 はじめに

萩田遺跡は高清水町の中心部から約2km南西の高清水町字上萩田に所在する(第1図)。高清水町は 奥羽山脈から東に派生する築館丘陵の末端に位置する。この丘陵は同町で高度を減じてなだらかにな り、近くを東流する善光寺川・小山田川・透川によって開析されている。その結果、高清水町の地形 は樹枝状を呈しており、丘陵は上記の河川を境に北部・西部・南部の3ヵ所に分かれている。このう ち萩田遺跡は南部の丘陵に所在し、透川の右岸に面した標高20~30mの丘陵麓に立地する。現況は標 高の高いところは畑、低いところは水田となっている。

萩田遺跡では縄文土器(晩期) 弥生土器(大泉式・桝形囲式) 土師器、須恵器、石器などが採集されており、縄文時代、弥生時代、古代の遺跡として登録されている。特に弥生時代については特有の石器である蛤刀石斧が出土しており、早くから注目されている(伊東 1957) 周辺には他にも多くの遺跡がある。比較的、縄文時代と古代の遺跡が多いが、なかには弥生時代の遺跡もみられる。



第 章 発掘調査の成果

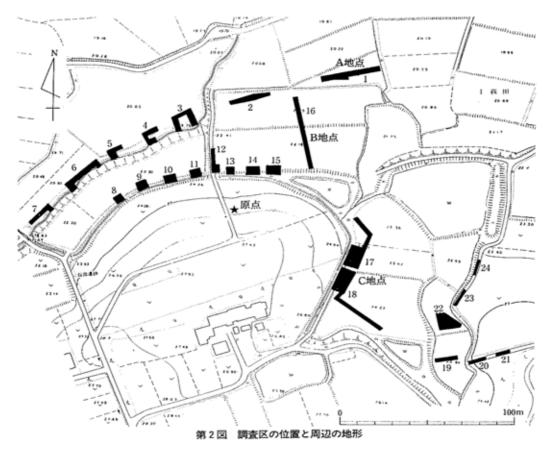
1 調査の方法と経過

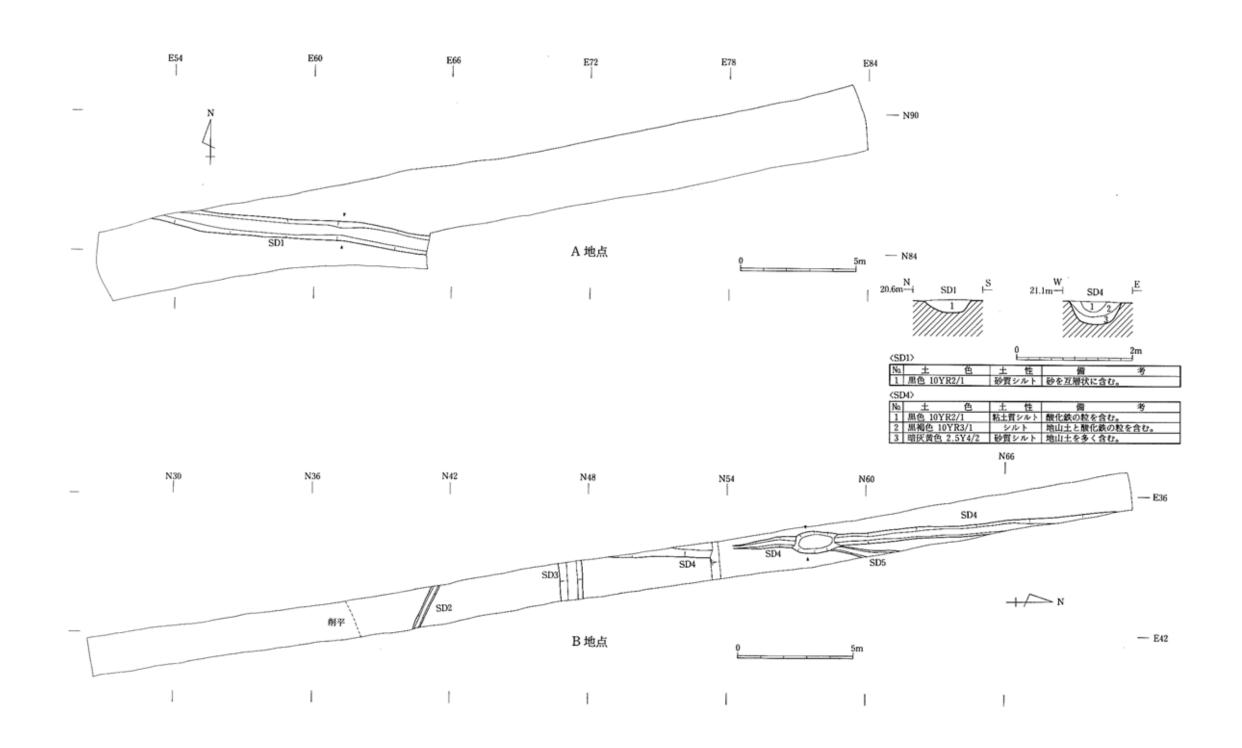
今回の調査は圃場整備事業に伴うもので、遺跡北半の縁辺を巡る道路と水路部分の調査である(第2図)。調査は水路部分(第2図16~18)は事前調査を行ない、道路部分(未舗装)は確認調査(1~15・17・18 西側拡張部分)にとどめることになった。また、遺跡の東側の範囲を明確にするために、沢を挟んだ隣接地の確認調査(19~24)も同時に行なうことにした。

調査は4月12日から開始した。調査区は遺構の有無をみながら設定した。調査の結果、検出された遺構は平・断面図作成と写真撮影による記録をした。平面図の作成にあたっては、遺跡内にある国家座標X = -150.000、Y = 14.200 を座標原点(0・0)とした東西・南北の基準線をもとに 3m毎の方眼を組んで行なった。平面図は簡易遣り方測量により縮尺 1/20と 1/40 の平面図を併用して作成した。断面図は縮尺 1/20 で適宜作成した。写真は35 mmの白黒フィルムとカラースライドを用いて撮影した。調査は以上の方法で行ない、5月11日に終了した。

2 発見された遺構と遺物

遺構の検出は地山面(ローム層)で行なった。その結果、遺跡北半の縁辺は開田の際に大幅に破壊されており、遺構はA・B・Cの地点で掘立柱建物跡が3棟、溝跡が8条検出されたのみであった。遺物はこれらの遺構と周辺から縄文土器・弥生土器・土師器・青磁の小破片と石器が整理用コンテナで





第3図 A・B地点の遺構

1 箱出土した。また、B地点では平成8年度の試掘調査の際に土偶が採集されている。以下、各地点の遺構と遺物について述べる。なお、遺跡東側の隣接地では遺構・遺物は検出さなかった。

A地点(第2図1、第3図)

東西にのびる溝跡 1 条 (S D1) が検出された。規模は長さ 11.9m以上、幅 $0.8 \sim 1.0$ mで、深さは 20 cmである。断面形はU字形である。堆積土は砂を互層に含む黒色の砂質シルトで、自然流入土である。方向は E-6°-S である。遺物は縄文土器(図版 2-1) 弥生土器(2) 土師器の破片が少量と、近世以降の青磁(5)の破片および石鏃(6)が各 1 点出土している。溝の年代は近世以降と思われる。

B地点(第2図16、第3図)

溝跡が 4 条 (S D2~5) 検出された。東西にのびる S D2·3 と南北にのびる S D4·5 とがある。このうち S D4·5 は重複しており、S D4 が新しい。各溝とも調査区の制約のため長さは不明だが、検出長は最も長い S D4 が Z1.9m、最も短い S D3 が Z1.6mである。幅と深さは Z1.9m、最も短い Z1.9m、深さ Z1.9m、である。幅と深さは Z1.9m、深さ Z1.9m、深さ Z1.9m、である。断面形はいずれも Z1.9m、である。堆積土は、各溝とも地山土や酸化鉄を粒状に少量含む黒色または黒褐色の粘土質シルトで、自然流入土である。方向は Z1.9mを放射 Z1.9mを表する。 Z1.9m

年代は、SD2が古代以降と考えられる。他は遺物がないため不明だが、堆積土の状況がSD2と類似することから、それらも同様と思われる。

B地点採集の土偶 (第4図)

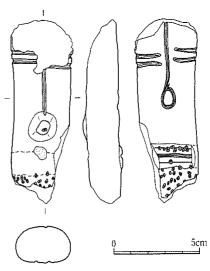
土偶は棒状を呈した胴部の破片である。横断面は楕円形で、中実である。大きさは長さ9.4 cm以上、幅3.4 cm前後、厚さ1.9 cmである。全体にミガキ調整された後に、沈線や隆帯、勅突で文様が描かれている。上半は沈線で正中線がひかれ、その左右から横走する2本の平行沈線が背面に回り込む。また、背面には沈線で6字状の文様が描かれている。腰部にあたる下半は、一部失われているものの隆帯が表裏をめぐって横に貼り付けられていたとみられ、その上部には横走する沈線がひかれている。また、隆帯から下には刺突が施されている。こうした文様は縄文時代晩期末から弥生時代にかけての土偶にみられる(会田1979、佐藤1996)。したがって、この

土偶も同じ頃のものと思われる。

C地点(第2図17·18、第5図)

この地点は東半が開田の際に大きく壊されている。遺構は 西半を中心に掘立柱建物跡が3棟(SB9~11) 溝跡が3条 (SD6~8)検出された。

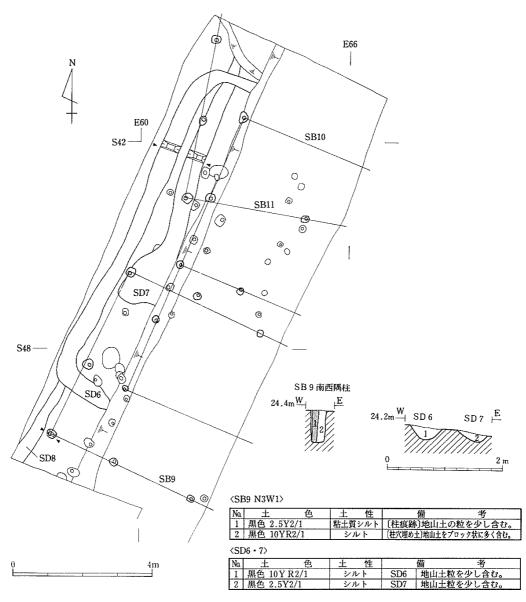
掘立柱建物跡には東西2間以上、南北2間のSB9、南北4間、東西1間以上のSB10、南北2間以上、東西1間以上のSB11がある。これらの建物の柱穴は長径0.2~0.3mの隅丸長方形や楕円形で、深さはSB9の南西隅柱で55cmである。埋



第4図 土偶

土はいずれも地山ブロックを含む黒色シルトである。柱痕跡は直径 10 cm程の円形で、堆積土は地山土の粒を少し含む黒色の粘土質シルトである。遺物はSB10の北西隅柱から土師器甕の破片が1点出土したのみである。なお、建物のうちSB9・11 は後述の溝跡SD7より新しい。

満跡には逆「コ」字状を呈するとみられる S D 6 と、南北溝 S D 7・8 がある。 S D 6 は S B 10 を囲むようにのびており、 S B 10 に伴う溝と考えられる。また、 S D 6 は S D 7・8 より新しい。一方、 S D 7 は S B 9・11 より古い。これらの溝の規模は S D 6 が長さ 12.1 m以上、幅 $0.3 \sim 0.6$ m、 S D 7 が長さ 7.5 m以上幅 $0.3 \sim 1.1$ m、 S D 8 が長さ 2.6 m以上、幅 $0.3 \sim 0.4$ mである。深さは S D $6 \sim 7$ が 20 cm、 S D 8 が 5 cmである。断面形はいずれも U 字形である。堆積土は、 各溝とも地山土の粒を少し含む黒色のシルトで、自然流入土である。方向は S D 6 が南北部分で N -26 ° - E、 S D 7 が N -19 ° - E、 S D 8 が N -30 ° - E である。これらの溝から遺物は出土しなかった。



第5図 C地点の遺構

掘立柱建物跡と溝跡の年代は、SB10とそれに伴なうSD6が古代以降と考えられる。他は遺物がないため不明だが、柱穴や堆積土のあり方がSB10やSD6と類似するので、それらも同様と思われる。

第 章 まとめ

- 1. 萩田遺跡は高清水町の中心部から約 2 km南西の高清水町字上萩田に所在し、透川の右岸に面した丘陵麓に立地する。
- 2. 今回の調査は圃場整備事業に伴うもので、道路と水路がつくられる遺跡北半の縁辺部の調査を行なった。また、遺跡東側の範囲を明確にするために、隣接地の確認調査も行なった。
- 3. その結果、北半の縁辺部は開田時に大幅に破壊されており、遺構はA・B・Cの地点で古代以降の掘立柱建物跡 3 棟、溝跡 7 条、近世以降の溝跡 1 条が検出されたのみであった。遺物はこれらの遺構とその周辺から縄文土器・弥生土器・土師器・青磁の破片と石器、土偶が少数出土した。なお、東側の隣接地では遺構・遺物は発見されなかった。

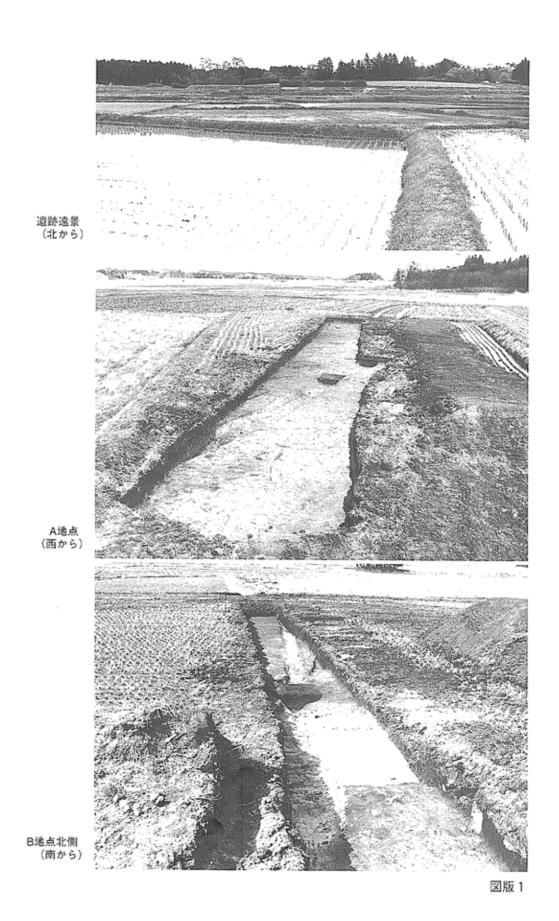
【引用・参考文献】

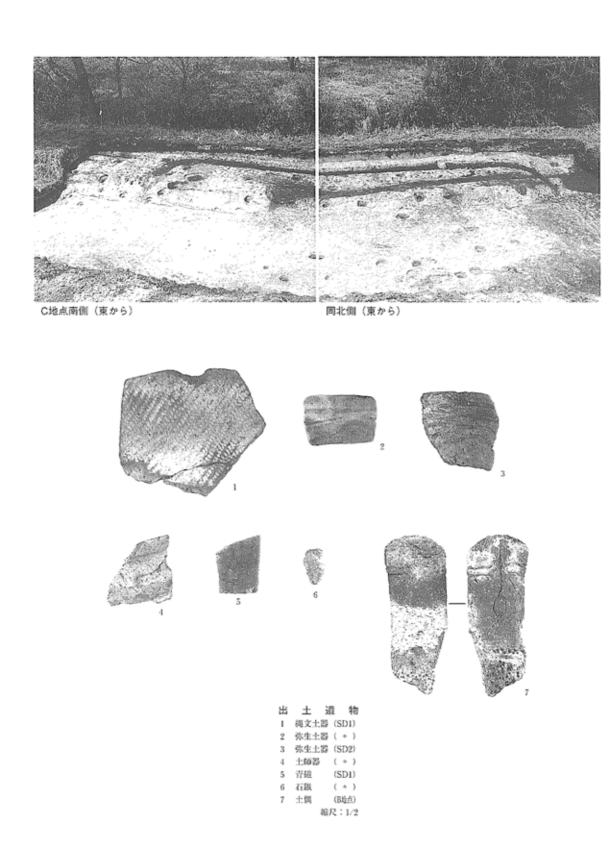
会田容弘(1979):「東北地方における縄文時代終末期以降の土偶の変遷と分布」『山形考古』3-2

伊東信雄(1957):「古代史」『宮城県史』1

佐藤嘉広 (1996):「東北地方の弥生土偶」『考古学雑誌』81-2

高清水町史編纂委員会(1976):『高清水町史』





図版2

くわ はた い せき 桑 畑 A 遺 跡

目 次

第	章	はじぬ	に																					9
	1	. 遺跡	の位置	と環	境																			9
	2	. 調査	にいた	る経	過と	調査	<u></u> の	方法	Ļ															9
第	章	検出し	た遺標	構と遺	遺物.																			9
	1	. 住 扂	: 跡																					. 9
	2	. ±	壙.																					9
第	章	考察と	まと	め																				. 10
<u> </u>	真区	図版																						. 10
【凡	例】	:1.磨石	類の実	則図で何	吏用し	た21	種類(カス!	フリ-	-ント	>	/は '	磨面	i」を	表し	たもの	のでる	ある。	ドッ	トの	粗し	も	のは細	かい
		のより	ざらつ	ハた面を	を示す	。こ	の用係	列以タ	小のも	5のに	こつし	てに	t、図	中に	注記	を加え	えた。							
		2. 図中	の方位	はすべて	て座標	北を	示す。																	

調査要項

遺跡 名:桑畑A遺跡(くわはたAいせき)

(宮城県遺跡地名表登載番号:43055 遺跡記号 JP)

所 在 地:宮城県粟原郡粟駒町沼倉字桑畑

調査原因:用水路建設(国営附帯県営かんがい排水事業)

調査期間:確認調査 1997年(平成9年)12月15日

事前調査 1999年(平成11年)10月4日~10月27日

調査面積:約88 m²

調查主体:宮城県教育委員会

調查担当:宮城県教育庁文化財保護課

確認調查 真山 悟、後藤秀一、古川一明

事前調査 伊藤 裕、岩見和泰

調查協力:栗駒町教育委員会、築館農林振興事務所、佐藤順太夫(地権者)、佐々木和典(鴬沢

町文化財保護審議委員)

第 章 はじめに

1.遺跡の位置と環境

桑畑A遺跡は、宮城県北西部の粟駒山麓、栗原郡栗駒町沼倉字桑畑に所在する。栗駒町役場のある岩ヶ崎の市街地から北西に約9kmの地点に位置している。

遺跡の所在する栗駒町は宮城県の北西端にあたる。北は岩手県一関市、西は秋田県と境を接しており、栗駒山南麓を源流とする二迫川・三迫川が町内を貫流している。

遺跡は三迫川上流域に形成された低位段丘上に立地しており、およそ東西 170m南北 200mのひろがりを持つ。標高 114~116mの緩やかな南斜面にあって、大部分は桑畑地区の集落と重なっている。

桑畑遺跡周辺には、縄文時代の遺跡がいくつか分布している。 上田遺跡は 1991 年に発掘調査が行われ、縄文時代晩期大洞 C 2 ~ A 式期の遺物包含層が検出された。 (古川一明 1992)。

このほか、滝の原遺跡、浦田遺跡、木鉢遺跡では縄文時代中期の遺物が採集されている。

2.調査にいたる経過と調査の方法

今回の調査は、「国営付帯県営かんがい排水事業 迫川上流地区」に伴うものである。工事が計画された上田用水路の施工区域内に桑畑A遺跡が含まれることになったため、文化財保護課では産業経済部農地整備課との協議を経て、平成9年12月に遺跡の範囲や遺構の広がりを把握するための確認調査を行った。大半の部分では表土直下で礫層が露出し遺構は確認されなかったが、一部については遺構の存在が予測されたため、平成11年10月に発掘調査を実施することとなった。

調査は、施工区域のうち確認調査を行うことができなかった約88㎡の範囲を対象として実施した。 この部分は遺跡の西側にあたり、標高約116mほどの畑となっている。南側は切り土によって約80cm の段差がつけられているため、調査区南端部が低くなっている(第2図)。

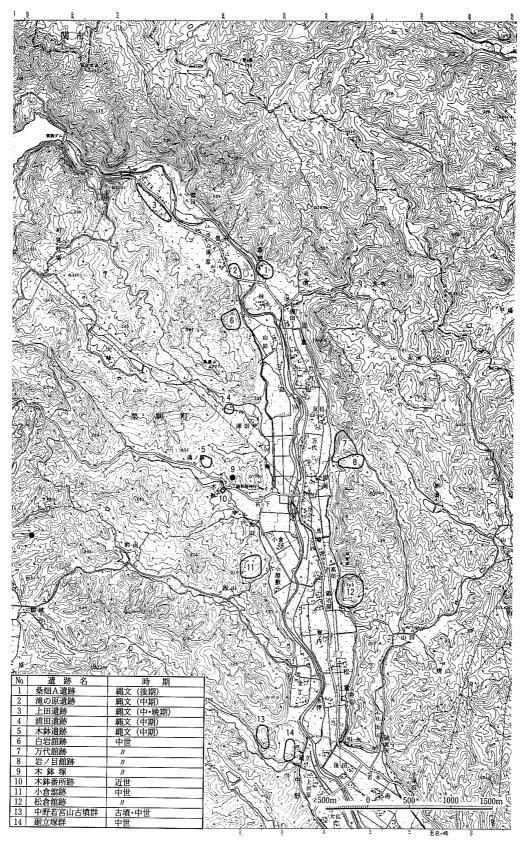
重機によって表土を除去した後遺構確認に移ったが、調査区のほとんどの部分では耕作土(厚さ 20~30 cm)の直下で地山が露出し、耕作による撹乱が地山まで及んでいた。地山は礫層、粗砂層、礫混じりのしまりある砂質シルト層などの河成堆積物が平面的に分布しており、これらの層で竪穴住居跡、土壙などの遺構を確認して精査を行った。

各遺構の平面・断面図は任意に設定した基準点を用いて 1/20 で作図し、調査区全体の平面図は平板 測量により 1/100 で作成した。調査の状況は、35 mmモノクロ・カラーリバーサルにより随時記録撮影 した。

なお調査柱には、岩ヶ崎高等学校、栗駒中学校等の教員・生徒、地元の方々が現場見学に訪れた。

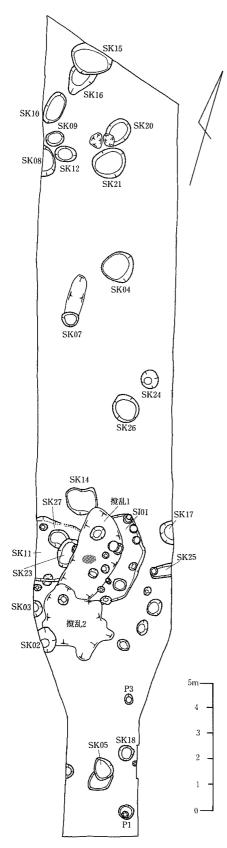
第 章 検出した遺構と遺物

縄文時代の竪穴住居跡1軒、土壙22基、ピットなどを検出した(第3図)。これらの遺構はおもに調



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第2図 調査区の位置



第3図 遺構配置図

査区北端、南側の段付近の2箇所で検出している。出土 遺物には縄文土器、石器があるが、遺構に伴うものは少 数である。

1.住 居跡

S I 01 (第4図)

[位置] 調査区南側の段付近で検出した。

[重複] SK11・SK23と重複するが、これらとの新旧関係は不明である。西半は遺構確認段階で地山が露出したため、壁~床面にいたるまで削平されていると考えられる。

[規模・平面形] 2 つの撹乱により破壊されているため規模・平面形とも不明だが、柱穴と考えられるピットの位置から推定すると長軸 4m前後の円形基調と考えられる。

[堆積土] 東側に残存していた1層のみである。

[壁] 地山を壁としており、東側の一部を検出した。 残存高は3~14 cmで、緩やかに立ち上がっている。

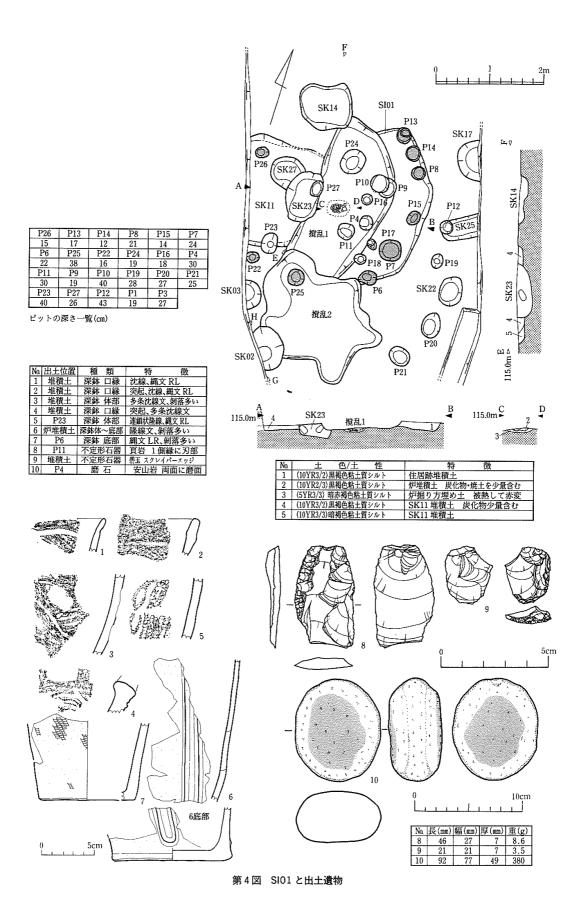
「床] 地山を床面としている。

[柱穴] 東半の床面で8個のピットを検出した(13・14・8・15・7・6・17・18)。また床が削平されている部分や撹乱に破壊されている部分でも11個が検出されている(4・9・10・11・16・24・25・22・23・26・27)。このうち柱穴として組み合うと考えられるのは13・14・8・15・7・6・25・22・26の9個で、炉を中心とした円形基調の配列を示している。

このほか 27・10・9・12・19・20・21・23 の 8 個のピットも円形基調の配列を示しており、S I 01 と重複する別の住居跡に伴う柱穴と考えられる。

ピットの堆積土はいずれも黒褐色粘土質シルトで、小 礫や炭化物を含む。

[炉] 住居跡を破壊している撹乱 1 の底面で、焼け面を検出した。上部の構造は失われているが、長径 45 cm、短径 30 cm、深さ 18 cmの楕円形で皿状を呈する掘り方が残存する。地床炉あるいは石囲炉であったと推定される。



[遺 物] 堆積土、ピット、炉から縄文土器、石器が出土した。 縄文土器(第4図)

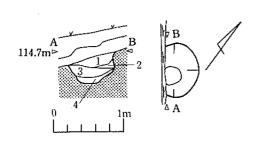
51 点が出土したがほとんど小破片である。口縁部は無文帯を持つもの(1、2) 多条沈線により渦文が描かれるもの(4)がある。体部には多条沈線(3) 連鎖状刺突を持つ隆線(5) 基底幅が広い隆線(6)で文様が描かれている。(6)は炉堆積土上部に横転した状態で出土した深鉢の体部~底部である。

石器(第4図)

楔形石器 1 点、不定形石器 4 点、剥片・砕片 14 点(うち二次加工あるもの 2 点) 礫石器 2 点が出土した。不定形石器 (8、9) 磨石 (10) の 3 点を図示した。

2.土 塘

南側のSI01 住居跡付近で8基、調査区北端で8基、中央部付近で4基、他よりも低くなっている 南端部で2基を検出した。平面形は円形もしくは楕円形を基調とするものが多く、深さは 30 cmから 50 cm以内のものが主体である。なお土壙は、構築場所によっては礫層を掘り抜いているものが見られ る。以下、主要なものについて記載する。



No.	土 色/土 性	備考
1	(10YR2/3)黒褐色粘土質シルト	
2	(10YR3/3)暗褐色粘土質シルト	
3	(10YR2/3)黒褐色粘土質シルト	炭化物多く含む
4	(10YR3/4)暗褐色砂質シルト	

第5図 SK02

SK02(第5図) SI01住居跡の南西で一部を検出した。径約0.8mの円形もしくは楕円形を呈すと考えられる。深さは約40cmで壁はやや急角度に立ち上がる。堆積土は4層で小礫・微小礫・炭化物などを含む。

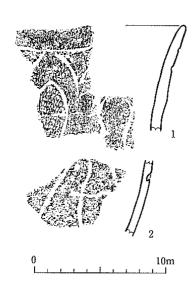
[遺物](第6図) 堆積土から縄文土器、石皿1点、剥片3点が出土した。口縁部破片(1)は2本の沈線により縦長の単位文様が描かれている。

S K11(第4図) S I 01 の東側で一部を検出した。 S K23、S K27、S I 01 と重複しており、S K23 よ り古いが他の2つの遺構との関係は不明である。径約

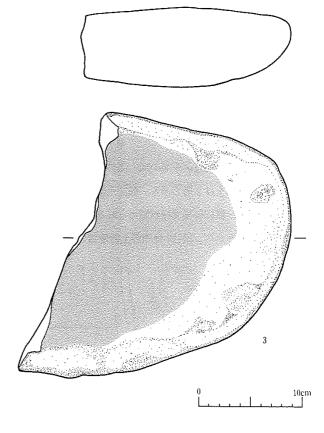
2m深さ7~10 cmで浅い皿状を呈する。堆積土は2層である。

位置	番号	重 複	平面形	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	断面形	出土遺物	備考
	SK14		方	1	0.8	0.18	逆台形	縄文土器	底面凹凸あり
住	SK27	SK23 より古	不整円	0.55		0.27	U字状	石皿破片	SK11 との関係不明
居	SK23	SK27・SK11 より新	楕円	0.95	0.6	0.3	逆台形	縄文土器、石鏃、不定形、磨凹石、剝片類	堆積土単層
跡	SK17		円·楕円	0.7		0.25	逆台形	土製円板、石鏃、剝片類	堆積土上位に小礫多い
	SK11			2		0.1	皿状	縄文土器、石鏃、両極、石皿、剝片類	堆積土2層
付	SK02		円·楕円	0.8	_	0.4	逆台形	縄文土器、石皿、剝片類	堆積土4層
沂	SK03		円·楕円	0.5		0.22	U字状		堆積土単層
	SK25			>0.7	0.4	0.27		縄文土器	堆積土単層
南端	SK18		円	0.5		0.29	逆台形	縄文土器	埋設土器遺構か
端	SK05		楕円	0.7	0.6	0.31	逆台形		堆積土単層
	SK04		円	1	0.95	0.3	逆台形		堆積土単層
1 🏗	SK07		円	0.5	0.45	0.48	逆台形	縄文土器	堆積土単層
中央部	SK24		円	0.6	0.55	0.62	U字状	縄文土器、石鏃、不定形、剝片類	堆積土単層
SAID	SK26		円	0.9	0.8	0.29	逆台形	剝片類	堆積土単層
	SK15	SK16 より古	楕円	1.1	0.8	0.49	箱状	縄文土器、石皿	堆積土中・下位に中礫
調	SK16	SK15 より新	楕円	1.3	1前後	0.34	U字状	縄文土器、剝片類	上層に中礫多い
查	SK10		楕円	1.05	0.55	0.45	U字状	剝片類	堆積土下位に小礫多い
X	SK08		(楕円)	(1)		0.55	U字状	石皿、剝片類	堆積土中位に板状の礫
1 -	SK09		円	0.55	0.45	0.26	逆台形	剝片類	堆積土単層
北	SK12		楕円	0.55	0.46	0.24	逆台形		堆積土単層
(84	SK20		円	1,1	0.9	0.33	逆台形	磨石、剝片類	堆積土単層
50	SK21		楕円	(1)	0.66	0.3	逆台形	縄文土器	堆積土中位に炭化物

表 1 土壙属性表(不定形=不定形石器、両極=両極剝離痕ある石器)



[遺物]縄文土器20数点、石鏃未成品1点。両極剥離痕ある石器1点(第8図4)不定形石器1点(第8図5)石核1点、剥片・砕片14点、石皿1点(第8図8)凹石1点(第8図6)が出土した。図示できた土器は、沈線と磨消縄文で文様が描かれる体部1点のみである(第8図1)。



	Nα	出土位置	種	類	特 徴
	1	堆積土	深鉢	体部	沈線文、盲孔
Γ	2	堆積土	深鉢	口縁	沈線文、磨消縄文
ſ	3	堆積土	石		安山岩 長>195mm、輻(230mm)厚68mm重(4580)g

S K23(第4図) S K11 と撹乱 1 の間で検出した。S K11、S K27 より新しく、撹

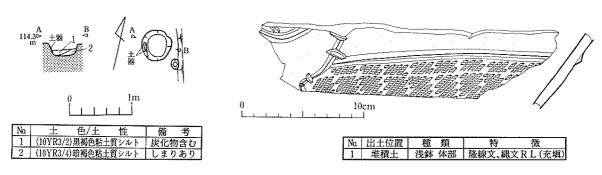
第6図 SK02 出土遺物

乱 1 より古い。ピット 27 との前後関係は不明である。長径約 95 cm、深さ 30 cmの楕円形を呈する。 堆積土は小礫を含む黒褐色粘土質シルトである。

[遺物] 堆積土から縄文土器数点、石鏃1点、不定形石器2点、剥片2点、磨凹石1点(第8図7)が出土した。図示できた土器は、基底幅の広い隆線文の施文された体部破片のみである(第8図3)。 磨凹石の表裏面にはベンガラと見られる赤色の物質が一部に付着している。また側面の磨面は、表裏面の磨面よりも粗くざらついている。

S K17(第3図) S I 01 の東側で一部検出した。径 70 cm深さ 25 cmで、断面は逆台形状を呈す。 堆積土は黒褐色砂質シルトである。

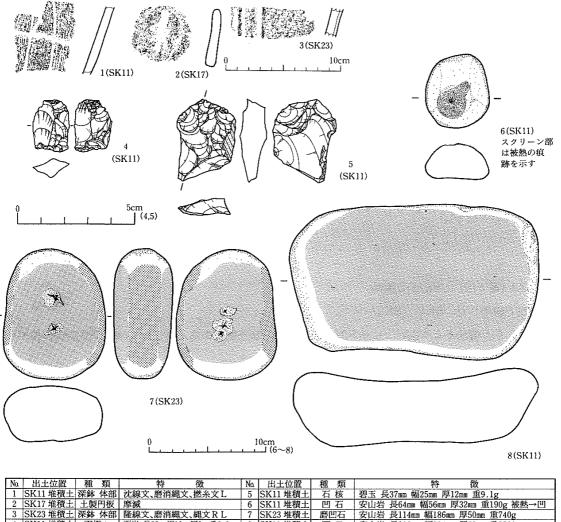
[遺物] 堆積土から土製円板1点(第8図2) 石鏃未成品1点、剥片・砕片4点が出土した。



第7図 SK18と出土遺物

SK18(第7図) 調査区南端の低い部分で検出した。径50cm前後、深さ30cm前後の円形で、底 面は平坦である。堆積土は2層である。縄文土器の浅鉢体部が壁に密着した状態で出土した。基底部 が幅広い隆線による、横位展開文様が認められる。

土器の出土状況から、SK18は埋設土器遺構の可能性がある。



碧玉 長37mm 幅25mm 厚12mm 重9.1g 安山岩 長64mm 幅56mm 厚32mm 重190g 被禁 安山岩 長114mm 幅186mm 厚50mm 重740g 安山岩 長212mm 編134mm 屋63mm 重2500c

(*両極剝離痕ある石器)

第8図 SK11, SK17, SK23 出土遺物

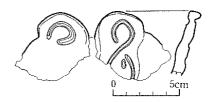
S K07(第3図、第9図) 調査区中央寄りで検出した。 径50 cm、深さ48 cmの円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がっ ている。堆積土は黒褐色砂質シルトである。

縄文土器深鉢の口縁部が 1 点出土した。波状部に沈線による S 字文、渦文が描かれている。

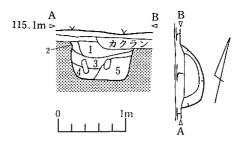
S K24(第3図、第11図) 調査区中央部東寄りで検出した。径60 cm、深さ62 cmの円形で壁は垂直に立ち上がる。堆積土は暗褐色砂質シルトである。

[遺物]堆積土から縄文土器の細片が数点、石鏃1点(第 11図1) 不定形石器1点(第11図2)が出土した。

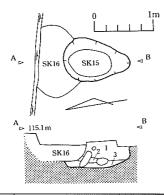
S K08 (第10 図、第11 図) 調査区北端部の西壁際で一部検出した。深さ55 cmで断面は逆台形状を呈す。堆積土中位から石皿 (第11 図3) が出土した。



第9図 SK07 出土遺物

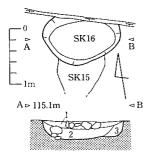


Na	土 色/土 性	備考
1	(7.5YR3/2)黒褐色砂質シルト	
2	(10YR4/4)褐色砂質シルト	
3	(10YR3/2)黒褐色砂質シルト	
4	(10YR3/4)暗褐色粘土質シルト	石皿出土
5	(10YR3/3)暗褐色細砂	若干汚れている



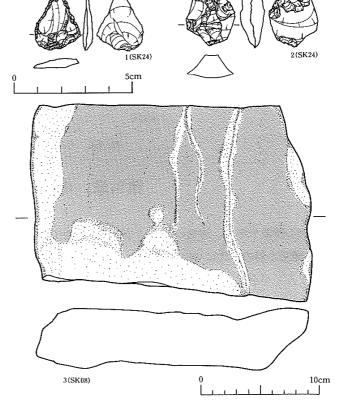
Na	土	色/土	性	備	考
1	(10YR3,	/2) 黒褐色砂質	ジルト		
2	(10YR3,	/3)暗褐色砂質	【シルト	中礫台	计
3	(7.5YR	3/2)黒褐色細	砂	中際台	<u> </u>

第12図 SK15



No.	土 色/土 性	備考
1	(10YR3/2)黒褐色砂質シルト	中礫多く含む
2	(10YR3/3)暗褐色粗砂	中礫少量含む
3	(7.5YR3/2)黒褐色細砂	若干の汚れ

第13図 SK16



Na	出土位置	種 類	特 徴
1	SK24 堆積土	石 鏃	頁岩(粗粒) 長27mm 幅19mm 厚4mm 重1.4g 周辺加工
2	SK24 堆積土	不定形石器	碧玉 長25mm 幅21mm 摩10mm スクレイパーエッジ
3	SK08 堆積土	石皿	安山岩 長>162mm 幅230mm 厚(47mm) 重3960g

第11図 SK08, SK24 出土遺物

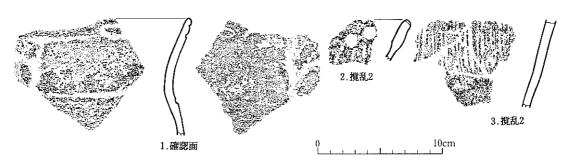
S K15(第 12 図) 調査区北端の北壁際で検出した。 S K16 よりも古い。長径 110 cm、深さ 49 cm の不整楕円形を呈す。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。堆積土中位に挙大の礫が含まれており、石皿の破片が 1 点出土した。

S K16(第13図) S K15を切って構築されている。長径130 cm、深さ34 cmの不整円形を呈し、 壁は急角度で立ち上がっている。堆積土上層に拳大以上の礫が多数含まれている。堆積土中から剥片 2点が出土した。

3.その他の出土遺物

遺構外の出土遺物は、縄文土器の小破片が約200点、石器では石鏃などの定形的な石器と不定形石器が43点あり、剥片・砕片は163点におよぶ。撹乱2はSI01などを破壊しているため土器片が70数点、石器では定形および不定形石器が12点、剥片・砕片が40点と、大量の遺物が出土している。これらのうちで、文様の特徴が判明する土器を第14図に、定形的な石器を写真図版4に示した。

土器の口縁部破片には、波状部の表裏に沈線による円形文様が描かれるものや(1) 表面に盲孔のあるもの(2)が見られる。体部破片(3)には櫛歯状条線文が施文されている。



,第14図 その他の出土遺物

第 章 考察とまとめ

遺物の特徴や年代、遺構の性格についてまとめておく。

(1)縄文土器の年代について

ほとんどが小破片であるため器形が判明するものは少ない。文様の判明するものを列挙すると、口縁部破片には突起下に多条沈線で文様が描かれるもの(SI01:第4図4)2本沈線と磨消縄文によって縦位の単位文を施文するもの(SK02:第6図1)S字状沈線文を施文するもの(SK07:第9図)がある。体部破片には多条沈線文(SI01:第4図3)一部連鎖状の隆線(SI01:第4図5)沈線文(SK02:第6図2)が認められる。このような文様が施文される土器は、宮城県内では縄文時代後期前葉の南境式に位置づけられている。

南境式には3段階の変遷があり、県北と県南では器形組成や文様の細部における地域差が存在するとされる(丹羽・阿部ほか1982、加藤・阿部ほか1984)。県北では一迫町青木畑遺跡・色麻町大谷地遺跡 大和町金取遺跡(石巻市南境貝塚B群土器) 南境貝塚C群土器という変遷が明らかにされてい

るが、今回出土した土器の文様の特徴は、石巻市南境貝塚のA群及びB群土器(註 1)や大和町金取遺跡の出土例に類似している。

このほか、基底幅が広い隆線文による区画文が施文されるものが見られる(SI01:第4図6、SK18:第7図、SK23:第8図3)。このような土器は県南地域の蔵王町二屋敷遺跡第 群土器や、白石市菅生田遺跡第 群土器、柴田町向畑遺跡の遺物包含層3層出土土器との類似性が認められる。菅生田・向畑遺跡の土器は、県北における青木畑・大谷地遺跡の段階に対比されていることから、当遺跡出土土器はおおむね縄文時代後期前葉の古い段階に位置づけられよう。

(2) 石器ついて

出土した全石器の組成は、石鏃 21 点(未成品、破損品含む) 尖頭器、箆状石器、石匙、抉入石器が各 1 点、クサビ形石器 3 点、石錐 2 点、両極剥離痕ある石器 5 点、不定形石器 22 点で、石核・剥片類が 214 点(うち石核 1 点)であり、礫石器は石皿 8 点、磨石類12 点、凹石 4 点である。これらの年代は、土器と同様に縄文時代後期前葉と考えられる。

次に、ややまとまった量が出土した石鏃と不定形石器の特徴についてふれておくと、石鏃で基部形態が判明するものは、凹基のもの9点、平基のもの6点、凸基のもの2点である。これらの側辺形態は、凹基のものには直線的なものと尖頭部付近で内湾し基部付近が外湾するものとがあり、平基のものには直線的で全体が三角形状のものと、直線的だが基部が円みを帯びたもの(丸凸基に近い)があ

遺構	石 器	碎片·剝片
SK02	0	3
SK08	0	1
SK09	0	8
SK10	0	1
SK11	3	15
SK16	0	2
SK17	1	4
SK18	0	1
SK22	0	4
SK23	3	3
SK24	2	1
SK25	0	1
SK26	0	1
SI01	1	8
ピット	3	6
その他	44	157
小計(点)	57	216

表 2 剝片石器集計表

る。凸基のものはいわゆる有茎石鏃で、基部付近の側辺が短く張り出すものがある。大きさ(長さ)は凹基のものが 1.2~3.1 cm、平基のものが 1.2~2.5 cm、凸基のものが 1.3~1.5 cmで、全体として長さ 2 cm以上のものは少ない。

不定形石器は部分的な二次加工によって刃部を作出するもので占められており、1 側縁に連続した 二次加工の刃部を持ち縦長の形態を呈するものや、粗雑なスクレイパーエッジを有するものが見られ る。二次加工が全周に及ぶものは数点で、尖端部が作出されるものなどがある。

剥片の数も少なく、中期後葉から後期前葉の遺跡で出土例 が多い縦長剥片はほとんど認められないが、縦長剥片を素材 とする頁岩製石器が数点存在する。

石材の組成は表3に示す通り、碧玉(特に鉄石英)・頁岩・玉髄の順で組成中に占める割合が高い(註2)、玉髄については、当遺跡から1.5kmほど上流に位置する晩期の上田遺跡においても石材組成の主体を占めており(古川 前掲書)、こうした傾向は三迫川上流地域における石材組成の特徴を示すものと思われる。

なお、礫石器はすべて安山岩製である。

石材	石器	砕片・剝片
安山岩	0	5
玉 髄	18	36
珪化凝灰岩	0	4
珪 化 木	0	4
珪 質 岩	. 0	1
黒曜石	4	0
水晶	1	0
頁 岩	9	64
碧 玉	25	(原石1,石核1) 101
流紋岩	0	1
小計(点)	57	216

表 3 剝片石器の石材組成

(3)遺構の年代と性格

SI01 は炉跡出土の深鉢(第4図6)の特徴から、縄文時代後期前葉に位置づけられる。堆積土出土土器についても、炉跡出土器との間に年代的に大きな隔たりはないと考えられる。その他の遺構の出土土器はすべて堆積土中からの出土であるが、SI01 出土土器と明らかに異なる年代のものは認められないため、これらに関してもおおむね縄文時代後期前葉と考えておきたい。

つぎに土壙の性格についてみると、SK08・10・15・16 は平坦な底面を持ち、壁は急角度で立ち上がり、人為的に埋め戻された可能性がある。これらは堆積土上部~中位から中礫や礫石器が出土する点でも共通している。堆積土の分析等を行っていないため明確な裏付けはないが、このような特徴はこれらの土壙が墓壙である可能性を示すと思われる。

他の土壙はいずれも自然堆積で、遺物は堆積土上部~中位から縄文土器の小破片が出土しているだけであるため、性格としては廃棄穴などが考えられる。

(4) まとめ

- 1.桑畑A遺跡では、縄文時代後期前葉の竪穴住居跡 1 軒、土壙 22 基が検出され、縄文土器、石器、 剥片類が出土した。
- 2. 土壙には墓壙と思われるものが含まれている(SK08, SK10, SK15, SK16)。
- 3.少数の剥片石器と剥片、比較的多量の砕片が出土した。これらの石材組成の主体を占めるのは碧 玉(特に鉄石英)で、いずれの石材にも縦長剥片はほとんど認められない。

註1:南境貝塚のA群土器はB群土器よりも古い段階に位置づけられている

註2:石材同定は須田良平氏の教示による

引用参考文献

伊東信雄編:1981『宮城県史』34 資料集 考古資料

小野寺祥一郎:1980『金取遺跡』宮城県文化財調査報告書第70集

加藤・阿部ほか:1984「二屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書 IX』宮城県文化財調査報告書第 99 集 佐藤・赤澤:1988「 .考察 2.石器」「大梁川遺跡」『大梁川・小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書第

126 集

佐藤信行:1989『宝領遺跡』宮城県一迫町文化財調査報告書第4集 佐藤 洋:1987『六反田遺跡』仙台市文化財調査報告書第102集

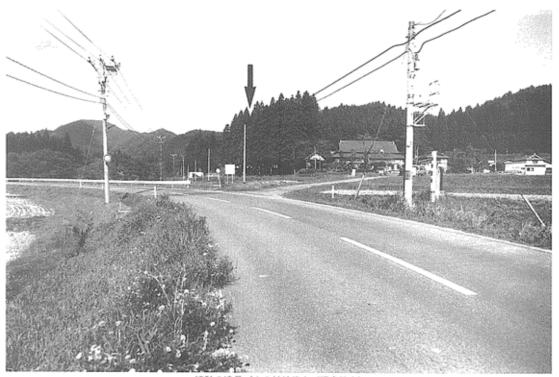
須田良平:1987「 . 考察 2. 石器について」「中ノ内A遺跡」『中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他』宮城県文 化財調査報告書第121集

丹羽・阿部ほか:1982「菅生田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』 。宮城県文化財調査報告書第92集

古川一明:1992「上田遺跡」『金鋳神遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 150 集

吉岡・工藤ほか:1996『野川遺跡』仙台市文化財調査報告書第205集

吉岡・篠原ほか:1996『下ノ内浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第207集



遺跡の遠景(↓の杉林後方が調査地点)



調査区全景 (北から)

図版 1



調査区南端の 状況

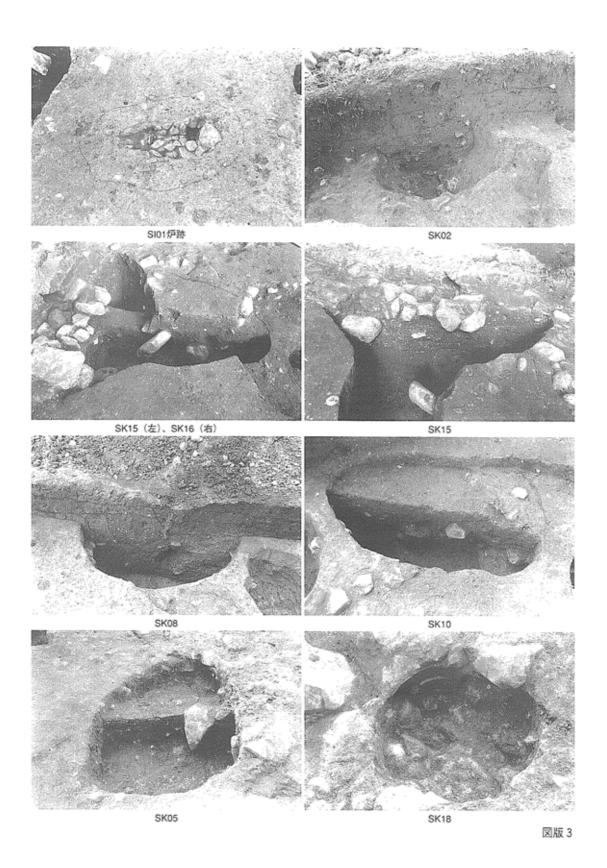


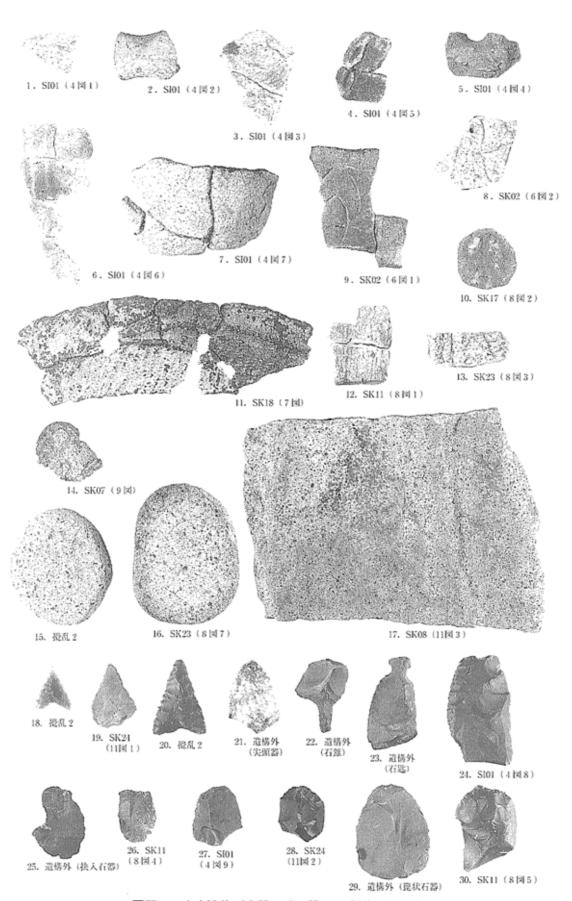
SI01 (西から)



図版 2 106

SI01(東から)





図版 4 出土遺物(土器・礫石器1/3 剥片石器2/3)

これがは これが はき これが はき 一本柳遺跡・小沼遺跡

目 次

第	章	はじめに	111
第	章	発掘調査の成果	113
	1	1 調査の方法と経過	113
	2	2 基本層序	113
		3 発掘された遺構と遺物	
第	章	まとめ	116
Ī	引用・	・参考文献	116
7	写直図	刘版	117

調査要項

遺跡 名:一本柳遺跡(いっぽんやなぎいせき)

(宮城県遺跡地名表登載番号:39044、遺跡記号 IZ)

小沼遺跡(こぬまいせき)

(宮城県遺跡地名表登載番号:39033)

所 在 地:宮城県遠田郡小牛田町一本柳・小沼 他

調査原因:出来川右岸地区(担い手育成)基盤整備事業

調査主体:宮城県教育委員会

調查担当:宮城県教育庁文化財保護課

確認調查 真山 悟、村田晃一 事前調査 茂木好光、菅原弘樹

調査期間:確認調査 1998年(平成10年)12月10日

事前調査 1999年(平成11年)11月8日~11月22日

調査対象面積: 2,800 m²

調査面積:1,800 ㎡

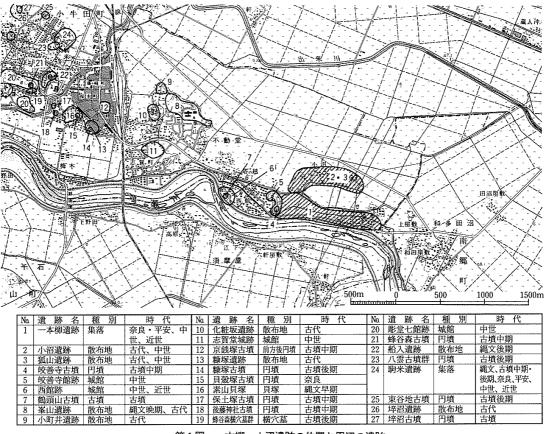
調査協力:小牛田町教育委員会、宮城県古川農林振興事務所、小牛田町土地改良区、熊谷組

第 章 はじめに

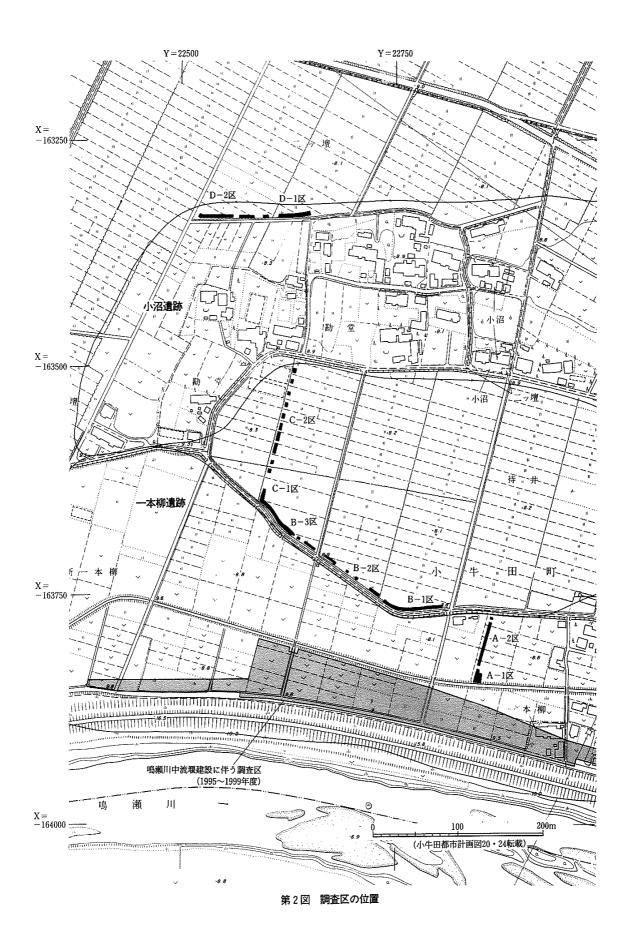
一本柳遺跡は、遠田郡小牛田町一本柳・新一本柳・塩釜に、小沼遺跡は同町小沼・勘堂・二ッ壇に 所在する。これらの遺跡は小牛田町役場の南東約3kmの離れた不動堂地区にあり、南郷町と境を接し ている。地形的には、箟岳丘陵と大松沢(鹿島台)丘陵が最も接近し、大崎低地が狭くなる東縁部に あり、鳴瀬川左岸の自然堤防上に立地している。北側には江合川が平行して流れ、この間に小牛田の 市街地を流れている出来川が通る(第1図)。

一本柳遺跡は、奈良・平安、中世、近世にいたる東西 1 km×南北 0.3 kmにおよぶ大規模な遺跡である。平成 7 年から平成 11 年までの 5 ヵ年間にわたって、建設省東北地方建設局による鳴瀬川の堤防改修と中流堰建設計画に伴う事前調査が行われた。奈良・平安時代には掘立柱建物群が規則的・継続的にあり、官衙的集落であった可能性が高く、土師器・須恵器・灰釉陶器・硯・漆紙・墨書土器などが出土している。また、中世では道路跡・多数の掘立柱建物跡・300 基以上の井戸跡があり、東西 70 m×南北 25m以上の規模をもつ屋敷地が確認された。出土遺物も青磁・白磁・青白磁・中世陶器・かわらけ・木製品(漆器・曲物・茶筅・板草履など)・鳥帽子・金属製品・石製品(茶臼)・動物遺体(ウマ・イヌ)などが出土しており、在地領主クラスの武士の屋敷跡であったと考えられている(山田・伊藤: 1998)。

小沼遺跡については発掘調査が行われておらず、詳細は明らかでないが、土師器・須恵器、青磁・白磁が出土しており、古代・中世の集落跡と考えられている(小牛田町史編纂委員会 1970)。



第1図 一本柳・小沼遺跡の位置と周辺の遺跡



第 章 発掘調査の成果

1.調査の方法と経過

今回の一本柳・小沼遺跡の調査は宮城県古川農林振興事務所が主体の出来川右岸地区(担い手育成) 基盤整備事業に係るものである。

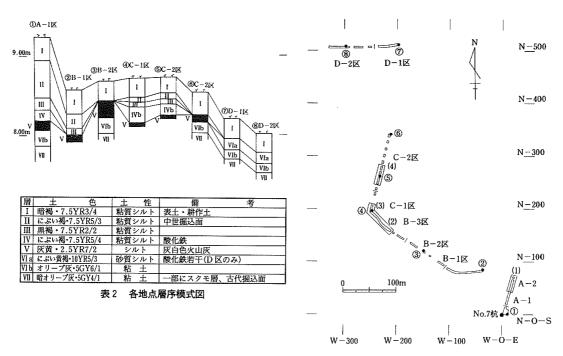
平成 10 年度の試掘調査の結果を踏まえて、用水路部分(調査対象面積 2,800 ㎡)のうち 1,800 ㎡について事前調査を行った。トレンチは一本柳遺跡の中流堰側にA区、遺跡に接する北沿いにB区、北側の水田地帯にC区、小沼遺跡の北沿いにD区を設定した。その結果、一本柳遺跡では遺物は出土しなかったが、A-2区、B-3区、C-2区で溝跡、土壙、畦畔状遺構、柱穴が検出された。一方、小沼遺跡のD区では地山まで削平がおよんでおり、遺構・遺物は検出できなかった。

また、検出された遺構は、A区の南端の 7 杭(国家座標 X = -163845.438 Y = 22843.967)を発掘調査の原点として、1/100・1/200 の縮尺で平板測量、B - 3 区は 1/20 の縮尺で実測図を作成した(第2図)、記録写真は35 mmのモノクロ・リバーサルフィルムを用いて作成した。

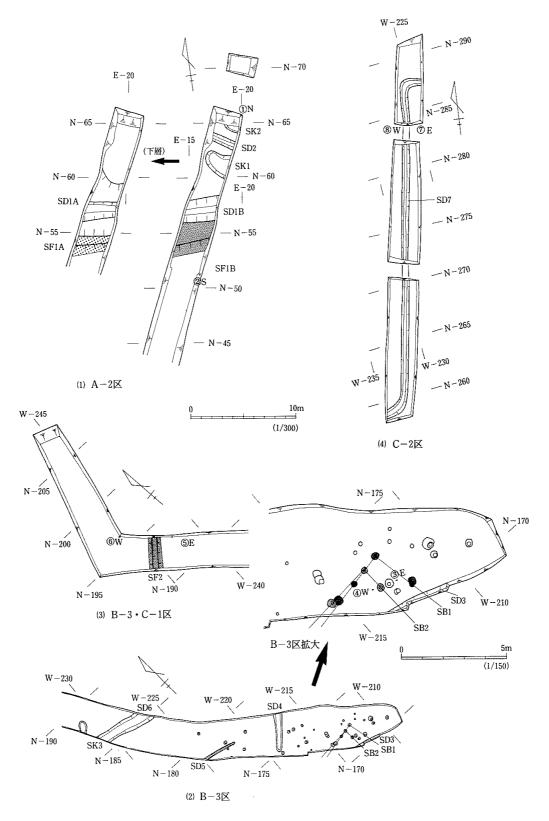
2.基本層序

調査区の基本層序は、 層は暗褐色の表土・耕作土・ 層はにぶい褐色土で、中世の遺構の掘り込み面、 層は黒褐色土、 層はにぶい褐色土、 層は灰白色火山灰(10世紀前葉)のシルト、 層は 2 つに大別され、b層はオリーブ灰色土で全体にみられるが、a層は小沼遺跡のD区でみられる酸化 鉄を含むにぶい黄褐色土、 層は暗オリーブ灰色土で一部スクモ層があり、古代の遺構の掘り込み面である。 ~ 層は粘質シルト、 ・ 層は粘土である。

A~C区の全域には 層:灰白色火山灰の堆積が認められ、今回の調査区は概して地形が低いことが知られた(第3図)。



第3図 各地点の層序模式図と調査区



第4図 遺構平面図

3. 発掘された遺構と遺物

(1) 古代の遺構(第4・5図)

古代の遺構は、A-2区で畦畔状遺構2条(SF1A・B) 溝跡3条(SD1A・B、SD2) 土壙 2基(SK1·2) B-3区で畦畔状遺構1条(SF2) 溝跡3条(SD4·5·6) 土壙1基(SK3) C-2区で溝跡1条(SD7)が検出された。

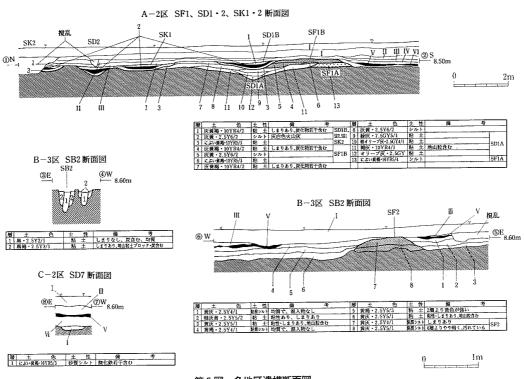
[A-2区] 調査区の北側で、基底幅 2.0m×高さ 0.2mのSF1A 畦畔状遺構と北側に上幅 5.0m ×深さ 0.4mの大きな S D1A 溝跡を検出した。これらの遺構は東西に平行に走っている。溝の北側の 上場が大きく張り出しており、氾濫した形跡があり、埋没したものと思われる。

廃絶後、同じ位置に基底幅 3.0m×高さ約 0.2mの S F1B 畦畔状遺構と上幅 2.3m×深さ 0.25mの SD1B溝跡が造られている。

さらに、これらの新しい遺構とは別に、SD1B溝跡と平行しない上幅0.8m×深さ0.25mのSD2 溝跡、短軸 2.2m×長軸 2.3m以上×深さ 0.2mの S K1 土壙、削平された長軸 1.2m以上の浅い S K2 土壙が北側に検出された。これらのSD1B・2 溝跡とSK1・2 土壙には 層:灰白色火山灰が堆積 しており、同時期に機能していたと考えられる。

[B-3·C-1区]B-3区西は周辺より高くなっており、SD4·5·6溝跡とSK3土壙を検出し た。

また、B - 3区の西端では基底幅 1.3m×高さ 0.25mの S F 2 畦畔状遺構を検出し、C - 1区の西側 では 層:灰白色火山灰に覆われた基本層序 層を起源とする全体に暗く汚れた粘土層が認められた。 底面はやや凹凸ぎみである。



第5図 各地区遺構断面図

[C - 2区 調査区の中央で、上幅0.45m×深さ0.15mのSD7溝跡が約30mにわたって検出された。 層上面から掘り込まれており、調査区に沿って南北に走り、南西端と北東端に抜ける。

(2)中世の遺構(第4・5図)

中世の遺構は、B-3区で掘立柱建物跡2棟(SB1・2)溝跡1条(SD3)柱穴多数が検出された。 [B-3区]B-3区は周辺より高くなっており、中央部で全体の規模は不明であるが東西棟のSB 1・2掘立柱建物跡の北東隅が検出された。柱穴の新旧関係からSB2掘立柱建物跡が新しい。

いずれの掘立柱建物跡の掘り方も、全般に径30cm前後の円形もしくは一辺30cm前後の隅丸方形で、 柱痕跡も10cm前後の円形である。柱痕跡は掘り方よりも10cmほど沈んでいるものもある。

S B1 掘立柱建物跡の柱間寸法は北桁行 1.7m・東梁行 0.9m、S B2 掘立柱建物跡の柱間寸法は北桁行で東から 1.4m・0.9m、東梁行は 1.7mである。

掘立柱建物跡とは時期が違う東西に走るSD3溝跡が南壁ぎわで検出された。

また、掘立柱建物跡の柱穴と同じ規模の黒褐色の粘土が堆積した柱穴が多数検出されている。

第 章 まとめ

古代は、鳴瀬川中流堰調査区の低地で遺物のない地区では、水田跡が検出されている。

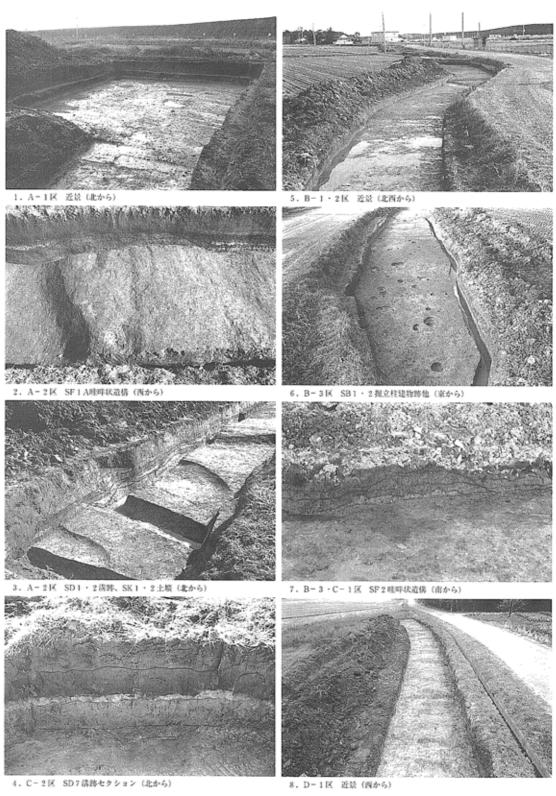
今回の調査区では明確な耕作土や小畦畔は検出できなかったが、A-2区、B-3・C-1区で検出された畦畔状遺構は、低地で周辺に遺物がないことから畦畔の可能性がある。

また、A-2区の最北のトレンチが削平を受け土層が明瞭でないが調査区外の北側と、B-3・C-1区の西側に水田跡があった可能性がある。

中世は、B-3区で中世の溝跡と建物群が検出されているが、これらの遺構は微高地上の狭い範囲に立地する下級武士・農民の集落であり、中流堰調査区で確認された主屋をもつ在地領主クラスの武士の屋敷地の裏手もしくは周辺に展開するものと考えられる。

引用・参考文献

山田晃弘・伊東 裕 (1998):『一本柳遺跡 』 宮城県教育委員会 小牛田町史編纂委員会 (1970):『小牛田町史 上巻』



図版 1

牧野巣山塚跡

目 次

第	章	遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	121
第	章	発掘調査の成果	122
	1	. 調査の方法と経過	122
	2	. 発見された遺構と遺物	123
第	章	まとめ	125
	弓	用・参考文献	125
7	写直図	刃版	127

調査要項

遺跡 名:牧野巣山塚跡(まきのすやまつかあと)

宮城県遺跡地名表登載番号:66076、遺跡記号ZY

所 在 地:宮城県桃生郡河北町字牧野巣山

調査原因:土地改良事業に伴う農業貯水槽建設工事

調査主体:宮城県教育委員会

調查担当:宮城県教育庁文化財保護課 真山 悟、山田晃弘

確認調査・事前調査 斎藤吉弘、菅原弘樹、岩見和泰

調査期間:確認調査 1999年(平成11年)3月15日

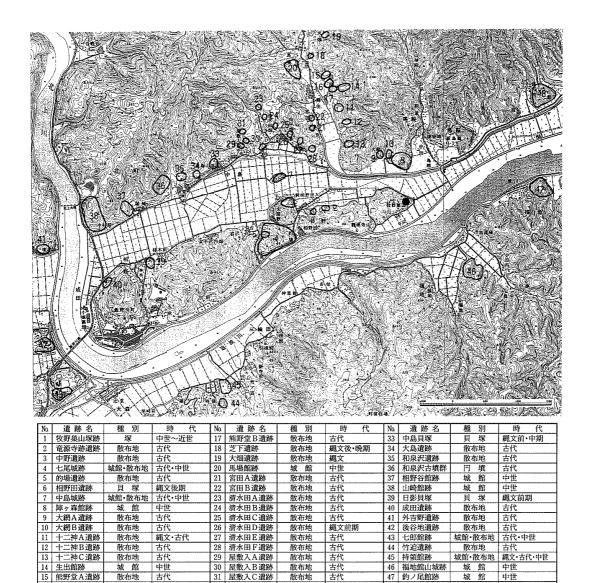
事前調査 1999年(平成11年)3月17・18日、3月24・25日

調査面積:390 m²

調查協力:宮城県石巻農林振興事務所、桃生郡河北地区教育委員会、(株)山内組

章 遺跡の位置と環境 第

牧野巣山塚跡は桃生郡河北町字牧野巣山に所在する。河北町役場からは東北東に約4.5 kmの地点の 北上川(追波川)北岸に位置しており(第1図-1) 南流する北上川(追波川)が大きく屈曲し東流 する北岸に位置し、河川によって解析された東西に延びる丘陵東部に立地する。標高 84.4mの中野山 の東、標高 60~64m前後の丘陵東端の丘陵頂部に築かれており(第2図) 後背湿地との比高差は約 60mで、南に北上川、東に北上川河口周辺、南西には遠く河南町・矢本町の水田地帯を眺望できる。 周辺の遺跡(第1図)を概観すると、北の丘陵南斜面に奈良・平安時代の遺跡が数多く存在し、丘 陵を利用した中世の館跡も比較的多く点在しているが、縄文時代の遺跡はやや希薄である。同一丘陵 上には、中世に山内首藤氏の本城であった七尾城跡などがあり、その北には山内首藤氏に関連する城



第1図 牧野巣山塚跡の位置と周辺の遺跡

散布地

47 釣ノ尾館跡

48 月迫山城跡

中世

中世

31 屋敷入C遺跡

32 屋敷入D遺跡

散布地

縄文後·晩期、古代

貝 塚

16 皿貝貝塚

跡として知られている中島城跡がある。北の丘陵南斜面には、縄文時代後・晩期の貝塚として知られている皿貝貝塚や、県指定史跡の和泉沢古墳群などがあり、北上川を挟んだ対岸の丘陵北斜面には中世の葛西氏関連の館跡と伝えられる福地館山城跡、釣ノ尾館跡などがある。

その他の遺跡としては、宮城県教育委員会が1998年度に調査した中世の大規模な板碑群である海蔵 庵板碑群が東へ約9kmの北上川(追波川)の河口付近にあり、本塚跡の周辺でも「永喜二年(1527) 丁亥三月日」の私年号板碑が知られている。

牧野巣山塚跡は新発見の遺跡であるが、塚跡の存在は古くから牧野巣地区に伝承として残っており、 牧野巣山には、往時、牧という名の鬼が住んでいて巣(居宅)を作っていたことからこの地名が起こったという伝説があり、山の東端に「鬼の墓」と伝えられていた塚と碑があったという(立花改進 1965)。 戦後まもなく、学生数名がこの塚の石碑の下を掘り返したという話があり、その後、樹木が生い茂り、 正確な位置などについては不明ということである。

第 章 発掘調査の成果

1.調査の方法と経過

本調査は、桃生郡皿貝川沿岸地区の土地改良事業に伴い実施されたものである。事業計画に従い、 丘陵上に農業貯水槽建設のため山林の伐採を行ったところ、塚跡が発見されたため、工事に先立ち、 1999 年 3 月 15 日に確認調査を行った。

確認調査は、遺跡の広がりを確認するため、丘陵東端の最も高い場所に位置する塚跡周辺(東調査区)とその西側の標高 60m程の平坦地(西調査区)の 2 ヶ所に調査区を設けて行った(第 2・3 図)。 東調査区は塚を中心に墳丘外の平坦面を含む約 340 ㎡、西調査区は幅 4m・深さ 12.5mのトレンチを東西に設けて 50 ㎡を調査した。その結果、塚は丘陵東端の頂部に一辺 12~13m、深さ 1m程の方形で、塚の外側から遺構は見つかっていない。また、西調査区は現表土直下が地山層となっており、漸移層が認められず、植林の際に大きく削られたものと判断され、遺構は検出されなかった。

確認調査の結果、調査が短期間で終了可能であることが判明したため、工事が中断される状況を考慮し、事前調査を 1999 年 3 月 17 日から行い、3 月 25 日に終了した。

調査は、撹乱坑の堆積土を除去した後、東西方向と南北方向に幅80cm程のトレンチ2本を設けて塚の盛土の状況の確認を行い、断面観察後に断面図を作成し、並行して現表土を除去して塚上の遺構の確認と塚の検出を行った。平面図の作成後、塚の中央部分約40m²の盛土を旧表土まで除去し、再度遺構の確認を行ったが、土壙などの施設は発見されなかった。

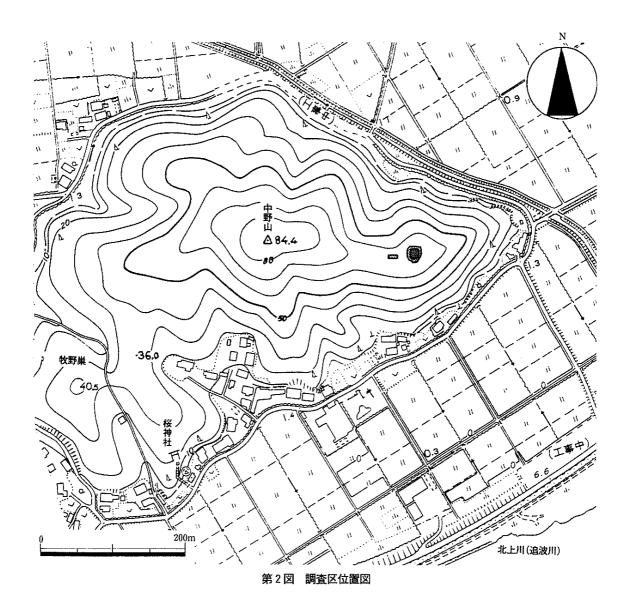
塚の平面図や調査区の位置などの記録に際しては、工事用基準杭SR1 2(国家座標値<第X系>X=-162981.776、Y=46634.554)とSL1 1+3(国家座標値<第X系>X=-162986.994、Y=46546.848)を基準とし、遺構平面図は縮尺 1/100、25 cmコンターで平板による地形測量を行った。断面図は1/20である。写真撮影は35 mm白黒フィルムとカラースライドフィルムを使用した。

基本層位は第 層が表土(10 Y R 3/2 黒褐色腐植土) 第 層が旧表土(10 Y R 2/1 黒色粘土) 第 層が漸移層(10 Y R 2/3 黒褐色粘土) 第 層が地山(10 Y R 4/4 褐色粘土)で、地山は風化礫を多く含み、場所によっては岩盤が見られた。

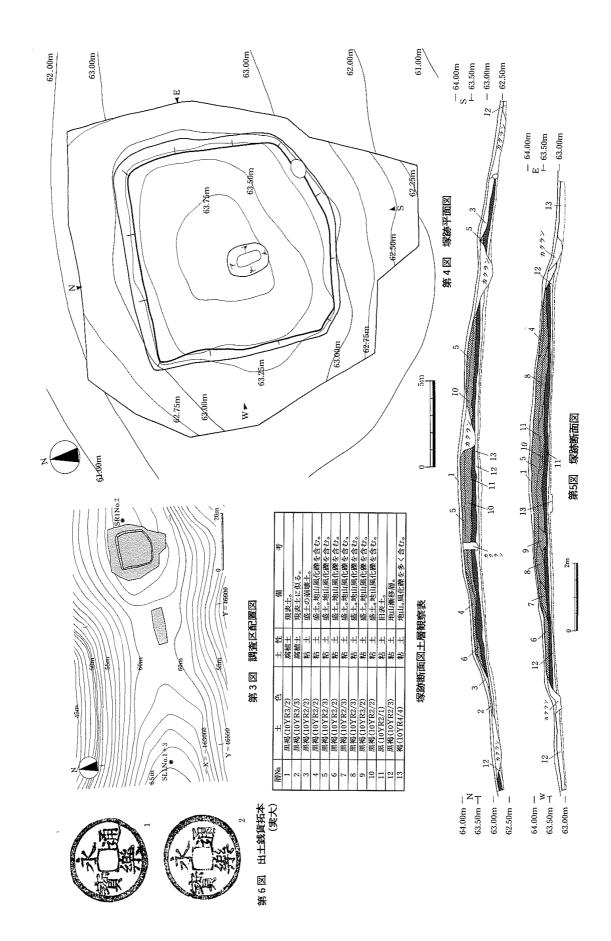
2. 発見された遺構と遺物

【第1号塚跡】(第4·5図)

雑木林であったために木の根による撹乱を受けており、塚の中央やや南西寄りには長径 2.6m・短径 1.8m、深さ 0.9~1.0mの撹乱坑が認められた。塚の規模は一辺 12.5~12.7m、残存状況で高さ約1mあり、平面形は方形を呈する。東・西・北辺は塚が築かれた当時の形をほぼ保っており、南辺については崩れや撹乱が見られた。断面観察の結果、盛土崩壊土は全体的に少ないが南辺でやや多く、平面での観察結果を裏付けるものであった。塚頂部はやや盛り上がっており、部分的にではあるが、段の縁辺部に 1.7m程の幅で高さ 30~40 cmのほぼ平坦な部分も認められた。なお、塚に伴うと考えられる遺構は検出されなかった。



123



塚は丘陵の頂部を利用し、旧表土と一部地山漸移層を方形に削り出した土を旧表土の上に直接積んで築かれており、塚の周囲2~4mの範囲で平坦な面が確認された。盛土は版築状に突き固められた状況は認められず、塚の上に建物などの構築物があった痕跡も認められなかった。東西トレンチの断面観察から、盛土の行程がおおよそ推定することが可能であり、方形に旧表土と一部漸移層を削り出して塚の基底部を築き、削った土を中央から何回かに分けて盛った後、形を整えるように全体を覆う盛土を行ったものと推定される。

遺物は、盛土内から粘板岩の薄板状の破片が7点出土しているほか、塚周辺から11点が見つかっている。文字などの刻字は認められないが、1m程の縦長の石材を板状に分割したもの3点のほか、一部加工を施し整形しているものがある。表採資料の1点に表面を工具で加工した痕跡が認められるものがあり、板碑と考えられる(写真図版10)、石材は稲井石である。また、塚のほぼ中央、撹乱坑の東側の旧表土から永楽通寶2点が出土している(第6図、写真図版9)。

第章 まとめ

今回の調査で、一辺 12.5~12.7m・残存高約 1mの方形を呈する塚が確認された。塚に伴う土壙などの遺構は見つかっていないが、塚中央部に掘られた撹乱坑の部分に遺構があった可能性も否定できず、現表土や周辺から見つかった板碑と考えられる破片や板石が、昔立っていたとされる碑の残骸である可能性も残されている。

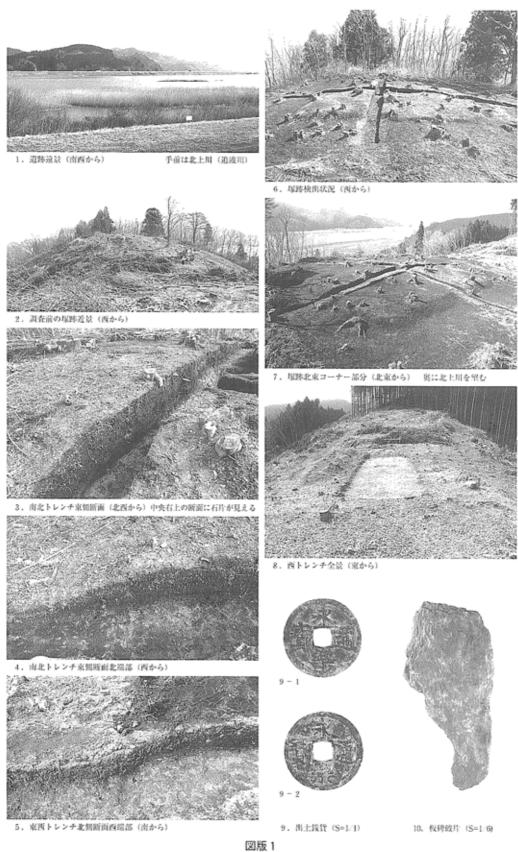
今回の調査で出土した粘板岩の板石は盛土からも出土しており、このことは塚を築く際に近くにあった板碑が壊された可能性が考えられる。板碑の造立は河北町・北上町では 1260 年代に始まり、16世紀に入ると激減し、ほとんど休止状態になり、最も新しい板碑は河北町長面の竜谷院の「慶長十七年(1612)」銘のもので、これ以降は近世造塔の盛期を迎えるとされている(勝倉元吉郎 1994)。また、旧表土から永楽通寶が2点出土しているが、武田健一氏が多賀城市大日北遺跡の資料をもとに東北地方の中世末から近世の墓を対象に銭貨の出土状況を分析し、墓中に埋納された銭貨のうち、渡来銭と古寛永銭が共伴するものが非常に少なく、渡来銭から古寛永銭への切り代わりが非常に急激であるとする結果を提示している。遺構の性格や出土状況が異なるため、一様に比較・引用は難しいが、これらの結果に従えば、牧野巣山塚跡の造営年代は、上限が永楽通寶の初鋳年である 1408 年を遡らず、下限は17世紀中葉までは下らない可能性が想定される。

引用・参考文献

勝倉元吉郎 1994 「第1章 中世編(板碑)」『北上川下流域のいしぶみ』宮城県桃生郡河北地区教育委員会 河北町誌編纂委員会 1975 『河北町誌』上巻

武田健一 1998 『大日北遺跡』 多賀城市文化財調査報告書第 49 集

立花改進 1965 『わがふるさとの町 飯野川』



報 告 書 抄 録

ふりが	な	みょう	だてレ	ょせき	ş								
書	名生館遺跡ほか												
副書													
巻	次							-					
シリーン	ズ名	宮城県文化財調査報告書											
シリーズ	番号	第183集											
編著者	名	阿部博志、村田晃一、茂木好光、伊藤裕、岩見和泰、天野順陽、吉野武											
編集機	関	宮城県教育委員会											
所 在	地	〒980-	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL022-211-3685										
発 行 年 月 日 西暦 2000年3月31日													
ふりがな	なふ		らりがな		コード			1	em-t-Jungar			STORES TO THE	
所収遺跡名	所	所 在 地		市田	市町村 遺跡番		北緯	東 経	調査期間	調査面積 (m²)		調査原因	
なようだていせま 名生館遺跡 宮城県古 名生館遺跡 宮城県古 場合を見る					048	27018	38度 36分 34秒	140度 53分 27秒	19991004~ 19991213	2,490		ほ場整備に 伴う事前調 査	
^装 充 造 赞	宮城県	A < りはらぐんたか し 果栗原郡高清 ぎかみはぎた ア上萩田		045241		26039	38度 38分 30秒	140度 59分 45秒	19990412~ 19990511	3,300		ほ場整備に 伴う事前調 査	
〈thith with 桑畑A遺跡	宮城県町沼倉	はらぐんくりこま 県栗原郡栗駒 らあざくわはた 今字桑畑		045233		43055	38度 53分 25秒	140度 57分 0秒	19991004~ 19991027	88		灌漑排水事 業に伴う事 前調査	
いつほんやながいせま 一本 柳遺跡 - 本 都 遺 跡	宮城県たまちい	なまだぐんこで ・ ・ は遠田郡小牛 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・		045039		39044	38度 31分 26秒	141度 5分 42秒	19991118~ 19991122	1,800		ほ場整備に 伴う事前調 査	
牧野巣山塚跡	宮城県北京大学	ならのうぐんかほく 県桃生郡河北 東の東東山 文野巣山		045616 66076		38度 31分 49秒	141度 22分 6秒	19990317 , 18,24 , 25		390	土地改良事 業に伴う事 前調査		
所収遺跡名	種	別主な問		护代	主な遺		構	主	な遺物		特	記事項	
	集落跡		古 f	t	掘立柱建物路立柱列跡1、 14、竪穴状道 土壙56、溝路		井戸跡 土師器、 【構10、 石器		須恵器、木製品、		名生館官衙と密接 に関わる集落、関 東系土師器出土		
名生館遺跡	城跡	城 跡 中		世			中世陶器(常滑産)、青		青磁	滋 名生城に関わる遺 構			
萩田遺跡	集落跡	縄文、 生、古 近世		弥 代、 掘立柱建物路		亦3、溝跡	縄文土器、弥生土器、 師器、青磁、土偶、石		土				
桑畑A遺跡	集落跡	編文後期 前葉			竪穴住居跡 1 、土壙 21、柱穴			縄文土器、石器(剝片石 器、礫石器)、剝片					
一本柳遺跡			古 f	古代 駐畔状遺構土壌3		、溝跡6、							
小沼遺跡	集落跡	中世		<u>t</u>	掘立柱建物跡2、溝跡 1								
牧野巣山塚跡	塚跡	j.	中近世	<u>t</u>	塚跡	F1		銭貨2、	板碑破片1				